

口頭発表		A会場（Zoom1）		B会場（Zoom2）		C会場（Zoom3）	
セッション1	司会(補助)	久保蘭 愛（矢田 勉）		中澤 光平（岡田 一祐）		永谷 直子（堤 良一）	
	ホスト	岩田 美穂		櫛引 祐希子		中崎 崇	
	13:00 13:40	A-1 p. 1	組合せ本『倭訓栞』における 本文異同 小野 春菜 （国立国語研究所）	B-1 p. 25	日琉祖語における 所有人称標示の痕跡 白鳥 詩織 （京都大学学生）	C-1 p. 49	日本語では「何が」「渋滞する」のか ―「国立国会図書館全文テキスト データ」・新聞記事・ Xに見る用法の変遷― 岡田 祥平 （新潟大学）
	13:50 14:30	A-2 p. 7	計量的手法による 日本漢文の文体分析 ―古記録と説話集のMVR・ 名詞率を中心に― 小玉 花菜 （北海道大学学生）	B-2 p. 31	群馬県中之条町方言の 形容詞のアクセント 高山 林太郎 （宇都宮大学）	C-2 p. 55	接頭辞「没-」の 意味特性に関する一考察 ―「存在性の否定」を中心に― TRAN QUOC HIEP （大阪大学）
休憩（20分）							
セッション2	司会(補助)	小出 祥子（久保蘭 愛）		有田 節子（中澤 光平）		佐伯 暁子（永谷 直子）	
	ホスト	岩田 美穂		櫛引 祐希子		中崎 崇	
	14:50 15:30	A-3 p. 13	中世武家家訓における 格言集の引用について 片山 鮎子 （沖縄工業高等専門学校）	B-3 p. 37	逗子市小坪漁港の漁業者集団語の 言語イメージと漁場名の考察 佐藤 旺斗 （東京海洋大学学生）	C-3 p. 61	『今昔物語集』の主格標示 ―文体的性格に着目した分布の相違― 大金 奈央 （名古屋大学学生）
	15:40 16:20	A-4 p. 19	室町時代の書状における 依頼の文章構造 ―『言継卿記』紙背文書を例に― 山本 久 （京都大学）	B-4 p. 43	琉球諸語の言語資源のコーパス化 ―同源性接続枠組に基づく提案と 実現性検証― セリック ケナン エイデン コールマン トレバー スレビン 横山 晶子 （国立国語研究所）	C-4 p. 67	「かなり」の機能拡張の通時的検討 山田 恭子 （筑波大学学生）
休憩（10分）							
大会式典会場（ovice）							
司会（補助）		高木 千恵（矢田 勉）					
16:30 16:50		大会式典		会長挨拶 日本語学会会長 木部 暢子 学会賞授賞式			
10:00-16:20 オンライン談話室（ovice）						会場担当：大槻 知世	
16:50-17:50 オンライン懇親会（ovice）						司会：高木 千恵 会場担当：大槻 知世	

オープン学生セッション（ovice）					
セッション3	会場担当	林 由華・森 勇太（会場全体） 岡田 一祐・小出 祥子・矢田 勉・山本 佐和子（オープン学生セッション）			
	10:00 11:00	オープン学生セッション(G-1～G-9) 予稿集はありません G-1 「Xの次に（形容詞）（名詞）はYだ」類で「X<Y」となる条件 安食次暁（國學院大學学生） G-2 『細雪』における長い文の形成と連体修飾節を含む名詞句の内部構造 加藤明矢（立命館大学学生） G-3 生成AIのプロンプト設計による言語間性能差への影響 高山修輔（公立はこだて未来大学学生） G-4 日本語形容詞における主観性の構文的実現—述語・連体・連用の対照から— 段建秀（北海道大学学生） G-5 接続助詞シの用法の変遷—近世に見られる変化— 石井綾（大阪大学学生） G-6 歌舞伎・浄瑠璃の外題の造字法 小川稜真（就実大学学生） G-7 じゃんけん遊びの掛け声におけるリズム規則適用の試み —三重県桑名市多度町における組分けじゃんけん掛け声の変化を起点に— 水谷亮翔（東北大学学生） G-8 「AI」の定着過程から見る外来語の役割—「人工知能」との比較によって— 山本梨緒（明治大学学生） G-9 2拍語における母音無声化の計量的類型研究—音構造と品詞の視点から— 星野稜奈, 松井輝帆, 岩崎彩乃, 小澤光琉子, 園みどり, 土屋クララ, 土屋キララ（フェリス女学院大学学生）, 鈴木理央, 池田紫緒, 滝澤あかり, 吉岡優作, 柿内優尚, 見目匠, 河下陽香, LEE Junsuk, 堀成美, 野村菜々美, 富岡由梨, 小寺杏珠, 小野島紅捺（明治大学学生）			
	フリータイム（15分）				
ポスター発表／オープン学生セッション（ovice）					
セッション4	会場担当	林 由華・小出 祥子（会場全体）, 堤 良一（P-1）, 山本 佐和子（P-2） 岡田 一祐・佐伯 暁子・森 勇太（オープン学生セッション）			
	11:15 12:15	P-1 依頼発話における配慮方略の使用にみられる 性別差の経年変化 —岡崎敬語調査（1953・1972・2008年）の 方略カテゴリー別分析— p. 73 加藤 恵梨 （愛知教育大学）	P-2 文数の傾向から見た中古和文資料 p. 79 泉 沙希 （筑波大学学生）	オープン学生セッション(G-10～G-16) 予稿集はありません G-10 岩手県・宮城県における「気づかない方言」としてのタ形使用の実態 中村吏玖（東北大学学生） G-11 日本語の「なら」の意味・機能とアラビア語訳における表現選択 Hagar Abdelfattah Youssef Mohamed Youssef（立命館大学学生） G-12 反義関係にある形容詞の比喩的用法—「厚い」「濃い」「薄い」を中心に— DOBAL Agustín（大阪大学学生） G-13 「自体」の提題性獲得の史的変遷—近代から現代を中心に— 黄秋実（名古屋大学学生） G-14 日本漢音と広東語との対応関係についての考察 蔣浩宇（神戸大学学生） G-15 カラ節内に存在する「名詞＋ハ」の主節との関係についての考察 上田史琉（電気通信大学学生） G-16 顔文字と感情形容詞文における感情理解パターンの計量的研究 朱雨涵, 小畑晴菜, 青木心優, 麻生波沙, 宮田りほ, 山内杏珠, 菅原凜, 本屋菜々美, 若月朝音, 目黒莉沙, 中村凪沙, 佐々木美穂（フェリス女学院大学学生）	
	フリータイム（15分）				
休憩（60分）					
シンポジウム会場（Zoom4）					
セッション5	司会	田村 早苗・幸松 英恵			
	ホスト（補助）	森田 耕平			
	13:30 16:30	S シンポジウム 独り言（独話）の言語学 思考と伝達—独り言論の展開— 森山 卓郎（早稲田大学） 疑似独話の疑似性をめぐって 野田 春美（神戸学院大学） 発話機能論から見た「独話」—独話的疑問表現を中心に— 山岡 政紀（創価大学） 「と」と独り言—自分のディスコースに独り言を取り込むことについて— 山口 治彦（神戸市外国語大学） p. 85 企画担当 田村 早苗・幸松 英恵			
談話室		10:00-16:30 オンライン談話室（ovice） 会場担当：森 勇太・大槻 知世			
書籍展示ブース		10:00-13:30 オンライン書籍展示（ovice：オンライン談話室内）			

組合せ本『倭訓栞』における本文異同

小野 春菜 (国立国語研究所)

はじめに

本発表では、近世中期に成立した辞書体資料『倭訓栞』(安永6年〈1777〉～明治20年〈1887〉)の「ま」行以降の草稿の転写本である「組合せ本」に注目する。

『倭訓栞』の出版は110年に及び、三編(前編・中編・後編)から構成されている。著者・谷川士清の没後翌年から遺稿を元に出版を開始したため、後人の補訂も認められる。また、中編は文久2年(1862)、後編は明治20年(1887)に一括で出版されているのに対し、前編は「あ～そ」、「た～ほ」、「ま～お」と、3回に分けて、約50年をかけて出版されている。小野春菜(2026)は、組合せ本と同系統の写本が日本各地に10種ほど見られること、なかには文化9年(1812)の奥書を有する資料があることを指摘する。前編「た～ほ」部は文化2年(1805)、前編「ま～お」部は文政13年(1830)に出版されている。つまり、組合せ本系統に属する写本が複数存在する理由として、未刊であった前編「ま」部以降を読み手が補う目的があったと推測される。

組合せ本系統に属する写本として、三澤薫生(2011)は4種類の写本を例示しつつ、「これに類する稿本は冊数を異にするが、いずれも同一祖本に基づく転写本である」と指摘する¹。4種類の写本を対照した上で本文に異同が見られないとするならば、小野春菜(2026)が示す他の写本も同種の本文を有すると解される。

ただし、小野春菜(2025)は、東京家政学院大学附属図書館大江文庫蔵「や」部写本(144921、大江本)と、津市立津図書館稲垣文庫蔵「み」部写本(稲 L81-1、稲垣本)をもとに、見出し項目の数量や語釈の異同から、河北景楨筆谷川清逸転写本(清逸本)の成立前後に位置する草稿の転写本と明らかにする。また、平井吾門(2017)は、弘前市立弘前図書館蔵「ま」部写本(請求記号 W813-8, 弘前本と仮称)を「組み合わせ本に近い様子が見受けられる」と推定しつつも、「都立本や東大本には見られない見出し項目も収められて」と指摘する²。組合せ本と異なる本文を有する写本が確認できることから、弘前本や、組合せ本の「同一祖本に基づく転写本」という前提には疑問が生じる。

そこで、発表者が所在を確認し、組合せ本系統の写本と判断した11種と弘前本・大江本・稲垣本との対照を行ったうえで、組合せ本系統の写本の本文異同について検討する。

¹ 三澤薫生(2011)は、東京都立中央図書館蔵本12冊、東京大学総合図書館蔵本7冊(D20-213)、尾崎知光旧蔵本10冊、三澤薫生蔵本13冊を例示する。なお、三澤薫生(2007)にも同様の指摘がある。

² 「都立本」は、東京都立中央図書館特別買上文庫蔵「和訓栞」(特217)、「東大本」は、東京大学総合図書館田中芳男文庫蔵「倭訓栞 前編45巻(存28巻)」(D20:213)の写本部分(BB19118324)を指す。小野春菜(2025)は、平井吾門(2017)の指摘する項目が「まろと」「まろね」の2項目と推定する。

1. 組合せ本の先行研究

三澤薫生（2007）は、太田全斎『俚言集覧』における組合せ本使用について指摘する。清逸本と組合せ本の異同として、整版本中編所収の「まなべ」「わすれじも」項、後編所収の「やたら」「よみや」「おとゝえ」項を例示し、太田全斎の組合せ本使用を強調する。

また、組合せ本系統の写本4種を対照し、見出し項目「おいすかふ」が、東大本は「おいぞかふ」、三澤薫生蔵本は「おひそがふ」、尾崎知光旧蔵本は「おいすがふ」と仮名遣いや清濁が異なる点を指摘する。平井吾門（2016）は本項目を取り上げて、組合せ本が「細かな表記の差異を比較することには適し難い資料」と評する。また、東大本と都立本とを校合したうえで、「もし、更なる他本との比較で大きな修正点があれば後日補訂したい」と述べ、注で三澤薫生（2008）が指摘する東北大学図書館蔵本（丁 A2-2/11）を補足する。

小野春菜（2025）は、大江本と稲垣本を使用し、組合せ本・清逸本・整版本と対照した結果、大江本と稲垣本が組合せ本とは異なる原稿を転写したものと推定する。そして、「組合せ本→大江本（「や」部）→清逸本→稲垣本（「み」部）」の順に原稿が成立し、整版本へ至る可能性を指摘する。ただし、組合せ本を大江本の前に位置づける確証はない。

他の零本として、平井吾門（2017）は弘前本を翻刻する。また、弘前本には「都立本や東大本には見られない見出し項目も収められて」いることから、「詳細な調査が求められる貴重資料であることは疑いない」と指摘する。そうすると、本資料が大江本、稲垣本と同様に組合せ本系統ではない可能性を探る必要もあるように思われる。前出の小野春菜（2025）は、弘前本の見出し項目が399、組合せ本の見出し項目は402と指摘する。組合せ本には、弘前本の「まろと」「まろね」項がない。同様に、組合せ本にある「まけじだましひ」項が、弘前本にはない³。清逸本にはいずれも掲載されており、「まけじだましひ」、「まろね」項は整版本前編、「まろと」項は整版本中編に収められている。

そこで、「組合せ本にはなく弘前本のみに見られる」2項目（表1・AB。以下同様に表示）、「弘前本にはなく組合せ本に見られる」1項目（C）、同様に「稲垣本のみに見られる」9項目（D-L）、「大江本のみに見られる」1項目（M）、「大江本にはなく組合せ本に見られる」1項目（N）の合計14項目について、組合せ本15種の収録状況から確認する。

2. 組合せ本15種と弘前本・稲垣本・大江本の対照

組合せ本15種と弘前本・稲垣本・大江本の見出し項目を対照すると、組合せ本にはなく、弘前本・稲垣本・大江本にはある12項目は、15種すべてで未収録だった。また、弘前本・大江本にはなく、組合せ本にはある各1項目が、15種すべてに収録されていた。

³ 弘前本の4項目の語釈に5項目が同置されている。具体的には、「まを」項の語釈末に「まをす」項、「まくなぎ」項の語釈末に「まくらこと」項、「まつりごと」項の語釈末に「まつがさね」項、「まとまうし」項の語釈に「まとをうつこゑ」項、「まどこおほふゝすま」項がある。いずれも改行位置だが、原資料未見のため、これらの5項目はいったん見出し項目の数に含めなかった。

表1 組合せ本 15 種と弘前本・稲垣本・大江本の対照

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
A	まろと	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
B	まろね	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
C	まけじたましひ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
D	みうけ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
E	みえいだう	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
F	みをりのみき	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
G	みをはやながら	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
H	みかむ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
I	みがため	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
J	みかのほら	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
K	みきこえ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
L	みけもたする	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
M	やはり	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
N	やうじやう	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

これにより、三澤薫生（2011）が解する「同一祖本に基づく転写本」の可能性が証明されたように思われる。しかし、この結果は見出し項目に限定されており、事実、見出し項目にも仮名遣いや清濁の異同は認められる。語釈の異同が大幅に見られないことで、組合せ本が「同一祖本に基づく転写本」とはじめて言えよう。

3. 組合せ本 15 種の本文異同

前掲した表1のように、組合せ本系統の写本 15 種の見出し項目の収録・未収録には異同が見られなかった。ただし、15 種を比較すると、他本にも同じ書き入れを見出せる場合がある⁴。顕著な例として、三澤薫生（2007）が例示する「まなべ」項がある。組合せ本の語釈には「真鍋」、清逸本・整版本の語釈では「間鑑」とある。組合せ本 15 種でこの語を比較すると、いずれも「真鍋」である。ただし、尾崎本（別表 3）、真田本（別表 10）、臼杵本（別表 14）には、共通する書き入れ「間鑑ナルヘシ正色間色ト云ガゴトシ」がある。つまり、書写者による注記が脈々と書き継がれていることがわかる。

よって、三澤薫生（2011）が示す「同一祖本に基づく転写本」には、草稿をそのまま引き写した資料と、引き写しを転写した資料の両方を想定する必要がある。

⁴ 例えば、ケンブリッジ本（別表 15）の「みをのうきす」項では、隣接する「みをりのまつり」項との間に細字で 3 行分の記載がある。他本を確認すると、駒場本（別表 8）の押紙の書き入れと一致する。駒場図書館本をもとに、ケンブリッジ本が転写された可能性が高い。

弘前本の「まなべ」項では、語釈に「間錯」とある。自筆本には「まなべ」項がないため、尾崎本・真田本・白杵本の書き入れをもとに「真鍋」から「間錯」へ修正した可能性が想定される。そこで、弘前本に見られない「まけじたましひ」項を対照すると、語釈の「不負於族」には、尾崎本・白杵本のように各字に訓を付す場合と、東北三矢本（別表5）・川越本（別表7）のように「不負」に「ウカラ」の訓を付す場合が確認できる⁵。

表2 組合せ本15種における「まけじたましひ」項の比較

見出し項目	語釈	写本（番号は別表と対応）
○まけじたましひ	不 _レ 負於族	2 東大本、4 三澤本
○まけじたましひ	不 _レ 負 ^{ウ カラ} 於族	5 東北三矢
まけじたましひ	不 _レ 負 ^{ウ カラ} 於族	7 川越本
○まけじたましひ	不 _レ 負於族	11 射和本、12 広島本、13 岡山本
○まけじたましひ	不 _レ 負 _レ 於 _レ 族	9 平田本
○まけじだましひ	不 _レ 負 ^{ウ カラ マケジ} 於族	1 都立本
○まけじだましひ	不 _レ 負於族	8 駒場本、15 ケンブリッジ本（○ナシ）
○まけじだましひ	不 _レ 負 ^{マケ} 於 ^{ヤカラ} 族	14 白杵本
○まけじだましひ	不 _レ 負 ^{マケ} 於 ^{ウカラ} 族	3 尾崎本
○まけじだましひ	不負於族	6 東北狩野、10 真田本

清逸本では「○まけじたましひ」「不_レ負於族」、整版本では「まけじだましひ」「不_レ負^{ウ カラ マケジ}於族」（前編巻29・9丁表）と確認できる。そのため、「不負於族」の文字列に「ウカラマケジ」の仮名を付すようになることも想定される。しかし、尾崎本・真田本・白杵本では、見出し項目の「ひ」を「み」とする。『倭訓栞』には「たましひ」項があり、語釈には「玉火の義 しは助語也」とある。この語釈は自筆本にも整版本にも見られることから、「ひ」から「み」へ修正することは語源説に反する上に、修正の意図を見出せない。つまり、尾崎本・真田本・白杵本から清逸本へと発展する道筋は認めにくいといえる。

平井吾門（2016）は、組合せ本の「ら」行部には整版本中編所収項目が見られないことを指摘する。この事実と合わせると、組合せ本を清逸本から整版本へと続く同一線上に置かずに議論する余地があるように思われる。今後の課題として、検討を加えていきたい。

おわりに

本発表では、三澤薫生（2011）が組合せ本を「同一祖本に基づく転写本」と解する点を追究すべく、先行研究で指摘されている写本4種のほかに、発表者が組合せ本系統に属すると判断した写本11種の合計15種の本文を対照した。具体的には、平井吾門（2017）が

⁵ 都立本は、整版本と校合した書き入れが認められるため、整版本から振仮名を転記した可能性はある。

翻刻する弘前本（「ま」部写本）、小野春菜（2025）が指摘する大江本（「や」部写本）、稲垣本（「み」部写本）という3種の零本と、組合せ本との異同に焦点をあてた。結果として、「同一祖本に基づく転写本」という指摘に対しては、草稿をそのまま引き写した資料と、尾崎本・真田本・臼杵本のように引き写しを転写した資料の両方を想定する必要があることが確認された。いずれの写本を使用すべきか、言うなれば、組合せ本の「善本」がなにかについては議論の余地が残されており、平井吾門（2016）が指摘する「細かな表記の差異を比較することには適し難い資料」という位置づけは払拭しにくい。また、本発表では組合せ本の位置づけを判断するには至らなかった。今後の課題としたい。

組合せ本系統の写本が15種あることから、未発表の原稿が各地で転写され、重宝されていた事実がうかがえる。この事実は、注記までもが書き写されている点からも強調される。また、弘前本、稲垣本、大江本は零本であり、一見すると、資料としての価値が一段低く見積もられる。しかし、遺稿をもとに編纂された『倭訓栞』において、後人ではなく、著者・谷川士清による草稿は大いなる価値があると判断できる。谷川士清が当初想定していた『倭訓栞』や、再編を余儀なくされて加除修正を行う過程を探る資料として、十分に検討すべき余地があるといえる。組合せ本とともに今後も追究したい資料と考える。

参考文献 URL はいずれも 2026 年 9 月 17 日閲覧

小野春菜（2023）「写本で伝わる『倭訓栞』」谷川士清の会編『まなびの栞』11 / 小野春菜（2025）『『倭訓栞』零本の見出し項目』訓点語学会第132回研究発表会（2025年5月25日・於京都大学） / 小野春菜（2026）「十九世紀における『倭訓栞』の受容」藤本灯編、阿辻哲次・池田証寿監修『字典・詞典の研究』勉誠社 / 平井吾門（2016）「「ら行」部の変遷から見る組み合わせ本倭訓栞の価値について」『弘前大学教育学部紀要』115（第1分冊） <http://hdl.handle.net/10129/6186> / 平井吾門（2017）『【研究ノート】〈資料〉翻刻 弘前市立弘前図書館蔵組み合わせ本『倭訓栞』「ま」部』『弘前大学国語国文学』38
三澤薫生（2007）「もう一つの『和訓栞』稿本―『俚言集覧』の『和訓栞』について―」『和洋國文研究』42 / 三澤薫生（2008）「河北景楨筆、谷川清逸書写『倭訓栞』稿本について（上）」『和洋女子大学紀要人文系編』48 / 三澤薫生編（2008）『[谷川士清/自筆本]倭訓栞 影印・研究・索引』勉誠出版 / 三澤薫生（2011）『『和訓栞』の諸本と使用上の注意』谷川士清先生三〇〇年記念事業実行委員会編『士清さん 谷川士清生誕三百年記念誌』 / 弘前市立弘前図書館「弘前図書館蔵書目録 和装本の部その1」
https://www.city.hirosaki.aomori.jp/tosho/old/wasobon_1.pdf

付記

資料調査に際し、東京都立中央図書館、川越市立図書館、東京大学駒場図書館、国立歴史民俗博物館、真田宝物館、射和文庫、岡山大学附属図書館、臼杵市文化財センター、津市立津図書館、東京家政学院大学附属図書館、石水博物館に所蔵資料の閲覧ならびに資料の撮影許可やデジタル画像を共有いただいた。また、三澤薫生先生には蔵書の閲覧・撮影許可をいただいた。学恩に深く感謝申し上げます。本研究は JSPS 科研費 JP24K16088 の助成を受けたものです。

[別表] 対照に使用した組合せ本系統の写本一覧

1~4 は三澤薫生（2007）、5 は三澤薫生（2008）による。6~15 は発表者による調査。

	所蔵先	請求記号	冊数	備考
1	東京都立中央図書館 特別買上文庫	特 217	12 冊	
2	東京大学総合図書館 田中芳男文庫	D20:213	7 冊	https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100451612/947?ln=ja
3	尾崎知光旧蔵本	—	10 冊	三澤薫生（2007）「拙蔵 a 本」
4	三澤薫生蔵本	—	13 冊	三澤薫生（2007）「拙蔵 b 本」
5	東北大学附属図書館	丁 A2-2/11	3 冊	三矢重松旧蔵本 https://touda.tohoku.ac.jp/collection/database/library/10050010002323?page=317
6	東北大学附属図書館 狩野文庫	4/9517/34	10 冊	https://touda.tohoku.ac.jp/collection/database/library/10010000017188?page=943
7	川越市立図書館	W 813/Ta88/ 25-37	13 冊	
8	東京大学駒場図書館 一高文庫	八:い:20	8 冊	
9	国立歴史民俗博物館 平田篤胤関係資料	H-1615-9- 4-95	4 冊	
10	真田宝物館	典籍 14-1- 80	13 冊	
11	射和文庫	XI-30	4 冊	
12	広島大学図書館	大国 329	1 冊	前編「は〜ほ」部の書写を含む https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100270224/673?ln=ja
13	岡山大学附属図書館 小野文庫	813-8	12 冊	
14	白杵市文化財センター	八門-雑- 123	4 冊	
15	ケンブリッジ大学図書館	FJ.471.39	1 冊	https://cudl.lib.cam.ac.uk/view/PR-FJ-00471-00039/1

計量的手法による日本漢文の文体分析 —古記録と説話集の MVR・名詞率を中心に—

こ だ ま か な
小玉 花菜(北海道大学大学院生)

1. 本研究の背景と目的

日本語の文体の史的研究について、近年、「日本語歴史コーパス」(以下、CHJ)を用いた計量的研究が成果を上げている。例えば大川(2023)は、CHJ を用いて、上代から中世にかけての文学作品を対象に文体的特徴を分析している。ただし、CHJ に収録される平安時代の資料は『源氏物語』をはじめとする仮名文学作品が中心であるため¹、日本漢文の資料はまだこうした計量的な文体研究の対象になっていない。しかし逆に言えば、古記録などの日本漢文にも分析対象を拡張することで、仮名文との共通点や相違点が検討可能になり、平安時代の文体研究は広がりを得ることになる。

日本漢文は、訓読をもとに「日本語文を記載した文章様式」(峰岸(1986))である。それゆえ、これを仮名文とは別個のものとして扱うだけでなく、共通の尺度によって両者を比較することにも、日本語文全体に視野を広げるという点で意義がある。ただし、表記体を異にする資料を同列に扱ってよいかどうかは、それ自体が検証を要するものである。

そこで本研究では、第一に、表記体を異にする『三宝絵』三伝本の MVR・名詞率が近似することを示す。あわせて、『宇治拾遺物語』の算出値を参考として、説話集に共通する文体的特徴が存する可能性を検討する(第 3 節)。第二に、品詞比率を手がかりに、日本漢文で書かれた他のジャンルの資料である古記録についても、その文体的特徴を検討する(第 4・5 節)。あわせて、古記録内部に見られる資料間の差についても補足的に検討する(第 6 節)。

総じて本研究では、古記録と説話集がいかなる文体的特徴を有するのかを明らかにする。

2. 分析方法と分析対象資料

2.1 本研究で用いる分析指標

本研究では、文体を計量的に把握する指標として、MVR と名詞率を用いる。

MVR は、樺島・寿岳(1965)が紹介した分析指標であり、以下の計算式により算出される。

$$\text{MVR} = (\text{形容詞数} + \text{形容動詞数} + \text{副詞数} + \text{連体詞数}) / \text{動詞数} \times 100$$

MVR が低い文章ほど「動き」を表現する傾向が強く(動詞の占める割合が相対的に高い)、MVR が高い文章ほど「ありさま」を表現する傾向が強い(修飾語の割合が高い)と解釈される。

また、名詞率は、MVR と同様に樺島・寿岳(1965)が紹介した指標であり、以下の計算式により算出される。

$$\text{名詞率} = \text{名詞(代名詞を含む)} / \text{総自立語数} \times 100$$

名詞率が高い文章は、「要約的な文章」(細部は描写せず、骨組みを示す)、名詞率が低い

¹ 現在 CHJ(平安時代編)に収録される漢文資料は、「西大寺本金光明最勝王経平安初期点」(訓点資料)、「尾張国解文」「法華百座聞書抄」「高山寺本古往来」(漢文系資料)の4点である(2026年9月10日時点)。

文章は、「描写的な文章」(修飾語を用いて細部(動きやありさま)を描写)と解釈される。

2.2 MVR および名詞率を算出するための形態素解析の方法

MVR・名詞率を算出するための形態素解析には、「Web 茶まめ」を用いた。時代・口語／文語別の辞書から選択する必要があるが、本研究では「中世文語」辞書を使用した。「中古和文」辞書は平安時代の仮名文学作品の解析に適した辞書であるが、本研究の分析対象は日本漢文の訓読文である。そのため、対象資料よりやや時代は下るものの、鎌倉・室町時代の軍記等の書き言葉資料を想定した「中世文語」辞書の方が、辞書の性格上適切であると判断した。

Web 茶まめによる自動解析の結果は、CHJ『平安時代編』の「形態論情報規程集」における長単位認定規程を参照し、単位境界および品詞情報を適宜手作業で確認・修正した。同規程において長単位は、言語の構文的機能に着目した単位であり、文節を認定した上で、その内部を自立語部分と付属語部分とに分割して認定される。また、長単位解析は短単位解析結果を基に構成され、語彙素・品詞等の情報が付与される。本研究でもこれに準じ、複合語・敬語表現等を含めて長単位相当の単位で集計した。

2.3 分析対象資料

各資料の対象範囲・品詞別語数について、これを表 1 として示す²。

説話集は、『三宝絵』³・『宇治拾遺物語』を対象とする。特に、『三宝絵』は、ひらがな本・カタカナ本・変体漢文本の三伝本⁴を扱うことで、表記の違いによる文体差の有無を検証する。

古記録については、『権記』『御堂関白記』『小右記』『春記』を対象とする。本文には、「摂関期古記録データベース」に公開されている訓読文を用いる。

【表 1 分析対象資料・対象範囲・品詞別語数】

	動詞	形容詞	形容動詞	副詞	連体詞	名詞	代名詞	接続詞	感動詞
三宝絵(ひらがな本)	2953	296	104	342	184	4015	253	25	2
三宝絵(カタカナ本)	8629	972	297	1041	617	12208	668	74	3
三宝絵(変体漢文本)	7809	958	250	889	619	11362	609	116	6
権記 (長徳 1～3 年: 78 帖)	2099	39	7	257	113	3317	55	242	0
御堂関白記 (長保元年～寛弘元年 2 月 10 日: 213 帖)	1158	55	3	62	36	2643	48	77	0
小右記 (正暦元年: 132 帖)	1330	52	14	138	57	2575	27	105	0
春記 (長暦 2 年 1 月 2 日～9 月 30 日: 42 帖)	1647	71	25	258	169	2580	199	228	0

² 『宇治拾遺物語』の MVR および名詞率については、大川(2023)にて算出された値を用いる。ただし、本研究とは算出の基準が一部異なるため、比較に際しては、参考値として扱うにとどめる。

³ 永観 2 年(984)成立。18 歳で出家した尊子内親王のための仏教入門書として、源為憲により編まれた仏教説話集。

⁴ 『三宝絵』には、表記体が異なる三種の伝本が現存している(漢字とひらがなの東大寺切(ひらがな本)、漢字とカタカナの東寺本(カタカナ本)、変体漢文の前田本(変体漢文本))。なお、ひらがな本は欠損が多く、全てを合わせても、『三宝絵』全体の 3 分の 1 程度の分量であるため、扱う際には注意が必要である。

3. 説話集における MVR・名詞率の算出結果

【表 2 各資料の MVR および名詞率(表 1 より算出)】

説話集	MVR	名詞率	古記録	MVR	名詞率
三宝絵(ひらがな本)	31.36	52.21	権記	19.82	55.02
三宝絵(カタカナ本)	33.92	52.54	御堂関白記	13.47	65.92
三宝絵(変体漢文本)	34.78	52.93	小右記	19.62	60.54
宇治拾遺物語	31.13	41.47	春記	31.75	53.68

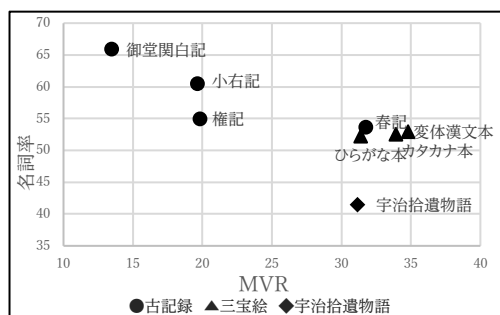
『三宝絵』三伝本について MVR と名詞率を算出した結果、MVR は三伝本ともおおむね 30% 台前半から半ばに位置し、名詞率についても 52～53% 程度となった(表 2)。この結果からは、『三宝絵』三伝本は、ひらがな・カタカナ・変体漢文と表記体を異にしているにもかかわらず、両指標には大きな差が認められないことがわかる。さらに、仮名書きの説話集『宇治拾遺物語』は、MVR が約 31%、名詞率が約 41.5% である。『三宝絵』三伝本と『宇治拾遺物語』は、漢文と仮名文という表記上の相違がありながら、とりわけ MVR について近似した値を示す。

MVR については、『三宝絵』三伝本間に加え、『三宝絵』三伝本と『宇治拾遺物語』との間にも顕著な隔たりが見られない。このことから、MVR 値の近似は、説話集に共通する叙述上の特徴を反映している可能性がある。この結果は、漢文と仮名文とを別個の文体としてのみ捉えるのではなく、共通の分析指標を用いて両者を水平的に比較し得ることを示すものと考えられる。

以上の結果を手がかりに、第 4 節では、日本漢文で書かれた他ジャンルの資料として古記録を取り上げ、共通の分析指標(MVR・名詞率)を用いて、その文体的特徴を分析する。

4. 古記録における MVR・名詞率の算出結果

次に、古記録を取り上げる。表 2 からは、『権記』『小右記』『御堂関白記』については、MVR が約 13～20% となり、『三宝絵』および『宇治拾遺物語』の約 30% 台と比較して明らかに低い値を示すことがわかる。一方、『春記』については約 32% となり、他の古記録とは異なる値を示している。この点については、第 6 節で改めて触れる。また、名詞率について見ると、古記録では説話集と比較して高い値となり、名詞の比重が高くなる傾向が認められる。



【図 1 古記録・説話集の MVR および名詞率】

図 1 は、古記録・説話集の MVR および名詞率を図示したものである。ここからは、『春記』はやや例外的な数値を示すものの、概して古記録には、説話集に比べて MVR が低く、名詞率が高くなる傾向が認められる。

第 5 節では、この古記録と説話集の差について、執筆目的および叙述内容の点から検討する。

5. MVR・名詞率が示す説話集と古記録の文体差

5.1 「ありさま」を叙述する説話集

説話集は、出来事の生起そのものを叙述するだけでなく、その出来事を一つの物語として叙述するものである。それゆえ、登場人物が何をしたかという行為のみならず「ありさま」、すなわち、その人物がどのような状態にあったか、場面がどのような様子であったか、行為がどの程

度・どのように行なわれたかといった情報も記述される。その結果、形容詞・形容動詞・副詞・連体詞等の修飾語が相対的に多くなり、MVR が高くなるものと考えられる。

したがって、『三宝絵』と『宇治拾遺物語』が表記体を異にしながら近似した MVR を示すのは、「説話」というジャンルが有する「ありさまを詳細に描写する」という文体的特徴が、MVR のような品詞比率に現れている可能性を示す。ここでいう「ありさまの描写」とは、必ずしも静的な情景描写だけを意味するものではない。人物の状態・行為の様態・程度・時間的推移等を付加しながら出来事を提示するという、説話の叙述全体に関わる特徴として捉える必要がある。

5.2 「出来事」を記録する古記録

一方、古記録の執筆目的は、その日に何が起こったかを記録することにある。特に、公家日記には、人物名・官職名・儀式名・場所名・日時など、その出来事を後に同定・参照するための情報が必要となる。また、「誰が参入した」「何を行なった」といった行為の記録も不可欠である。

そのため古記録では、文章に含まれる情報のうち、人物・物事を指示する名詞と、その人物の行為を示す動詞が重要な位置を占めると見込まれる。逆に、人物や場面のありさまを描写する修飾語は、説話の場合ほど重要ではないだろう。『権記』『御堂関白記』『小右記』において MVR が約 13～20% という低い値を示すことは、このような古記録の「出来事を記録する」性格を捉えたものと考えられる。

同時に、古記録に名詞が多いことも、その記録目的と密接に関係する。例えば、「参内した」という行為だけを記しても、それが誰によるものか、どのような官職の人物か、いかなる儀式に関わるのかが分からなければ、後に先例として参照するのは困難である。それゆえ、固有名詞・官職名・儀式名等を明示する必要が生じ、名詞率が高くなると考えられる。

このように考えると、古記録における低い MVR と比較的高い名詞率は、それぞれが独立した数値ではなく、いずれも「出来事をのちに参照可能な形で記録する」という実務的な目的と結びついていると考えられる。すなわち、古記録は人物や出来事の「ありさま」を詳細に叙述することよりも、「誰が、いつ、何をしたか」という出来事の記録を優先する文体だと解釈される。

5.3 古記録の「実務的文体」と物理的制約

さらに、このような古記録の文体については、その記録形態も考慮する必要がある。平安時代の公家日記は、多く具注暦⁵の空行・行間・余白等に日々の記事を書き込む形をとっており(高橋(2023))⁶、記録を記載する紙面には一定の物理的制約が存在したことが想像される。

限られた紙幅にその日の出来事を記す際、そのすべてを詳細に記述するのは困難である。そのため、まず残す必要があるのは、人物・日時・儀式名等の名詞的情報と、そこで何が行なわれたかという動作情報であったと考えられる。これに対し、程度・様態・評価等の付加的情報は、出来事そのものを特定する情報に比べれば省略される可能性が高い。こうした選択の結果が作用して、名詞率が高く、MVR が低い古記録の文体が形成された可能性もある。

もっとも、具注暦に書かれたという事実だけによって品詞比率が決定されると断定すること

⁵ 具注暦とは、陰陽寮の暦博士が作成した暦で、日付・干支をはじめ、日時・方角の吉凶、二十四気などの季節に関する暦注が書き込まれたものである(高橋(2023))。

⁶ このような、具注暦に記事を書き込む日記様式を「暦記」という。なお、10 世紀中ごろに右大臣・藤原師輔が記した『九条殿遺誡』によると、暦に書ききれない重要な公事などについては具注暦とは別の用紙(これを「別記」という)に記録していたという。

はできない。例えば、記事が長くなる場合には裏面や別紙を利用する場合があり⁷、また、記主の記録方針や官職、日記を後にどのように利用しようとしたかによっても記述量は変化し得る。したがって、具注暦の紙幅の制約は、「限られた紙面の中で実務上必要な情報を優先的に残す」という方向の記述を促した可能性がある。ただし、今回の分析から、その影響を直接確かめたものではない。

以上から、説話集と古記録の MVR・名詞率の差は、単なる語彙選択の差ではなく、各ジャンルの文章が果たす機能の違いと関係する可能性が考えられる。つきつめて言えば、説話集が人物・場面・行為の「ありさま」を修飾語によって詳細かつ具体的に叙述する文体であるのに対し、古記録は、出来事を名詞と動詞を優先的に用いて記録・保存することを目的とした実務的文体と位置づけることができる。

6. 古記録内部の文体差

ただし、古記録が一律に低い MVR を示すわけではない。『春記』は MVR が約 32% と、他の古記録より高い数値を示した。しかし、構成品詞別に見ると、『春記』の高い MVR には、とりわけ副詞・連体詞の比率の高さが関わっている。

【表 3 『春記』と『三宝絵』三伝本における MVR 構成品詞の比率】

資料	形容詞・形容動詞	副詞	連体詞
春記	5.83%	15.66%	10.26%
三宝絵(ひらがな本)	13.55%	11.58%	6.23%
三宝絵(カタカナ本)	14.71%	12.06%	7.15%
三宝絵(変体漢文本)	15.47%	11.38%	7.93%

表 3 は動詞数に対する修飾語数の比率である。『春記』は『三宝絵』三伝本に比べ形容詞・形容動詞の比率が低い一方、副詞・連体詞の比率が高い。すなわち、両者は近似した MVR を示すが、その構成品詞の比率には異なる傾向が認められる。

【表 4 『春記』の連体詞全 5 語・副詞上位 8 語】

連体詞	使用数	副詞	使用数
此の	102	ただ	31
其の	34	既に	25
彼の	30	尤も	24
所謂	2	早く	22
去る	1	同じく	16
		暫く	15
		猶	13
		更に	11

表 4 を見ると、『春記』における連体詞は「此の」「其の」「彼の」が計 166 例と全体の約 98% を占め、人物や事物を特定する語が中心となっている。こうした語の多用は、出来事を参照可能な形で記録する実務的文体の性格と整合する。一方、副詞の上位には「既に」「暫く」などが見られる。これらは、出来事の時間的な位置づけや持続を示し、その経過や関係を補足する叙述に関わると考えられる。また、「ただ」「尤も」など、用法によっては記主の判断・評価に関わる語も含まれており、副詞の使用は、出来事に関する情報の補足だけでなく、記主の捉え方を示す役割も担っている可能性がある。

以上から、『春記』の高い MVR は、直ちに説話集と同様の描写性を意味するものではないことが指摘できる。『春記』では、連体詞や副詞が MVR を押し上げており、これらの語の使用は実務的記録の性格とも整合する。すなわち、同程度の MVR を示す資料であっても、その値を構成する品詞や語の機能によって、文体的特徴は異なり得る。MVR による文体分析では、数値の高低に加え、構成品詞の比率と語の機能を併せて検討することが重要である。

⁷ 例えば、藤原師通の『後二条師通記』（陽明文庫蔵）には、対応関係にある 2 種類の写本（「本記」「別記」）がある。『後二条師通記』の本記・別記については、中丸貴史氏が分析を進められており、その成果は近年、書籍として発表された（中丸貴史（2019）『『後二条師通記』論：平安朝「古記録」というテキスト』和泉書院）。

7. 分析上の留意点と今後の展望

本研究の結果を解釈する上では、形態素解析の問題に留意する必要がある。本研究では漢文訓読文の性格を考慮して「中世文語」辞書を用いたが、分析対象資料の成立年代と辞書が主として想定する時代とは一致しない。そのため、解析結果を規程に照らして手作業で修正したもの、単位認定や品詞判定の妥当性については、なお継続して検討する必要がある。

その上で、本研究の結果は次の二つの方向に展開しうる。

第一に、日本漢文の内部を見渡す方向である。漢文で記された文書・法制資料や軍記物語など、古記録以外の漢文資料を共通の分析基準で測ることで、日本漢文の内部にどれだけの幅があるのかを示すことができる。

第二に、仮名文学作品の側へ還元する方向である。古記録を「実務的文体」と推定することは、逆に、仮名文学作品がいかなる文体であるのかを問い直す足掛かりともなる。また、漢文と仮名文を水平的に比較可能にする分析指標を用いることで、両者を地続きに分析できる。

加えて、「実務的文体」は、品詞比率以外の観点からも捉えられるはずである。その指標としては、例えば、文連接法(山口(1974))や疑問表現における助字の用法(磯貝(1999))などが挙げられる。これらを扱うことによって、「実務的文体」がいかなる論理性を包含する文体として解釈できるのかを明らかにできるだろう。

8. 本研究のまとめ

本研究では、説話集・古記録について、MVR および名詞率を算出し比較を行なった。

第一に、『三宝絵』三伝本は表記体が異なるにもかかわらず、MVR・名詞率がいずれも近似することを示した。また MVR については、『宇治拾遺物語』とも近い値を示した。ここから、これらの指標が表記に左右されないこと、またとりわけ MVR は、説話集というジャンルの叙述上の特徴が反映される可能性があることを指摘した。

第二に、古記録(『権記』『御堂関白記』『小右記』)は説話集よりも低い MVR となり、説話集よりも名詞率が高くなる傾向を提示した。これにより、人物や場面のありさまを修飾語によって具体的に叙述しようとする説話集に対し、古記録が「誰が、いつ、何をしたか」という出来事を記録・保存しようとする「実務的文体」である、という両ジャンルの文体的特徴を指摘した。

第三に、『春記』は説話集と近似した MVR を示す一方、副詞・連体詞の寄与が大きく、その使用語には、対象の特定や出来事の経過の補足に関わる語が多いことを示した。このことから、MVR の解釈には、構成品詞の比率と語の機能を併せて検討することが重要だと指摘した。

以上の結果は、日本漢文と仮名文を共通の指標によって比較し、漢文・仮名文という表記体の枠を越えて、ジャンルや叙述目的に応じた文体的特徴を検討しうることを意味する。一方、『春記』のように、古記録内部でも異なる MVR を示す資料が存在することから、今後はジャンル差のみならず、記主・職務・記載形態等と品詞比率との関係を検討する必要がある。

[参考文献] 池上尚編(2016)『日本語歴史コーパス 平安時代編』形態論情報規程集、磯貝淳一(1999)「和化漢文資料の疑問表現における助字の用法：「歟」字の使用をめぐって」『国文学攷』(164) pp.11-22、大川孔明(2023)『古代日本語文体の計量的研究』(日本語学会論文賞叢書 4)武蔵野書院、樺島忠夫・寿岳章子(1965)『文体の科学』綜芸舎、高橋秀樹(2023)『古記録入門』(増補改訂版)吉川弘文館、峰岸明(1986)『平安時代古記録の国語学的研究』東京大学出版会、山口仲美(1974)「平安朝文章史研究の一視点：文連接法をめぐって」『国語学』(98) pp.16-34

[資料・データベース] 【三宝絵】高橋貞一(1971)『三宝絵の研究』仏教大学通信教育部、馬淵和夫・小泉弘・今野達(校注)(1997)『新日本古典文学大系 31 三宝絵 注好選』岩波書店、源為憲(撰)小泉弘・高橋伸幸(著)(1980)『三宝絵集成：諸本対照』(笠間叢書 131)笠間書院、【権記・御堂関白記・小右記・春記】国際日本文化研究センター「撰関期古記録データベース」、【形態素解析】国立国語研究所「Web 茶まめ」

中世武家家訓における格言集の引用について

片山 鮎子（かたやま あゆこ）沖縄工業高等専門学校

〇 はじめに

武田信繁（一二五〇～一二六二）は甲斐の守護大名である武田信玄の弟である。永祿四年に川中島の合戦で討死する前に子息へ九十九条の家訓を残した（以下、本家訓を武田信繁家訓とし、家訓と呼ぶ）。九十九条の家訓一条につきそれぞれ一～三条の漢籍（他に和歌一首と神託一条）が引用されており、合計一九条の引用文が附されている。以下、傍線部が漢籍の引用部分である。

例 一 奉_レ對_二屋形様_一盡_二未來不_レ可_レ有_二逆意事_一

論語曰造_二次必於_レ是_一是_二顛沛必於_レ是_一

又曰事_二君能致其身_一

一無_レ油斷行義可_レ嗜_二事_一

史記曰其身正則不_レ令行其身不正則雖令不_レ從

家訓に引用される漢籍の内訳は大別して『論語』、『三略』、禪語、その他漢籍となる。これまで発表者は『論語』、『三略』、禪語について調査し、資料ごとに系統の異なるテキストが使用されていることがわかった。本発表ではその他漢籍の引用に使用されたと思われる金言集を調査し、中世に成立した類書である『管蠡抄』と金言集である『金句集』が使用されていることを明らかにする。併せて武田信繁家訓に類似する資料として天草版金句集があることを指摘したい。

一 武田信繁家訓と写本について

近世以来、武田信繁家訓は『甲陽軍鑑』品第一・第二「甲州法度之次第」のうち、後半の品第二として知られていた。序文に「維時永祿元年戊午蕤賓中澣龍山子謹誌」とあることから一五五八年に作成されている。現在、中世に遡る写本として知られるものは二点、堀木本と雨宮本である。

堀木本 訓点あり。堀木家所蔵。表紙なし。奥書「天正四年正月十五日写之了」大庭平五郎常頼（花押）大庭平五郎常頼については不明。

雨宮本 訓点なし。雨宮晃司家所蔵。表紙画像なし。中表紙「維時天正六年戊寅七月吉日」奥書「序語一円無分別所おほく御入候さりながら本にまかせてかきうつし進上候主 末木惣三殿参」末木惣三は平山優（二〇一九）に掲載された小野正文（信玄公宝物館館長）によると雨宮氏の一族であり、武田家家臣である。

堀木本と雨宮本には本文に異同がある。本発表では両写本を参照しつつ異同については適宜、記載する。

二 先行研究

武田信繁家訓の引用文出典に関する先行研究は桃裕行（一九八八）がある。

①桃裕行（一九八八）桃裕行（一九八八）は家訓に引用される漢籍の出典を調査し『管蠡抄』『明文抄』、とくに伊達家本『金句集』の追加雑説部分が多く家訓と同文を載せていることを指摘した。また、家訓成立には五山派から妙心寺派へ転派した禅僧である春国光新が関わったのではないかと考察している。

②片山鮎子（二〇二三）桃の指摘をもとに調査したところ、家訓に最も多く引用される『論語』二九条は『論語義疏』

例は写本のうち堀木本を使用した。附されている訓点は堀木本のものである。

桃裕行（一九八八）に写真画像が全文掲載されているものを参照する。

平山優（二〇一九）に写本の写真画像が全文掲載されているものを参照する。

混入系統のテキストであり、原典から直接引用されている。家訓に引用される「三思一言九思一行」は『論語』經文にはなく五山派の『論語』抄物仮名書き注釈に同文があることから、五山僧の抄物を使用した可能性がある。

③片山鮎子(二〇二五a)『論語』の次に多く引用される『三略』一三条も独立した『三略』の写本が使用されている。各学派の写本と字の異同、訓点を比較した結果、足利学校系統の書入抄物が使用された可能性がある。

④片山鮎子(二〇二五b)桃裕之(一九八八)に出版未詳とされる引用文を調査したところ、禪語が多く含まれ、同文が『句双葛藤鈔』に多く見出せる。また、出典未詳条の中には『山家学生式』『碧巖録』といった仏書の他、『実語教』『野客叢書』『輟耕録』等も含まれることがわかった。

以上の研究から、武田信繁家訓は内部に多様な中世資料を包含している興味深い家訓であることがわかる。本家訓という一つの資料の中には未調査の抄物や金句集写本が含まれている可能性が高い。

三、武田信繁家訓と類書、金句集との校勘

本発表では類書、金言集から引用したと思われるその他漢籍を調査し、次の資料と校勘する。

類書 …『管蠡抄』『明文抄』『玉函秘抄』

金句集…伊達家本、東北大学本、尊経閣本、山岸本

片山鮎子(二〇二六)にて家訓三条と『管蠡抄』『明文抄』と東北大学本『金句集』を試みに校勘したところ、家訓三条と最も字の異同が少ないのは『管蠡抄』であった。本発表は校勘する資料を追加し、出典未詳かつ禪語ではないその他漢籍全てを調査対象とする。以下、対象とするその他漢籍の条と、校勘対象の表である。番号は私に附した。

〈調査対象とするその他漢籍〉

- | | |
|-----------------------------|--|
| (一) 史記曰其身正則不令行其身不正則雖令不從 | (一五) 良匠不捨材上將不捨士 |
| (二) 後漢書云兄弟左右之手也 | (二六) 孝經云多言害身 |
| (三) 応機人出一言知其長短 | (二七) 史記云不知其人視其友 |
| (四) 礼記曰人有礼則安無礼則危 | (二八) 易云其機不密則成害 |
| (五) 史記云酒極則乱樂極則悲 | (二九) 史記云事以密成語以泄敗 |
| (六) 左傳云宴安鳩毒不可思 | (三〇) 書禹云德惟善政々在美民 |
| (七) 傳云無功之賞不議々富禍之媒也 | (三一) 傳曰神不亨非礼 |
| (八) 良藥苦口利病忠言逆耳功 | (三二) 穀梁傳曰善陣者不戰善戰者不死 |
| (九) 尚書木從繩則正后從諫則聖 | (三三) 漢書曰丙吉為丞相御史醉欧其車吉不責也 |
| (一〇) 不如一年計種五穀不如十年計種木不如一期計立人 | (三四) 孝經曰天地不一物枉其時日月不為一物晦其期々已不為一人枉其法君子為一人不枉法 |
| (一一) 語云父子不同席男女不同席 | (三五) 臣軌曰事不慎者取敗之道也 |
| (一二) 君雖不為君臣以不可為臣 | (三六) 戰國策云其善可賞其惡不可語 |
| (一三) 呂氏春秋云令苛則不聽禁多則不行 | (三七) 孟子云孜孜而不倦者舜々徒也 |
| (一四) 事不師古難以長久 (堀木本にのみ引用あり) | |

類書の調査に際しては山内洋一郎(二〇二二)の索引を使用する。金句集は伊達家本、山岸本は福島邦道(一九七七)を使用し、東北大学本は吉田澄夫(一九三八)、尊経閣本は山内洋一郎(二〇〇七)を使用する。

家訓写本のうち堀木本には訓点が附されているがここでは省く。

〈表一 武田信繁家訓と校勘対象の該当句〉

武田信繁家訓	(1)
管蠡鈔	(2)
明文抄	(3)
玉函秘抄	(4)
伊達家本金句集	(5)
尊經閣本金句集	(6)
東北大学本金句集	(7)
山岸本金句集	(8)
×	(9)
×	(10)
×	(11)
×	(12)
×	(13)
×	(14)
×	(15)
×	(16)
×	(17)
×	(18)
×	(19)
×	(20)
×	(21)
×	(22)
×	(23)
×	(24)
×	(25)
×	(26)
×	(27)

表一によると家訓に引用される漢籍のうち『玉函秘抄』に記載されているものは全て『管蠡抄』『明文抄』、『金句集』諸本のいずれかに同文がある。次節より、家訓と類書、金句集との関係を確認していく。

三・一 武田信繁家訓と類書

まず武田信繁家訓と類書に共通する条について確認する。表二は家訓に引用されるその他漢籍二七条のうち、『管蠡抄』『明文抄』『玉函秘抄』に共通する条である。

〈表二 武田信繁家訓と類書〉

武田信繁家訓	(1)
管蠡鈔	(2)
明文抄	(4)
玉函秘抄	(5)
×	(6)
×	(7)
×	(8)
×	(9)
×	(10)
×	(11)
×	(12)
×	(13)
×	(14)
×	(15)
×	(17)
×	(19)
×	(20)
×	(21)
×	(22)
×	(24)
×	(25)

表二によると家訓は『管蠡抄』に一九条、『明文抄』に一四条、『玉函秘抄』に一〇条の同文がある。うちの一二条が共通している。『管蠡抄』にのみある(二)(四)(五)(一三)(一四)(一九)(二二)の七条は他類書にも金句集にも同文がないことから、『管蠡抄』から採られている。共通する一二条も『管蠡抄』からと考えられる。『明文抄』のみにある(六)(一〇)は金句集にもないが、二条とも有名な句なので当時知られた諺から採った可能性がある。

三・二 武田信繁家訓と伊達家本金句集

伊達家本『金句集』には、金句集諸本の中でも唯一、各章の後ろに「追加之分」「雑説部」がある。桃裕行(一九八八)は本家訓がとくに伊達家本『金句集』の追加雑説部分に多く同文があることに注目した。本節では家訓と伊達家本『金句集』との関係性を確認する。家訓に引用されるその他漢籍のうち、伊達家本『金句集』に同文が記載されているものは一七条ある。他金句集諸本と共通する本文部分に記載されるものが七条、追加雑説部分に記載されるものが一一条である。確認したところ、表三のように追加雑説部分一一条のうち一〇条は『管蠡抄』にも記載がある。

〈表三 伊達家本金句集追加雑説部分と管蠡抄の共通条〉

武田信繁家訓	(4)
管蠡鈔	(8)
伊達家本金句集	(11)
×	(12)
×	(13)
×	(19)
×	(20)
×	(21)
×	(22)
×	(23)
×	(24)

山内洋一郎(一九八六)は伊達家本金句集追加雑説部分の七〇%が『管蠡抄』から採録されていると指摘している。家訓に引用された条も『管蠡抄』から引用したとみるのが自然であろう。

三・三 武田信繁家訓と他金句集

伊達家本金句集本文部分に記載される六条は、他金句集諸本と共通する。以下、六条を各『金句集』および類書と校勘した。

〈金句集諸本と類書の共通条〉

(二八) 家訓 孝経云 多言害身

山岸本 老子経曰 多言害身多事害神養性云不返言也一見不隠行也

東北大学本 老子経曰 多言害身多事害神

尊経閣本 老子経曰 多言害身多事害神

伊達家本 老子経曰 多言害身多事害神

管蠡抄 同文なし

明文抄 同文なし

玉函秘抄 同文なし

(二九) 家訓 史記云 酒極則乱樂極則悲

山岸本 史記曰 酒極則乱樂極則有悲

東北大学本 史記云 酒極則乱樂極則悲

尊経閣本 史記云 酒極則乱樂極則悲

伊達家本 史記曰 酒極則乱樂極則悲

管蠡抄 民群聚飲酒不用上命則収捕勿令佚酒極則乱 史記

明文抄 同文なし

玉函秘抄 物盛則衰樂極則悲 老子

(三〇) 家訓 傳云 無功之賞不議々富禍之媒也

山岸本 春秋左氏傳曰 無功之賞不議之富招禍之媒也

東北大学本 左傳云 無功之賞不義之富禍之媒也

尊経閣本 春秋左氏傳曰 無功之賞不義之富禍之媒也

伊達家本 春秋左氏傳曰 無功之賞不義富禍之媒也

管蠡抄 無功之賞不義之富禍之媒也我非悲富恐失富也 左傳

明文抄 無功之賞不義之富禍之媒也 左傳

玉函秘抄 无功之賞不義富禍之媒也 春秋左氏傳

(三一) 家訓 尚書 木從繩則正后從諫則聖

山岸本 尚書云 木從繩則正君從諫則聖

東北大学本 尚書云 木從繩則正君從諫則聖

尊経閣本 尚書云 木從繩則正后從諫則聖

伊達家本 尚書曰 木從繩則正君從諫則聖

管蠡抄 木從繩則正后從諫則聖 尚書

明文抄 惟木從繩則正后從諫則聖 尚書

玉函秘抄 木從繩則正后從諫則聖 尚書

(三二) 家訓	臣軌曰	<u>事不慎者取敗之道也</u>
山岸本	臣軌云	言易洩者招禍之媒也 <u>事不慎者取敗之道也</u>
東北大学本	臣軌云	言易洩者招禍之媒也 <u>事不慎者取敗之道也</u>
尊経閣本	臣軌云	言易洩者招禍之媒也 <u>事不慎者取敗之道也</u>
伊達家本	臣軌曰	言易洩者招禍之媒也 <u>事不慎者取敗之道也</u>
管蠡抄		言易洩者召禍之媒也 <u>事不慎者取敗之道也</u>
明文抄		言易洩者召禍之媒也 <u>事不慎者取敗之道也</u>
玉函秘抄		言易洩者口招禍之媒也 <u>事不慎者取敗之道也</u>
(三三) 家訓	良匠 <u>不捨材上將不捨士</u>	臣軌
山岸本	帝範云	良匠 <u>無棄材明君無棄士</u>
東北大学本	帝範云	良匠 <u>無棄材明君無棄士</u>
尊経閣本	帝範云	良匠 <u>無棄材明君無棄士</u>
伊達家本	帝範曰	良匠 <u>無棄材明君無棄士</u>
管蠡抄		良匠 <u>無棄材明君無棄士</u>
明文抄		良匠 <u>無棄材明君無棄士</u>
玉函秘抄		良匠 <u>無棄材明君無棄士</u>

以上、家訓六条と金句集諸本、類書を校勘した。(二八)は家訓の出典を『孝経』とするが実際は『老子』である。金句集諸本に同文がある。(二九)は家訓と同文に当たるものが金句集諸本にある。類書は明文抄に同文がなく、管蠡抄「酒極則乱」、玉函秘抄「樂極則悲」と、前後の一部分のみである。(三〇)は家訓「儀」と山岸本金句集が「儀」である。また「富」も山岸本、東北大学本、尊経閣本が「富」であり、伊達家本と類書は「富」である。(三一)は家訓の「后」と同じ字が尊経閣本金句集と類書である。(三二)は『臣軌』「言易洩者召禍之媒也事不慎者取敗之道也」のうち後半の「事不慎者取敗之道也」を引用している。該当箇所と校勘対象に異同はない。(三三)は家訓と校勘対象に大きな異同がある。まず家訓の「捨」は「棄」であり、打消「不」は「無」である。また「上將」「明君」も異なる。「良匠は材を棄てることなく明君は士を棄てることなし」と読むものを記憶に拠って書いたものか。(二八)(二九)は金句集にのみ同文があり、(三〇)も金句集に一致するものがあることから、家訓には金句集が使用されている。

また、(三)も金句集に関連する。家訓には「応機人出一言知其長短」とあるが金句集に『養性』が出版とある。金句集のうち、東北大学本、尊経閣本、山岸本に「養性云一出不返言也一見不隠行也又云耳目為患口舌為禍故君子以慎為宗以恐為門」又曰蛇出一寸知其大小人出一言知其長短応機曰、人為財死鳥為食亡とある。金句集の中で隣り合うことから写す際に間違えたものと考えられる。

以上、武田信繁家訓のその他漢籍二七条と類書、金句集を比較し、出典となった資料を調査した。家訓の作成に際しては類書のうち『管蠡抄』が使用されており、また同時に『金句集』も活用されている。

類書、金句集、『句双葛藤鈔』には共通する句が多い。校勘作業を進めて出典の精度を高めていきたい。今回、校勘した金句集諸本の中に家訓と完全一致する写本はないが、今後調査を進め一致するものを探していく、併せて未詳の(一八)(二六)(二七)を収録している類書や金句集を探していく所存である。

4. 同種資料としての天草版金句集

本発表で紹介した武田信繁家訓は、信繁が子息へ伝えるため家訓と金言を合わせたものである。金言部

分のみ取り出せば抄物、類書、金句集、句双紙その他を利用して綴った金言集になる。これと同じく複数の漢籍資料を利用して作成した金言集に天草版『金句集』がある。天草版『金句集』は一九九三年に刊行された金言集であり、武田信繁家訓から三五年たつ。他金句集とは異なり二八二条の金言をアルファベット順に配列する。臨済宗の禅僧からキリシタンになった倍奄（ハビアン）が編纂に関わったと考えられる。家訓に引用される漢籍は大別して表四のとおりである。

〈表四 武田信繁家訓と天草版金句集の出典〉

武田信繁家訓	① 漢籍	論語・三略
	② 類書等	管蠡鈔・金句集・実語教
	③ 仏書	句双葛藤鈔・碧巖録・山家学生式
	④ 他	野客叢書・輟耕録・和歌・神託
天草版金句集	① 漢籍	論語・三略・老子・山谷詩集
	② 類書等	管蠡鈔・金句集・童子教・古文真宝・和漢朗詠集
	③ 仏書	句双葛藤鈔
	④ 他	太平記・憲法十七条

表四によると家訓の引用漢籍一一九条と天草版『金句集』二八二条は『論語』『三略』『金句集』『句双葛藤鈔』が共通する。各条の共通するものは『論語』四条、『三略』四条、『管蠡抄』一条、『金句集』八条と、多くはない。家訓には『老子』『合抱之木生於毫末九層之臺起於累土千里之行始於足下』が「九層之臺起於累土」「千里行自一步始」と、別々の家訓に附されている。『老子』から採ったとすれば天草版『金句集』とより出典が重なるが、山内洋一郎（二〇〇七）は「和諺となったさまが察せられる」として直接引用とは断じない。『句双葛藤鈔』に「合抱之木生於毫末九層之臺起於累土」があり「千里之行始於足下」はないことから、家訓「千里行自一步始」は諺となったものが採られた可能性がある。

家訓と天草版金句集には直接の繋がりはない。しかし家訓が臨済宗妙心寺派の春国光新の序を有することと、天草版金句集が元臨済僧であるハビアンに関わった可能性があることから、両書は同じ成立背景をもつ同種の資料といえる。

参考文献

片山鮎子（二〇二三）「武田信繁家訓に見られる漢籍の引用について」『沖縄工業高等専門学校紀要』一七号
沖縄工業高等専門学校／片山鮎子（二〇二五）「武田信繁家訓に見られる兵書『三略』の引用について」『岡大國文論稿』五三号
岡山大学言語国語国文学会／片山鮎子（二〇二五）「武田信繁家訓に引用される禅語」学際言語学会二〇二五年国際大会口頭発表表（二〇二五年三月七日、於：岡山大学）／片山鮎子（二〇二六）「武田信繁家訓に引用される金句集について―管蠡抄・明文抄・金句集との比較―」学際言語学会二〇二六年国際大会口頭発表表（二〇二六年一月二四日、於：沖縄工業高等専門学校）／平山優（二〇一九）『第十一回 恵林寺講座「武田信繁九十九箇条を考察する」』信玄公宝物館・乾徳山恵林寺／桃裕行（一九八八）『桃裕行著作集3 武家家訓の研究』思文閣／福島邦道（一九七七）『金句集四種集成』勉誠社／山内洋一郎（一九八六）「広本節用集態芸門金言成句出典考」山田忠雄編『國語史學の爲に第二部古辞書』笠間書院／山内洋一郎（二〇〇七）『天草本金句集の研究』汲古書院／山内洋一郎（二〇一二）『本邦類書玉函秘抄・明文抄・管蠡抄の研究』汲古書院／吉田澄夫（一九三八）『天草版金句集の研究』東洋文庫

○ 山内洋一郎（二〇一二）の出典調査に拠る。

室町時代の書状における依頼の文章構造——『言継卿記』紙背文書を例に——

やまもと ひさし
山本 久(京都大学)

はじめに

本発表は、配慮を表す表現の歴史的研究の一環として、室町時代の書状に現れる依頼の文章構造の実態を検討することを目的とする。この検討を通して、狂言を対象とした先行研究では未発達とされてきた、恐縮の気持ちや強制力の緩和を表す表現が書状には多くみられ、これらを用いて配慮を表す表現が室町時代にはすでに発達していたことを示す。

一 問題の所在

現代の言語生活において、対人的なコミュニケーションを行う際には、聞き手への配慮を示す種々の表現が用いられる。例えば、聞き手に何らかの依頼を行う際には、「申し訳ありませんが」のように依頼を行うこと自体に謝罪などを行う表現、「締め切りが迫っているので」のように依頼を行う事情に言及する表現、「お時間がありましたら」のように聞き手の都合に言及する表現などがみられる(【例1】)。

【例1】申し訳ありませんが、締め切りが迫っているので、お時間がありましたら、論文の添削をしていただけないでしょうか。(作例)

配慮を表す表現を対象とした研究は現代語を対象として進められてきたが、近年では日本語史研究においても配慮を表す表現が注目されるようになっていく。これを主要なテーマとして扱った野田・高山・小林編(二〇一四)という一冊の論文集が編まれているほか、個別の論文として、本発表でも参照する森(二〇一七・二〇一八)、菅(二〇二三)などがある。

さて、本発表で対象とする室町時代の配慮を表す表現について、野田・高山・小林編(二〇一四)所収の米田(二〇一四)は、『虎明本狂言』にみられる「骨折りなれども」「慮外なれども」のような「前置き表現」の使用状況をもとに、「室町時代末の前置き表現を使用した依頼・禁止の配慮表現は萌芽的状況にあり、文末表現を中心に聞き手に対する配慮を表していたと考えられる」(二二九頁)と述べている。さらに、森(二〇一七・二〇一八)は、『虎明本狂言』と『狂言六義』にみられる依頼の談話構造を網羅的に分析し、「中世後期における依頼の最も基本的な型は“状況説明＋行動の促し”であり、“恐縮表明”の要素はあまり用いられていなかった」こと(森二〇一八、二七三頁)、また「聞き手に対して負担を与えるような表現をとることがある」「聞き手の選択性を高く見積もる表現は見られない」(同、二七八頁)といった特徴を指摘している。

以上の先行研究から、室町時代において、依頼を行う際に聞き手への配慮を表す手段としては、

述語部分に待遇価値の高い表現を用いることや、依頼を行う事情の説明を十分に行うことが中心であり、依頼を行うこと自体に恐縮の気持ちを表す表現や、聞き手の選択性を高く見積もるような表現は未発達だったことが知られる。しかし、森氏自身、狂言という資料に「書記されている時点ですでに一定の規範的な型を持っていたであろうことが想定される」「笑わせる意図があつての談話構造である可能性もある」といった問題があることに注意を促している(森二〇一八、二六七頁)。室町時代という一時期に限っても、より多様な資料を対象とした検討が課題として残されていると言える。

二 対象資料

以上の問題意識のもと、本発表では、『言継卿記』紙背文書として残された書状を対象として依頼の文章構造を分析し、室町時代における配慮を表す表現の発達状況への再検討を行う。

『言継卿記』紙背文書とは、一六世紀の公家・山科言継(一五〇七～一五七九)が、文書を反故紙に使用して日記『言継卿記』を執筆し、日記の料紙となったことによって残存することになった文書群である。文書群の中には和歌・連歌の草稿なども含むが、最も多いのは言継本人が親しい公家や女房、僧たちから実際に受け取った書状である。言継の自筆本である『言継卿記』の紙背文書は言継本人のもとに集積された文書群であり、転写を経ない一六世紀当時の資料という点で貴重である。本発表では、分量などを考慮し、天文元(一五三二)年記・同三(一五三四)年記・同十一(一五四二)年記・同十三(一五四四)の紙背文書を対象として検討を行う。

前節に挙げた米田(二〇一四)は、近世以降の話し言葉に発達する前置き表現の中で、「恐れながら」など、鎌倉～室町時代の書状に早く現れるものがあることを指摘している。菅(二〇二三)も、「無心ながら」「憚りながら」を例に、この事実を追認している。両氏の検討から、書状には成立の新しい配慮を表す表現が現れることが知られるが、これをもとに推測すると、書状には配慮を表す表現が量的にも多く現れるのではないか、という仮説を立てることができるように思われる。森氏が狂言を対象として行ったのと同様、書状についても特定の資料を対象に網羅的な検討を行い、この仮説を検証することができれば、先行研究の指摘以上に恐縮の気持ちや強制力の緩和を表す表現が室町時代に発達していたことを指摘できる可能性があると考えた。

三 分析の枠組み

森(二〇一七・二〇一八)は、狂言に現れる依頼の談話構造を検討する上で、熊谷・篠崎(二〇〇六)に基づき、依頼表現に伴う「呼びかけ」「経緯の説明」「信頼の表明」などの「機能的要素」に

対し、それらの上位概念である「コミュニケーション機能」を「きりだし」「状況説明」「行動の促し」「効果的補強」「恐縮表明」の五類型に分類し、各類型に属する表現の量的分布を分析している。ただし、この五類型には相互排他的でない部分もあり、実例を分類する際に迷うことも少なくない。例えば、前掲【例1】の「申し訳ありませんが」「きりだし」なのか「恐縮表明」なのかは明らかでない。本発表では、青木(二〇一二)などを参照しながら、依頼表現に現れるコミュニケーション機能について、その定義と典型的な機能を以下のように設定し、この枠組みに基づいて『言継卿記』紙背文書に現れる依頼の文章構造を分析する。

〔喚起〕…聞き手の名前を呼ぶ、あいさつをするなど、「切出」以下の類型には相当しない形式で、受取手(聞き手)の注意を喚起する表現。

〔切出〕…『依頼』という発話機能を発動させることそのものを対象とする、価値判断を伴わないメタ的な言及。通常は「要求」に先立って現れ、依頼を切り出す。

〔恐縮〕…『依頼』という発話機能を発動させることそのものを対象とする、否定的な価値判断を伴ったメタ的な言及。差出手(話し手)の恐縮の気持ちを表す。

〔緩和〕…依頼対象の行為について、受取手が当該行為を差出手の想定通りに実行する能力・意志を持つことを当然視していない旨を述べる言及。依頼の強制力を緩和する。「できれば」「よろしければ」など仮定条件節として現れるものが典型的である。

〔説明〕…差出手の置かれた状況、差出手と受取手との関係など、依頼する行為に関係する既成立の状況に対する言及。依頼を行うに至った事情を説明する。

〔補強〕…差出手が受取手に見返りとして行う行為など、依頼する行為が遂行された後に生じることが期待される未成立の状況に対する言及。受取手の承諾を引き出す。

〔要求〕…直接的な行為要求表現として定着したもの。『言継卿記』紙背文書は動詞命令形、「仮定条件＋好意的感情を表す表現」、助動詞「べし」「たし」、動詞「たのむ」の五種を、『虎明本狂言』は「くれる」「くだされる」「たもる」を含む行為要求表現(「〜てくだされひ」「〜てくれさしめ」「〜てたもれ」など)を対象とする。

【例2】^{〔喚起〕}山本さん、^{〔切出〕}お願いがありまして、^{〔恐縮〕}すみませんが、^{〔説明〕}明日までにどうしても必要なので、^{〔緩和〕}できれば、^{〔要求〕}今日中に仕上げてもらえませんか。^{〔補強〕}いずれお礼はしますので。(青木二〇一二、四八頁をもとに作成)

また、森(二〇一八)の検討した『虎明本狂言』についても上記の枠組みによる再検討を行い、『言継卿記』紙背文書の結果と比較することで、書状に現れる各機能の量的分布の位置付けを行う。森(二〇一八)の結果から予想すると、『虎明本狂言』に現れる機能は「説明」と「要求」が

中心であり、「恐縮」「緩和」が少ないことが想定される。『虎明本狂言』と比較して、『言繼卿記』紙背文書の依頼の文章構造はどのような特徴を持つか、特に「恐縮」「緩和」の要素がどれほど使用されていたのかという点に着目して分析を行いたい。

四 検討結果

前項で示した枠組みに基づき、『言繼卿記』紙背文書と『虎明本狂言』の依頼について、各「コミュニケーション機能の出現数を【表1】に整理した。【表2】は、【表1】から「要求」を除いた全体に対してカイ2乗検定を行った後、残差分析を行い、調整済み残差を算出した結果である。

【表1】コミュニケーション機能の出現数

	『言繼卿記』 紙背文書	虎明本 狂言
喚起	0	12
切出	2	14
恐縮	51	8
緩和	71	23
説明	137	155
補強	33	32
要求	496	287

【表2】調整済み残差

	『言繼卿記』 紙背文書	虎明本 狂言
喚起	-3.85*	3.85*
切出	-3.44*	3.44*
恐縮	5.20*	-5.20*
緩和	4.48*	-4.48*
説明	-3.92*	3.92*
補強	-0.67	0.67

まず、【表1】の『虎明本狂言』の結果をみると、現れるコミュニケーション機能は「説明」が多く、「喚起」「切出」「緩和」「補強」も一定数はみられるが、「恐縮」は少ない。分類の方法と定義が異なる分、森（二〇一八）の結果とは異なる点もあるが、依頼談話の基本的な構造が「説明」と「要求」から成る（例3）という森氏の指摘は従うべきものと言える。

【例3】^{〔説明〕} 某は二三日よそへゆく程に、^{〔要求〕} 留守をしてくれさしめ（「不聞座頭」・下二七九）

一方、【表1】の『言繼卿記』紙背文書の結果を『虎明本狂言』の結果と比較すると、「説明」「補強」がほぼ同数であるにもかかわらず、「恐縮」「緩和」は三〜六倍程度に使用されていることがわかる。【表2】に示した調整済み残差から残差分析（ $\alpha = 0.01$ ）を行うと、「恐縮」「緩和」が『言繼卿記』紙背文書で有意に多く『虎明本狂言』で有意に少ないという結果となった。この結果から、書状に「恐縮」「緩和」の要素が多いことが計量的に確かめられたと言える。

『言繼卿記』紙背文書に現れる「恐縮」と「緩和」を表す表現を具体的に観察してみる。「恐縮」では、「無心之儀候へ共」「乍「御六借」のように、自身の行う依頼を「無心（ムシン）」「六借（ムツ

カシ」などと否定的に評価する表現が多く現れる。本発表の検討範囲に「無心(ムシン)」を用いた表現は一九例、「六借(ムツカシ)」を用いた表現は八例みられた。

【例4】^{〔恐縮〕}又無心之儀候へ共、今度之小除目聞書、同新歴名、^{〔緩和〕}片時之間、^{〔要求〕}申請度候、
(天文元年三月三〜四日紙背・四条隆重書状)

【例5】^{〔恐縮〕}乍^{〔緩和〕}御六借^{〔要求〕}、御返事可^レ承候、(天文一一年正月二三〜二五日紙背・某書状)
〔緩和〕では、「御隙之折節」「御隙候者」のように、受取手の時間的な都合に言及する表現が二〇例と多くみられた(例6)。森(二〇一八)は『虎明本狂言』に「聞き手の選択性を高く見積もる表現は見られない」ことを指摘しており、本発表の検討範囲でも、「よかつたら」のように受取手の選択性を高く見積もる、すなわち受取手が依頼対象の行為を実行する意志を持つことを当然視しないという表現はみられなかった。しかし、「御隙之折節」のような表現は、受取手が依頼対象の行為を実行する意志を、書状を^レ読んだ時点で持つことを当然視せず、当該行為を遂行する時間を選択させる余地を与えているとも言え、「よかつたら」のような表現が発達する萌芽と言えるかもしれない。

【例6】^{〔緩和〕}御隙之折節、^{〔要求〕}来臨候て御雑談候者、本懷候、(天文元年三月三〜四日紙背・四条隆重書状)

五 考察

前節の結果から、『言継卿記』紙背文書には、『虎明本狂言』に比べて「恐縮」「緩和」の要素が有意に多いことが知られた。補足すると、今回の検討の枠組みに用いたコミュニケーション機能が、実際に配慮を表していたのかという問題は、結局のところ差出手と受取手の個別的な関係に依存するものであり、究極的には不明である。しかし、前節で「恐縮」や「緩和」に分類した表現は、受取手に配慮して使用したものであると考えるのが素直だろう。このような前提のもと、室町時代には先行研究の指摘以上に恐縮の気持ちや強制力の緩和を表す表現が発達していたという解釈を行うとともに、本節では、書状に狂言よりも配慮を表す表現が多く使用されたという資料性の問題について、その要因に対する考察を加えたい。

まず、前節の結果は、近世以降の話し言葉資料に現れる配慮を表す表現が中世の書状に早く現れるとする米田(二〇一四)および菅(二〇二三)の指摘と一体のものである。書状には配慮を表す表現が量的に多く使用されており、それを背景として、成立の新しい配慮を表す表現が現れることもあると解釈すれば、前節の結果は、両氏の質的な検討結果を量的な観点から説明したものと言える。ただし、これらの先行研究にも、なぜ書状には狂言などの話し言葉資料よりも

配慮を表す表現が発達していたのかという点への言及はなく、この問題への説明が求められる。

この問題について、狂言の個別的な資料性を捨象し、なぜ書状に対面会話よりも配慮を表す表現が多く使用されたのかという問題に置き換えると、「パラ言語・言語外配慮の代替」「聞き手に関する情報不足の補完」の二点から説明可能と考える。まず、書状という非対面のコミュニケーションは、対面のコミュニケーションと異なり、発話の強さや速さなどのパラ言語的情報（前川一九九八）、表情や身振りなどの言語外情報を使用できず、文字によって伝達可能な言語情報に依存するものである。よって、対面でのコミュニケーションでは、遠慮がちな話し方や、申し訳なさそうな表情を用いて配慮を示すことができるのに対し、書状でのコミュニケーションでは配慮の気持ちを言語情報として表すことができず、配慮を表す表現が多用されることになる。

さらに、「緩和」要素の多用に対する説明として、対面会話でないことによる、聞き手に関する情報不足の補完という点が考えられる。『言継卿記』紙背文書の「緩和」には、前掲【例6】の「御隙之折節」（お時間のある時に）のように依頼対象行為を遂行する時間を選択させる余地を与える表現や、「御座右候者、申請度候（お手元にありましたら、お借りしたいです）」のように聞き手が依頼対象行為を遂行可能であることを当然視せず、仮定条件節として提示する表現がみられた。しかし、対面会話では「聞き手に時間の余裕があるか」「借りたい物を聞き手が持っているか」などは聞き手がその場にいればすぐに判明し、確認するまでもない場合も多いと思われる。このように、非対面のコミュニケーションである書状では、現在の聞き手の様子が判明しないために、聞き手の能力や意志への確認という配慮を行う必要性が高いと考えることができる。

文献

青木博史（二〇一二）「コミュニケーションと配慮表現——日本語史の観点から——」光藤宏行（編）『コミュニケーションと共同体』九州大学出版会／熊谷智子・篠崎晃一（二〇〇六）「依頼場面での働きかけ方における世代差・地域差」国立国語研究所『言語行動における「配慮」の諸相』国立国語研究所／菅友梨子（二〇二三）「行為指示における前置き表現の歴史的変遷——恐縮表明を対象に——」『高知大国文』五四／野田尚史・高山善行・小林隆（編）（二〇一四）『日本語の配慮表現の多様性——歴史的変化と地理的・社会的変異——』くろしお出版／前川喜久雄（一九九八）「音声学」田窪行則ほか（編）『音声』岩波書店／森勇太（二〇一七）『狂言六義』における依頼談話の構造』『国文学』一〇一／同（二〇一八）「中世後期における依頼談話の構造——大蔵虎明本狂言における依頼——」高田博行・小野寺典子・青木博史（編）『歴史語用論の方法 Methods in historical pragmatics』くろしお書房／米田達郎（二〇一四）「室町・江戸時代の依頼・禁止に見られる配慮表現」野田尚史・高山善行・小林隆（編）『日本語の配慮表現の多様性——歴史的変化と地理的・社会的変異——』くろしお出版

日琉祖語における所有人称標示の痕跡

しらとり しおり
白鳥詩織 (京都大学大学院生. Shiratori.shiori.55y@st.kyoto-u.ac.jp)

I はじめに

日本国内の古代日本語研究者の間では、「母音交代」などと総称される形態論の痕跡が存在するとの学説が一定の支持を集めてきた (cf. i.a. 沖森 2018; 蜂矢 2017) が、その機能と成立過程は大半が不明なままである。本稿は、森山 (1971) がはじめて体系化した母音交代 $uCa \sim o_2Co_2$ (e.g. uta 【歌】 $\sim oto_2$ 【音】; tuma 【偶】 $\sim to_2mo_2$ 【友】; koro 【両】 $\sim kura$ 【蔵】; mo_2to_2 【元】 $\sim muta$ 【共】; oro 【細木】 $\sim ure$ 【末】; etc.) に注目し、これを**森山の母音交代**と名付ける。そして、その起源が先日琉祖語の所有人称標示にあるとの新たな仮説を提唱する。

森山の母音交代の機能についてはすでに興味深い洞察がある。森山隆は、「ツマ」と「トモ」の間において「特殊な婚姻関係によって結ばれてゐる相違」(森山 1972: 325) なる、有生性と酷似した意味特性の介在を直観し、「ツカ」と「トコ」の間において「構成する材料如何にかかはらず [中略] 目的に副ふものすべて」を称することができる個性の介在を直観した。他方で森山は、「人間の認識」における「一般特殊といふ概念把握を行ふ」「通常の過程」と「なぞらへて良いのかも知れない」(1972: 325) と思弁するにとどまるしかなかった。名詞句階層研究が始まるのは 1970 年代初頭であり、1960 年代の研究者が自身の構想への理論的な裏付けを模索するのはもとより不可能に近い。しかし、今日の言語学を知る我々は、上記の森山の見解が有生性・数標示・定性・個性・共感性などの類似した意味特性が関与する所謂「参照階層 (referential hierarchy)」(cf. Sorlin & Gardelle 2018) についての先駆的な洞察であることを理解できる。私見では、森山の母音交代に関与する意味特性は以下の尺度によると説明しやすい。抽象名詞や質料名詞は存在量化が困難で、定性や特定性が高くなりにくいため、森山の母音交代は、その一次的な機能が information status に関連する可能性がある。

(1) 森山の母音交代に関与する意味特性は、定性 (Aissen 2003) に似る

$\leftarrow u\$a$

$o_2Co_2 \rightarrow$

指示対象を特定できる名詞 >> 触れられる対象 > 抽象名詞／質料名詞

森山の母音交代の音韻論的過程は、稿者が提唱中の日琉祖語八母音仮説 (白鳥 2025ab) の視座において、自然に説明できる。日琉祖語八母音仮説とは、通説の日琉祖語六母音仮説には困難な、上代語における有坂・池上法則の形成を説明しながら、日琉諸語における母音対応を同時に説明することのできる母音体系の組み合わせのうち、理論上最も経済的な母音調和体系 ($[+ATR] *i *ü *ö *ä [-ATR] *i *u *o *a$) を日琉祖語に再建する仮説である。

日琉祖語八母音仮説においては、上代語のオ列乙類の連続する語根は一次的な円唇性および非円唇性の母音が連続する際の同化によって形成される (e.g. $*ä\$ö/*öCä/*äCä > o_2Co_2$)。このた

め、二音節語根の語根末の母音がなんらかの理由により削除されると、第一音節の円唇母音がオ列乙類に反映しない環境が生ずるため、同源形式の間に母音音素を異にする異形態、つまり、見かけ上の「母音交代」が生ずる。これが森山の母音交代の起源であると予想できる。即ち、森山の母音交代は共時的には母音交代だが通時的には母音交代ではなく、語根末に浸蝕した *a によって日琉祖語の母音の合流が阻止されたことに由来する異形態である。

如上の仮説より、オ列乙類の連続に反映する語根のみに付加される形態論を日琉祖語に仮定すべき証拠はなく、任意の語根末に対して森山の母音交代のごとく *a が浸蝕した可能性がある。故に、本稿が森山の母音交代と呼んだ形態論は、 $*(V_2)\$a \sim *(V_2)\V_1 に自然に拡張できる。これら拡張された森山の母音交代にも定性に係ると思しい意味特性が共有されるものがある。

(2) tura【列】～turu【弦】；ama【海人】～umi₁【海】；oyi-【老】～oya【親】；udu-taka-【堆】～uta【砂山】；suma-ni【不休】～sumuyake₂-【速】；kuti-【朽】～kuta-【芥】；-ra【(場所)】～ri【(時間?)】；-sa【(脱形容詞名詞化)】～si【(形容詞終止形)】；asa【朝】～asu【明日】；etc.

尚、この拡張された森山の母音交代により、日琉諸語に在証される音韻論的に不可解な母音対応の一部を説明する見通しが得られる。

(3) 関東 nama【波】～nami₁【波】；西日本 suma【隅】～sumi₁【隅】；kara【柄】～九州 kari【から】；momi【獣】～四国 moma【梟】；西日本 tutuma【堤】～tutumi【堤】

2 日琉祖語における所有人称標示の痕跡

前節の議論に基づけば、拡張された森山の母音交代とは、二音節語根の語根末音節にたいして、定性に係ると思しい意味特性を有する形態素 *a が侵蝕することに由来する見かけ上の母音交代である。ここから、稿者が提唱するのは、拡張された森山の母音交代の起源が先日琉祖語の所有人称標示にあり、原義は譲渡不可能性の標識である、とする仮説である。所有人称標示から定性に似たなんらかの information status を標示する形式への文法化は、ウラル語族、テュルク語族、マヤ語族、セム諸語などに広く見られる (Fraurud 2001)。また、譲渡不可能性に関連する接辞が一部の譲渡可能性の低い意味領域の語彙に語彙化する事例も、アルゴンキン語族、トランスヒマラヤ語族など多くの語族に見られるらしい。稿者が親しんだ語族から例示すると、ポリネシア祖語にはオーストロネシア祖語から継承された三人称単数の所有標識が存在し、譲渡不可能性などを標示したとされ、ミクロネシアの域外ポリネシアとポリネシア三角地帯の子孫においては、改新的な所有標示の体系が形成された結果、消失し、一部の親族名称のなかに化石化することがある (Blust 2013: 488-490)。

(4) ポリネシア祖語からの継承語における三人称所有標識 *-na の化石化 (Blust 2013: 488)

*makupu-na > ハワイ語 moʔopuna 'grandchild'

*tuaka-na > ハワイ語 kuaʻana ‘older same sex sibling’

*tupu-na > ハワイ語 kupuna ‘grandparent; ancestor’

拡張された森山の母音交代は、如上の言語変化と並行ないし類似した普遍的背景によって生じた語彙化と理解できる。通言語的に所有人称標示に文法化しやすいのは人称代名詞である (cf. van Rijn 2016)。日琉祖語の人称代名詞は殆どが *a で終るため、拡張された森山の母音交代における有標形式 *(V₂)\$a の文法化の起点として想定するのは自然かつ極めて容易である。

如上の仮説のもとでは、拡張された森山の母音交代において、有標形式は語根形式と比べたとき起伏性（核, [+A]）を獲得する場合があるが、つねにそれを獲得するわけでないことも説明できる。五十嵐 (2023) の提唱した日琉祖語の複合語アクセント規則に基づけば、複合形式においては後部要素の起伏性 [+A] が維持され、前部要素は（原則として）維持されないとされる。したがって、拡張された森山の母音交代の起源は、複数の標識に由来しなければならない。日琉祖語の二種類の三人称代名詞が拡張された森山の母音交代を齎したのだとすれば、有標形式の起源に複数の形態素があることを合理的に説明することができる¹。

表 1 有標形式の文法化の起点は複数ある

語根形式			有標形式 ²			文法化の起点
*jθkɜ	2.1 [-A]	横	*jθk=a	2.1 [-A]	床	*sá [-A] 【然】
*om[i]	2.5 [+A]	海	*om=a	2.3 [-A]	海人	
*ötɜ	2.2 [+A]	音	*öt=a ³	2.2 [+A]	歌	*kâ [+A] 【彼】または *ä [+A] 【吾】 ⁴
*tUmɜ	2.1 [-A]	友	*tUm=a	2.2 [+A]	配偶	
*tUkɜ	2.1 [-A]	床	*tUk=a	2.2 [+A]	塚	
*mörä ⁵	2.1 [-A]	諸	*mör=a	2.2 [+A]	村	

3 仮説の有用性

前節までに示した、日琉祖語に所有人称標示の痕跡が存在したと仮定する仮説に基づく、琉球弧の外側の諸言語におけるさまざまな現象を理論的に予測するための内的再建の理論を得

¹ ここでは Kinuhata (2025) の指示代名詞の再建案に概ね拠る。

² 本稿では、可能なかぎり通説との整合性をはかるため、有標形式の第一音節の狭母音性を、琉球祖語および古代日本語の異形態との比較により再建した。琉球祖語に *o が見られるか、古代日本語にオ列（甲類）形がみられる場合、これを *ö と再建してある。

³ Vovin & Ishisaki-Vovin (2020: 108-109) は東歌 (14.3409) の孤語により *o を再建する。

⁴ とりわけ *tüm=a 【配偶】については、英 madam などの例をみるに *=a が *ä 【吾】に由来する可能性は否定できない。

⁵ *mörä-na ~ *märö-na 【皆】の母音音位転倒を想定することで、八丈語 meNna 【皆】と琉球祖語 *mi(n)na を同時に説明することを試みる。初頭音節の *o は先島諸語の対応のほか景行紀の morakumo 〈茂羅玖毛〉に依る。

ることができる。所有人称標示にはさまざまな内的再建上の有用性があり尽くせないで、さしあたって重要な三事例のみを紹介する。

第一に、先日琉祖語の人称標示とおぼしき形態論は、名詞類のみならず形容詞・自動詞などの単項述語にもみられる。これらの人称標識は、譲渡不可能性を意味する所有人称標示の痕跡よりはむしろ、単項述語に後置された人称標式の痕跡とみるべき可能性がある。

(5) *tUmɜ=a > *tUm=a ar- 【友-PERS?#有】 >> EMJ atumar-^B 【集】

(6) *tUmɜ ap- 【友-PERS?#会】 >> EMJ adomop- 【集】

人称標式による語形侵蝕は、尹熙洙 (2025: 199-200)が先日琉祖語の強勢について議論するなかで提唱した動詞の第二音節の母音脱落に伴った式の逆転に類似した現象を惹起した可能性がある。これにより、同源であることが論ぜられてきたり、同源の可能性が否定できなかったりするにも拘らず、式が合致しない単項述語の同源性を論ずることができる。

(7) EMJ puto-^B 【太】 < *pUtɜ 【太】 → *pUt=a 【太-PERS?】 > PR *buta-^A 【太】 (セリック 2022)

(8) EMJ kúsò 【糞】 < *kUsɜ 【糞】 → *kUs=a 【太-PERS?】 > EMJ kusa-^B 【臭】

第二に、*=a は白鳥 (2025, in print) が議論するモデルにおいて、上代語における有坂の第三則の例外の形成を説明できる。白鳥 (2025, in print) が提唱した口蓋性牽引 (Palatal Attraction) においては、日琉祖語 (六母音仮説) の *kə\$ə, *sə\$ə は、それぞれ *ki\$ə, *si\$ə に変化するため、上代語には ko₂\$ə, so₂\$ə が存在しないことが予想される。しかし、次の二語が未説明の例外として指摘される。これらは、本稿の提唱する人称標識によって生じたとすると、規則性原理のもと説明できる。語形侵蝕を起こす接語 *=a は語根にゆるく付加された音節であり、不調和を惹起する。

(9) OJ so₂ba 【櫛】 < *sɜNp=a 【聳=INAL】 ← *sɜNpl-jai- 【聳-VZR】 > EMJ sobije- 【聳】

(10) EMJ kopor-^A 【凍】 < *kä-pur 【霜-降】 (白鳥 2025a: 14) → *käp=a 【霜降-PERS?】 > EMJ kopa-^B 【強】

第三に、*=a は、有坂の第二則の例外の形成を議論するさいに有用である (白鳥 in review)。所有人称標示を仮定することで、母音音素を確定することができる。一例として、上代語においては、所有人称標示を利用すると、*ä\$u が o₂o₂ に反映する一方で、*ä\$ü が o₂\$u に反映する語源の存在を豊富に示せるため、内的再建から帰結される u の分裂を説明できる。

表 2 所有人称標識は祖語の母音音素を確定する材料となる

語根形式	有標形式	日琉祖語	上代語
------	------	------	-----

		*nɜr-pur	乗る-昇る ⁶	o ₂ ʂo ₂	no ₂ bor-	登る
		*kä-su	これ-こそ ⁷		ko ₂ so ₂	こそ
		*äkür-	送る		okur-	送る
		*käj-tümi	木-積み	o ₂ ʂu	ko ₂ tumi ₁	芥
*püsɜ【細】→	*püs=a【房】 ⁸	*tɜr-püs=a	鳥-房		to ₂ busa	鳥総
*türü【弦】→	*tür=a【連】	*äjä-n-tür=a-i	妖しく-n-連れ (弦-INAL-VZR)		ojo ₂ dure	妖言

4 所有人称標示の起源に向けて

本稿では、日琉祖語に所有表現人称標識の痕跡が見られるとする仮説を提唱し、その含意として単項述語における人称標識の痕跡にも予備的に言及してきた。

本稿の仮説のもと、先日琉祖語に存在したと予想される人称標示は、いかなる起源を有するのか？ 結論に代て、地域言語学的観点から将来のこの問題系を素描する。

北東アジアには、人称標示を有する言語が多数存在する。これらのうち、テュルク語族 (Johanson 2021: 109), モンゴル語族 (Janhunen 2003: 19), ツングース語族 (Janhunen 2023: 60-62) などの早期言語には、名詞類（やしばしばのちには動詞類）に人称代名詞と同源の形式を配して譲渡不可能性を標示する形態論が存在する。アルタイ諸語の所有人称標示は、何れも代名詞由来の接尾辞である点で、先日琉祖語に想定される人称標示に類似した構造をもつ。しかしながら、近年も提出され続ける日琉語族とアルタイ諸語との間の語彙の同源性に関する仮説は、稿者が瞥見するかぎり、一部の放浪語 (Wanderwort) を除いて説得的な議論がない。少数の説得的な場合も通常、朝鮮語族に同源語が存する。一方、稿者の知るかぎりにおいて、朝鮮語族には人称標示およびその痕跡が存在しない。稿者は、この状況で、文法借用が生ずるほどの言語接触をミクロ・アルタイ諸語と日琉語族との間にただちに想定することに抵抗がある。

他方、アイヌ語族にも、所有人称標示に類似した形態論が存在する。落合 (2025) が再建する早期のアイヌ語族の所有人称標示は、名詞末に「所属形」の標識が付加される。またとりわけ重要な特徴として、自動詞の人称標示においても、動詞末に標識が付加される。後者は、先日琉祖語の単項述語の人称標示と非常に類似した構造を有した可能性がある (cf. 白鳥 2026c)。

早期のアイヌ語族と日琉語族との間に密接な言語接触があったことは、豊富な借用語から明らかであり、稿者は左側主要部複合語、盛んな副詞抱合といった非日韓語的な特徴が早期の日琉語族に生じた主要因をアイヌ語族との接触であると主張する (白鳥 2026b)。先日琉祖語の所

⁶ 他動詞形 nobos- を有することから, ibur-/ibus-【燻】<6VH *ir-【炒】+*pur-, kusubur-/kusubus-【燻】<6VH *kusu~*pusu【黒】(cf. pusube~kusube【黒子】)+*pur-などの後部要素と同源で,【立ちのぼる】の意味をもつ動詞 *pur-を想定する。この動詞は *pur-【降る】と同源であることを論証できる (別稿準備中) ため, 他動詞形 *puras-より舌根後縮性と知れる。

⁷ これが舌根後縮性母音であることは比較方法により論証できる。別稿準備中。

⁸ 狭母音の再建は関東語の一部に pisa【房】がみられることによる。

有人称標示が、単に北東アジアの諸言語の影響下で形成されたものでは必ずしもなく、むしろ早期のアイヌ語族との密接な言語接触の結果、定着したものであった可能性については、前者の単純なモデルと同様かそれ以上に検討する必要がある。今後も、先日琉祖語の再建の問題系には、日琉語族内部の比較の精度の向上を目的とした内的再建と、東アジアの言語史への視野が必要である。

記号と略号

EMJ	中古日本語	VZR	動詞化	ɔ	上代語でオ乙に反映する任意の母音 (*ä, *u, *ü, *ö)
GEN	属格	\$	音節境界	θ	上代語でオ乙に反映する任意の円唇母音 (*u, *ü, *ö)
INAL	譲渡不可能	C	任意の子音		
OJ	上代日本語	V	任意の母音		
PR	琉球祖語	U	*u または *ü		

引用文献

- Aissen, Judith (2003). "Differential object marking: Iconicity vs. economy". *Natural Language and Linguistic Theory* 21.
- Blust, Robert (2013). *The Austronesian languages, Revised Edition*. Asia-Pacific Linguistics, Research School of Pacific and Asian Studies, The Australian National University.
- 蜂矢真郷 (2017). 『古代語の謎を解く II』. 大阪：大阪大学出版会.
- Janhunen, Juha (2003). "Proto-Mongolic". In: Juha Janhunen. *The Mongolic Languages*, pp. 1–29, Routledge.
- Janhunen, Juha (2023). "Proto-Tungusic." In: Alexander Vovin/José Andrés Alonso de la Fuente (eds.) *The Tungusic Languages*, pp. 35–75. Routledge.
- Johanson, Lars (2021). "The History of Turkic". In: Johanson, Lars; Csató, Éva Á.. *The Turkic Languages (2nd ed.)*. Routledge.
- Kinuhata, Tomohide (2025). "Towards the Reconstruction of Proto-Japonic Demonstratives: A conceptual Framework." *Japanese/Korean Linguistics*, 31 (1).
- 落合いずみ (2025). 「アイヌ語における具体形の形態の変遷」『言語記述論集』19: 1–40.
- 沖森卓也 (2018) 「いわゆる「母音交代」をめぐって」『歴史言語学の射程』三省堂.
- van Rijn, Marlou (2016) "The grammaticalization of possessive person marking: a typological approach." *Transactions of the Philological Society*. 114 (2): 233–276.
- Fraurud, Kari (2001) "Possessives with extensive use." In: Irène Baron/Michael Herslund/Finn Sørensen (eds.) *Dimensions of Possession*, pp. 243–267, Amsterdam: John Benjamins.
- Sorlin, Sandrine & Laure Gardelle (2018). "Anthropocentrism, egocentrism and the notion of AnimacyHierarchy." *International Journal of Language and Culture*. 5 (2), doi.org/10.1075/ijolc.00004.gar. hal-01874511.
- 五十嵐陽介 (2023). 「日琉祖語四声仮説：最少の声調と最少の音変化でアクセント体系の多様性を説明する ために」. 第4回プロトジャポニック研究会. 国立国語研究所 (オンライン).
- 白鳥詩織 (2025a) 「肥筑耆岐語における有坂・池上法則の例外」『日本方言研究会 121 回研究発表大会予稿集』.
- 白鳥詩織 (2025b) 「日琉祖語の第八母音の提唱」日本歴史言語学会 2026 年大会.
- 白鳥詩織 (2025, in print) 「有坂の第三則の新解釈」『歴史言語学』14.
- 白鳥詩織 (2026a) 「古代日本語における素性接辞の痕跡と日琉祖語の分裂自動詞性」. 日本語学会 2026 年度春季大会学生ポスターセッション.
- 白鳥詩織 (2026b) 「上代語における節連鎖とその文法化」言語記述研究会第 151 回例会.
- 白鳥詩織 (2026c) 「口蓋化子音の大幅な改訂に向けたアイヌ祖語 *ia の提唱」日本言語学会第 172 回大会.
- 白鳥詩織 (in review) 「肥筑耆岐語における疑似有坂・池上法則の痕跡」.
- セリック, ケナン (2022). 「上代日本語の甲類の α_1 に対する琉球祖語のもう一つの音対応について」. 『日本語学会 2022 年度春季大会予稿集』.
- 森山隆 (1971). 『上代国語音韻の研究』, 東京：桜楓社.
- Vovin, Alexander & Sambi-Ishisaki Vovin (2020). *The Eastern Old Japanese Corpus and Dictionary*. Leiden: Brill.
- 尹熙洙 (2025). 「日琉祖語の子音連結」『国立国語研究所論集』29: 189–202.

群馬県中之条町方言の形容詞のアクセント

たかやま りんたろう

高山 林太郎 (宇都宮大学)

1. はじめに—高山 (2026) を踏まえて

群馬県吾妻郡中之条町生え抜き話者：T 氏（旧中之条町 1943 年生まれ男性）と Y 氏（旧六合村 1938 年生まれ男性）の言語調査を実施した（山間部寄りで、市町村合併を考慮して計 2 名調査した；姓名の公開等に同意書あり；倫理審査登録番号 H25-0175）。東京方言に並んで関東を代表する中輪東京式アクセントのデータとして採用できると考えた（この点の論証は類別の名詞・形容詞・動詞・4 モーラ畳語を用いて高山 (2026) で実施した；形容詞の分析等で共通している内容は高山 (2026) から引用している）。調査項目のうち、類別の形容詞（2～4 拍）、非類別の形容詞（5～9 拍）のアクセントについて、本稿で取り扱う。

アクセント体系（表 1；高山 2026）は東京方言と同じで、下げ核の有無と位置が弁別的であり（下げ核が無ければ①，下げ核があれば語頭から数えて n 拍目にあることを①，②，③，…などと表す），東京方言と同じ形の句頭の上昇（原則として 1 拍目と 2 拍目の間で上昇）がイントネーションとして被さる。アクセントの表記方法は概ね上野 (2006: 2) 「日本語アクセントの再建」『言語研究』(130: 1-42) を採用する（高山 (2018a, 2018b) 同様）。

表 1. 中之条町方言のアクセント体系（名詞を例に）

		1 拍	+が	2 拍	+が	3 拍	+が
T, Y	①型	[血]	血[が]	ミ[ズ]	ミ[ズが]	サ[クラ]	サ[クラが]
	①型	[手]	[手]が	[マ]ド	[マ]ドが	[ツ]バキ	[ツ]バキが
	②型			ヤ[マ]	ヤ[マ]が	ヒ[バ]シ	ヒ[バ]シが
	③型					ア[タマ]	ア[タマ]が

名詞の類の統合は次のように書ける（○付数字はアクセント；()内数字は類別を表す）。

東京方言（中輪東京式）の名詞の類別（上野 (2006)，中井 (2002)，高山 (2018b) 参照）：

1 拍 2 種：①(1, 4, 2) / ①(3, 5)

2 拍 3 種：①(1a, 1b, 6) / ②(2a, 2b, 3) / ①(4, 5)

3 拍 3 種：①(1a, 1b, 6, 7b) / ③(2, 4) / ①か稀に②(3a, 5a, 5b, 7a)

群馬県吾妻郡中之条町方言（中輪東京式）の名詞の類別（高山 2026）：

1 拍 2 種：①(1, 2) / ①(3, 4, 5)

2 拍 3 種：①(1a, 6) / ②(2a, 3, 1b) / ①(4, 5, 2b)

3 拍 4 種：①(1a, 1b, 6, 7b) / ③(2, 4) / ①か②(3a, 5a, 5b) / ①(7a)

中之条町方言の形容詞の類別は東京方言と同じで（高山 2026），2 拍 1 類①，2 拍 2 類①，3 拍 1 類①，3 拍 2 類②，4 拍 1 類①，4 拍 2 類③である（2 拍の 1 類と 2 類で違うアクセントになるのは高知県高知市方言（中央式）や高知県幡多郡三原村方言（中輪東京式）など）。なお 4 拍形容詞の類別語彙は現在開発中であり（本調査の主目的はその開発である），他に

東京方言、高知県幡多郡三原村方言（中輪東京式）、岩手県下閉伊郡田野畑村方言（外輪式）のデータが利用できる。4 拍形容詞の類別語彙については、現段階での案を示すことはできるが、最終的な結論にはならない。類別語彙が確定しなくても音韻対応は分析できる。

中之条町方言の動詞の類別は東京方言とほぼ同じで（高山 2026）、ル形については 2 拍 1 類①、2 拍 2,3 類①、3 拍 1 類①、3 拍 2,3 類②、4 拍 1 類①、4 拍 2 類③、4 拍 3 類⑦例・③5 例である。なお動詞の類別語彙の開発は高知県方言（高知市、幡多郡、土佐清水市）での調査が大きく影響しており、特に 3 類をどう扱うかは高知県方言の情報に依拠している。

4 拍まで及び 5 拍以上の形容詞アクセントの音韻対応については高山（2022）「高知県伊豆田神社付近の方言の形容詞のアクセント」が既に論じているが、中之条町方言を加味しても、5 拍以上で音韻対応を議論するのは難しく、4 拍がその上限であるという結論になる。その根拠となる統計分析では、「独立性の検定」に加えて「クラメールの V」を用いる。

形容詞アクセントの共時的体系としては、1 類相当の型（①型や語末核型）の存在について、高山（2022）までは 7 拍語（例：むさくくしい（①型や⑦型））が上限だったが、中之条町方言では 8 拍語（例：すけべつたらしい（①型））にも 1 例認められる。これは共時的体系としても中之条町方言は他の同様の方言に匹敵するということである。どの方言でも 2 類相当の型（次末核型）が多数であり、1 類相当の型が少数である点は共通する。

論旨としては、中之条町方言が関東の中輪東京式アクセントを代表する方言の一つとして相応しいこと（上述の通り）、共時的に多くの①型の形容詞を擁すること、4 拍形容詞アクセントの二型対立の再構に寄与するデータとなることの 3 点を主張する。

2. 類別形容詞の 4 拍語に関する先行研究との対比

平山（1957）『日本語音調の研究』p.165 では 4 拍形容詞 1 類に「危うい、悲しい、尊い、空しい、宜しい」、2 類に「卑しい、詳しい、親しい、涼しい、正しい、久しい、等しい」を挙げている。平山（1960）『全国アクセント辞典』p.88 では 4 拍形容詞 1 類に「悲しい、尊い、空しい」、2 類に「詳しい、親しい、涼しい、正しい、等しい」を挙げている。金田一（2005）『金田一春彦著作集第七巻』p.81（初掲『国語アクセントの史的研究 原理と方法』（1974））では 4 拍形容詞 1 類に「悲しい、空しい、やさしい、宜しい、怪しい、卑しい」、2 類に「厳しい、苦しい、詳しい、恋しい、親しい、涼しい、正しい、楽しい、乏しい、激しい、久しい、等しい、嬉しい、悔しい、淋しい」を挙げている。

高知県幡多郡三原村方言（中輪東京式；1 類④型・2 類③型；詳細は高山（2022）参照）、東京方言（中輪東京式；1 類①型・2 類③型；金田一監修（2009）等に基づく；詳細は高山（2022）参照）、群馬県吾妻郡中之条町方言（中輪東京式；1 類①型・2 類③型；T を基礎に①型は Y と和集合、T にデータが無い場合は Y にデータがあれば補完）、岩手県下閉伊郡田野畑村方言（外輪式；1 類①型・2 類－②型；詳細は上野（2021）参照）のデータを見比べて一致して 1 類や 2 類側のアクセントを持つものだけを以下に挙げる。

1 類は「明るい、危ない、怪しい、厳しい、重たい、御安い、悲しい、黄色い、気軽い、気だるい、煙たい、茶色い、冷たい、手厚い、手荒い、手軽い、眠たい、平たい、分厚い、

身軽い, 優・易しい」(21 語), 2 類は「あくどい, 煩い, 嬉しい, 得がたい, 大きい, 可笑しい, 幼い, 賢い, か弱い, 汚い, 厳しい, 際疾い, 詳しい, 険しい, 細かい, 寂しい, しつこい, しぶとい, 少ない, 涼しい, 酸っぱい, 素早い, ず太い, 鋭い, 切ない, 忙しい, 正しい, 小さい, 近しい, 拙い, 手痛い, 手強い, でっかい, 手早い, 名高い, 根深い, 儂い, 歯痒い, 激しい, 久しい, 等しい, 程好い, 貧しい, 間近い, 目映い, 短い, 見にくい, 醜い, 目出度い, 侘しい」(50 語) が該当する。

上記はあくまでも筆者がデータを把握している 4 つの方言の完全一致に基づき選抜したものであり, 文献資料の観点や, 4 つでなく 3 つ一致している場合等については捨象されている。また, 以下の統計分析では音調型の対応関係で分析を実施している。

3. 形容詞 (4 拍以下) のアクセント対応の分析 (高山 (2026) に加筆)

形容詞 (4 拍以下) のアクセント対応について述べる。東京方言 (記号「東」), 群馬県吾妻郡中之条町方言 (記号「群」), 岩手県下閉伊郡田野畑村方言 (記号「岩」), 高知県幡多郡三原村方言 (記号「三」), 高知県高知市方言 (記号「高」) のデータが利用できる。

類の統合は次のように書ける (「岩」の -② は語末から数えて 2 拍目に昇り核があるの意; 「高」の H, L は順に高起式・低起式の意で, 数値は下げ核の有無と位置を表す)。

「東」, 「群」 (中輪東京式) :

2 拍 1 種 : ① (1, 2)

3 拍 2 種 : ① (1) / ② (2)

4 拍 2 種 : ① (1) / ③ (2)

「三」 (中輪東京式) :

2 拍 2 種 : ② (1) / ① (2)

3 拍 2 種 : ③ (1) / ② (2)

4 拍 2 種 : ④ (1) / ③ (2)

「岩」 (外輪式) :

2 拍 1 種 : -② (1, 2)

3 拍 2 種 : ① (1) / -② (2)

4 拍 2 種 : ① (1) / -② (2)

「高」 (中央式) ※「無い H1」は他では L0

2 拍 2 種 : H1 (1) / L0 (2)

3 拍 2 種 : H2 (1) / H1 (2)

4 拍 1 種 : H3 (1, 2) ※L3 型は新規に発生か

筆者の語彙リストに基づく対応関係は次のとおり (4 拍語は類別語彙開発中・厳選前)。

2 拍	高 H1	高 L0	3 拍	高 H2	高 H1	【参考】 クラメールの V
三②	3	0	三③	34	1	3 拍三・高 V=0.6866
三①	1	1	三②	15	41	
3 拍	東①	東②	3 拍	三③	三②	3 拍群・東 V=0.9633
群①	17	1	群①	18	0	3 拍群・三 V=0.7528
群②	0	56	群②	9	51	
4 拍	高 H3	高 L3	4 拍	群①	群③	4 拍三・高 V=0.024 (低い)
三④	44	4	三④	24	25	4 拍三・群 V=0.4262
三③	118	13	三③	12	103	
4 拍	東①	東③	4 拍	岩①	岩 -②	4 拍三・東 V=0.5011
三④	26	14	三④	27	12	4 拍三・岩 V=0.511
三③	14	80	三③	14	66	

4 拍	東①	東③	4 拍	岩①	岩一②	4 拍群・東 V=0.7454
群①	33	3	群①	32	4	4 拍群・岩 V=0.6869
群③	12	86	群③	14	75	
			4 拍	岩①	岩一②	4 拍東・岩 V=0.7286
			東①	30	7	
			東③	6	63	

独立性の検定を用いると、2 拍語に有意差は無し、3 拍語の 3 つの対応関係についていずれも $p<0.001$ 水準で有意差あり（クラメールの V は十分に高い）、4 拍語の三原村・高知市の中に有意差は無し（クラメールの V は明らかに低い）、4 拍語の残りの 6 つの対応関係についていずれも $p<0.001$ 水準で有意差あり（クラメールの V は東日本では十分に高いが、西日本の三原村が参加するとやや低めに出るので、類別語彙の厳選はやはり必要となる）。4 拍語は今後、類別語彙を厳選することによって対応関係の例外を排除する必要がある。言うまでもないが、前節の 4 方言完全一致の 1 類 21 語と 2 類 50 語で計算するとクラメールの V は $V=1$ （最高値）となる。V の高さをどこまで求めるかも検討事項である。

4. 形容詞（5 拍以上）のアクセント対応の分析

形容詞（5 拍以上）のアクセント対応について述べる。

筆者の語彙リストに基づく対応関係は次のとおり。

5 拍	東①	東④	5 拍	群①	群④	【参考】クラメールの V
三⑤	10	14	三⑤	16	16	5 拍三・東 V= 0.1972
三④	26	80	三④	35	200	5 拍三・群 V= 0.2901
5 拍	東①	東④	6 拍	東①	東⑤	5 拍群・東 V= 0.6311
群①	26	15	三⑥	13	21	6 拍三・東 V= 0.2879
群④	8	160	三⑤	16	127	
6 拍	群①	群⑤	6 拍	東①	東⑤	6 拍三・群 V= 0.4319
三⑥	20	17	群①	19	17	6 拍群・東 V= 0.4968
三⑤	19	172	群⑤	10	131	
7 拍	東①	東⑥	7 拍	群①	群⑥	7 拍三・東 V= 0.2816
三⑦	2	4	三⑦	3	6	7 拍三・群 V= 0.4629
三⑥	3	38	三⑥	1	70	
7 拍	東①	東⑥				7 拍群・東 V= 0.3419
群①	2	2				
群⑥	4	40				

独立性の検定を用いると、5 拍語は三原村・東京間で $p=0.0037<0.01$ 、他は $p<0.001$ で有意差あり（クラメールの V は群馬・東京間以外は明らかに低い）。6 拍語はいずれも $p<0.001$ で有意差あり（クラメールの V はいずれも低めに出ている）。7 拍語は三原村・東京間で有意差なし、三原村・群馬間で $p<0.001$ 、群馬・東京間で $p=0.0179<0.05$ で有意差あり（クラメ

ールのVはいずれも低めに出ている)。このように西日本の三原村が参加するとクラメールのVが低めに出るので、本土アクセント祖体系に遡らせることはさほど簡単ではない。5拍以上の形容詞アクセントの調査の意義は共時的な二型対立の確認に留まると考えられる。

5. 形容詞（5拍以上）の共時的な無核型の具体例について

「三」、「東」、「群」で概ね3方言一致して（一部で2方言一致や1方言のみのものも含む）1類相当の語彙を挙げる。5拍語は「荒くたい、荒っぽい、薄赤い、薄甘い、薄暗い、かつたるい、聞き辛い、口重い、口軽い、香ばしい、程遠い、仄暗い、難しい、やりづらい」（14語）、6拍語は「甘酸っぱい、甘ったるい、甘っちょろい、薄明るい、疑わしい、うら悲しい、気恥ずかしい、気難しい、くすぐったい、生易しい、平べったい、ほの明るい、物悲しい」（13語）、7拍語は「危なっかしい、数え切れない、むさっ苦しい」（3語）、8拍語は「助平ったらしい」（1語；中之条町方言のみ）、9拍語は無し。これを見ると5,6拍語については試みに類別語彙を立てて分析してみてもよさそうに見えるが、そもそも5拍語以上では歴史的にはほとんど2単位形アクセントだった蓋然性が高く（複合動詞が嘗て2単位形アクセントだったという論を参照）、1単位形アクセントの祖形を考えにくい。

6. 形容詞（3拍語）における方言形の母音融合について

中之条町方言の形容詞における方言語彙や母音融合形について述べる。

2拍語「[ス]イ①」は不使用で「スッ[パ]イ③」使用。「[ナ]イ①, [ネ]ー①」両用。

3拍語について述べる（3拍語以下は網羅的に調査した）。標準語形は使用する。その上で、方言形がある場合に、以下で列挙する（母音連続がウイ・オイの場合、母音融合形が出ていく傾向がある；アイ・オイはエーになる；Tはウイがイーに、Yはウイがエーになる）：「青い、ア[エ]ー②」、「赤い、ア[ケー①]」、「浅い、ア[セー①]」、「暑い・熱い、ア[チ]ー②(Tのみ)」、「甘い、ア[メー①]」、「荒い・粗い、ア[レー①]」、「淡い、ア[エ]ー②(Yのみ)」、「痛い、イ[テ]ー②」、「旨い、ン[メ]ー②」、「偉い、エ[レ]ー②(Yのみ)」、「多い、オ[ーエ]ー③(Yのみ)」、「遅い、オ[セー①]」、「重い、オ[メー①]」、「堅い・硬い、カ[テー①]」、「痒い、カ[イ]ー②(Tのみ)」、「辛い・鹹い、カ[レ]ー②」、「臭い、ク[セ]ー②」、「諄い、ク[デ]ー②(Tのみ)」、「暗い、ク[レー①]」、「黒い、ク[レ]ー②」、「煙い、ケ[ミー①(Tのみ)]」、「怖い・強い、コ[エ]ー②」、「寒い、サ[ミ]ー②(Tのみ)」、「白い、シ[レ]ー②」、「吝い、シ[エ]ー②」、「凄い、ス[ゲ]ー②」、「狡い、ズ[リ]ー②(Tのみ)」、「吝い、セ[ケー①(Tのみ)]」、「狭い、セ[メ]ー②」、「高(丈・値)、タ[ケー①]」、「怠い、ダ[リー①(Tのみ)]」、「近い、チ[ケー①]」、「強い、ツ[エ]ー②」、「辛い、ツ[レー①]」、「大い、デ[ケー①(Tはデッ[ケー])]」、「遠い、ト[ーイー①(Tのみ)]」、「長い、ナ[ゲ]ー②」、「苦い、ニ[ゲ]ー②」、「温い、ヌ[ケー①(Yのみ；Tはヌッ[ク]イ)]」、「温い、ヌ[レ]ー②(Yのみ)」、「眠い、ネ[ミー①(Tのみ)]」、「鈍い、ノ[レ]ー②」、「汚い、バ[ベ]ー②(Yのみ；幼児語)」、「早い・速い、ハ[エ]ー②」、「酷い、ヒ[デ]ー②」、「広い、ヒ[レ]ー②」、「深い、フ[ケー①]」、「太い、フ[テ]ー②」、「細い、ホ[セ]ー②」、「古い・儲い、ボ[レ]ー②」、「不味い、マ[ジ]ー②(Tのみ)」、「丸い、マ[リー①(Tのみ)]」、「丸い、マ[レー①]

(Y のみ)」、「脆い、モ[レ]ー②」、「危険い、ヤ[ベ]ー②(Y のみ)」、「緩い、ユ[リ]ー②(T のみ)」、「緩い、ユ[レ]ー②(Y のみ)」、「弱い、ヨ[エ]ー②」、「若い、ワ[ケ]ー②」、「悪い、ワ[リ]ー②(T のみ)」、「悪い、ワ[レ]ー②(Y のみ)」。

4 拍語以上については話者から報告があった場合等に備考をメモしているが、紙幅の都合で一部のみ掲載する（全体像は別稿に譲る）。標準語形は使用する。その上で、方言形がある場合に、以下で列挙する：「明るい、ア[カリー]④(T のみ)」、「煩い、ウ[ルセ]ー③(T のみ)」、「寂しい、サ[ビシ]イ③は男、サ[ミシ]イ③は女が使用する(Y の談)」、「鋭敏い、ハ[シッケ]ー④(T のみ)」、「かったるい、一般に/QtV/（他の例：自分勝手）で必ず破擦音/Q/[ts]になる(Y のみ；繰り返し発音によって確認済)」、「黴臭い、カ[ビクセ]ー④(T のみ)」、「気味悪い、キ[ミワリ]ー④(T のみ)」、「けち臭い、ケ[チクセ]ー④(T のみ)」、「煙たい、ケ[ムッテ]ー④(T のみ)」、「様は無い、ザ[マ]アネー②(T のみ)」、「埒もない、[ダ]チモネー①(T のみ)」。

7. おわりに

群馬県吾妻郡中之条町方言（中輪東京式）の特徴としては、中之条町方言が関東の中輪東京式アクセントを代表する方言の一つとして相応しいこと（高山（2026）の内容も踏まえて）、共時的に多くの④型（1 類相当の型）の形容詞を擁すること（特に 8 拍語は初報告）、4 拍形容詞アクセントの二型対立の再構に寄与するデータとなること、これらの 3 点が明らかになった。今後の課題としては、関東における他の中輪東京式の方言や、関東に隣接する県における中輪東京式の方言などを同様に調査していくことなどが考えられる。

参考文献

- 上野善道（2006）「日本語アクセントの再建」『言語研究』130: 1-42.
- 上野善道（2021）「岩手県田野畑村方言の用言アクセント資料(3) —形容詞(1)—」『ことばとくらし』33, 11-34.
- 金田一春彦（2005）『金田一春彦著作集第七巻』東京：玉川大学出版部.
- 金田一春彦監修・秋永一枝編（2009）『新明解日本語アクセント辞典（第 13 刷）』東京：三省堂.
- 高山林太郎（2018a）『タッスイのツとは何か』高知：リーブル出版.
- 高山林太郎（2018b）「高知県伊豆田神社付近の方言のアクセント」『音声研究』22(3) : 1-16. 東京：日本音声学会.
- 高山林太郎（2022）「高知県伊豆田神社付近の方言の形容詞のアクセント」『日本語学会 2022 年度春季大会予稿集』49-54. オンライン.
- 高山林太郎（2026）「群馬県中之条町方言のアクセントの体系と対応」『第 40 回日本音声学全国大会予稿集』東京：早稲田大学.
- 中井幸比古（2002）『京阪系アクセント辞典』東京：勉誠出版.
- 平山輝男（1957）『日本語音調の研究』東京：明治書院.
- 平山輝男（1960）『全国アクセント辞典』東京：東京堂出版.

逗子市小坪漁港の漁業者集団語の言語イメージと漁場名の考察

佐藤旺斗 SATO AKITO (東京海洋大学大学院)

1. はじめに

本発表は、神奈川県逗子市で唯一の漁港、小坪漁港における、漁業者集団が使用する集団語の研究に基づくものである。これまでの漁業者集団語を対象とした方言及び集団語研究は、対象範囲が風向名や魚名などに絞ったものがほとんどで、特定の漁業者集団の語彙体系を明らかにした研究は少なかった。そこで本研究では、文献調査と漁業者への聞き取り調査により、当該漁港の漁業者集団語を収集し、全体像の把握に努めた。その過程で収集された、文献に載っていない新規語彙、特に漁場名に関する考察と、漁業者自身の漁業者集団語への言語イメージについて、本発表で報告する。

2. 先行研究

2. 1 集団語

「集団語」という言葉は、1956年に柴田武が隠語、職業語、スラングを指して呼んだのが始まりである。米川(2009)はそれぞれの職業語や若者言葉などに隠語と非隠語が存在するとした上で、集団語を「特定の機能的社会集団(血縁的・地縁的ではない)に特有な、あるいは特徴的な仲間内の通用語のこと」と再定義した。本発表における「漁業者集団語」も、この流れにならない、「漁業者集団に特有な、あるいは特徴的な仲間内の通用語」とする。

2. 2 漁業者集団語

これまでの漁業者集団語に関連する研究は、ある特定の地域に注目して行われたものが多い。例えば加治工(1986)では、沖縄県鳩間島で使われる漁業に関する語彙を、漁法に応じて分類している。また、灰谷(2009)では、島根県小伊津町の営漁における漁場特定に関わる語彙を収集している。漁場特定に欠かせない風位語彙に関する記述は、漁業者の語彙の中でも比較的研究が進んでいる。室山(1983)は、全国の漁村で収集した風位語彙をまとめた資料集である。これによって風位語彙の分布の全体像が提示されたのち、久木田(1986)や方言ゼミナール(2009)など、各地域に限定した風位語彙の研究が行われた。また、漁法の名称および漁具の名称に関する語彙は、柴田・東川(1983)の瀬戸内海の島々を対象にした研究を始めとして、柏本・広島女学院大学方言研究会(1984)、加治工(1986)、永瀬(1994)にて各地域で収集されている。一方魚名に関しては、室山(1982)が、魚名だけに注目した初期の研究と言える。室山は主に漁獲対象魚種の呼び名の派生形を元に、命名法や使用者の弁別基準に言及しており、魚名の成り立ちに着目する点では高橋(2014)と共通している。

このように、今までの漁業者の言葉に関する研究は、ある地域の、ある分野に限った語彙に絞ったものが多く、ある地域の漁業者の語彙全般に広げた研究は、管見の限り見当たらなかった。そこで本研究では、逗子市の漁業者集団語の全体像把握に努めた。

なお、先行研究の多くは、漁村という地域の方言研究の一環として行われており、収集された語も、その地域の方言と重複する語が多い。研究対象が、漁業という地域に密接に関わる一次産業で使われる言葉であるため、当然の結果といえる。本研究においては、漁業者の言葉を集団語として扱う上で、その言葉の出自だけでなく、その言葉が集団内でどのように機能しているかという点も重視して分析するため、方言も排除せず漁業者集団語として収集する。

3. 研究概要

3. 1 研究対象

今回、研究対象として選定したのは、逗子市小坪漁港の漁業者たちである。選定の主たる理由は、調査の前提となる文献資料に、漁業者集団語のまとまった記録が残っていたことである。またフィールドワークによる参与観察と補完的なインタビュー調査を想定して選定した。

小坪漁港は、逗子市の西側に位置する歴史のある漁港である。現在はワカメやシラスを中心に年間 70 トン程度の水産物を水揚げしており、組合員約 30 名（2023 年時点）という小さな漁港ながら、営漁、観光開発、生産量拡大に向けた取り組み等精力的な活動を行っている。

3. 2 調査方法

調査は、2023 年から 2024 年に行った本調査と、2025 年 4 月以降に行った追加調査に分けて記述する。

本調査では、文献調査、参与観察および調査票を用いた聞き取り調査を行った。まず文献調査では、2023 年 11 月から 2024 年 8 月まで、『はまことば（小坪）小辞典』（石井 1985）、『逗子市文化財調査報告書第 15 集小坪の漁労具』（逗子市教育委員会編 1993）などを用いて、漁業者集団語を収集した。その手法は、語彙とその意味を合わせて収集し、用法や成り立ちに関する記述があれば、それもあわせて記録するという方法である。またこうした文献上の漁業者集団語について、その使用状況について聞き取り調査を行った。この調査では、調査票を作成し、それぞれの語彙について画像を提示しながら使用状況を質問した。加えて普段の営漁活動への参与観察を通して、文献にない語彙も収集した。

ここまでの本調査で、文献における漁業者集団語の語彙 98 語、そして文献にない漁業者集団語の新規語彙 88 語を収集し、文献上の語彙については使用頻度や認知度も明らかにできた。追加調査では、本調査でとることのできなかった文献にない新規語彙の使用頻度・認知度および、漁業者集団語に対する漁業者の言語イメージに関するデータをとった。その手法は調査票を用いた聞き取り調査であり、本調査の聞き取りと同様の方法である。調査票は、言語イメージの質問では 5 段階の SD 法を、新規語彙の質問では 5 択選択形式に設定した。さらに対象者の内の 5 名には、漁場名に関して半構造化インタビューも行い、伝承の様相について詳しく尋ねた。各調査の対象者は、下記表 1 の通りである。

表 1：各調査の調査対象者とその年齢および操業年数

漁業者	年齢	操業年数 (約)	本調査 調査票	本調査 参与観察	追加調査 調査票	追加調査 半構造化
A 氏	70 代	40 年	○	○	○	
B 氏	60 代	30 年	○		○	○
C 氏	50 代	30 年	○	○	○	○
D 氏	50 代	15 年	○	○	○	
E 氏	50 代	15 年	○	○	○	
F 氏	40 代	10 年	○		○	○
G 氏	40 代	5 年	○	○	○	○
H 氏	30 代	5 年	○	○	○	○
I 氏(女性)	40 代	15 年			○	
J 氏(女性)	30 代	10 年			○	

発表者作成。

4. 漁業者集団語の言語イメージ

漁業者集団語全体に対する言語イメージについて、調査票では、16 の形容詞の対を設定し、5 段階のどこに当てはまるかを選択してもらった。回答の平均をとって示したのが、図 1 である。形容詞対の中で、回答が全員共通していたのは「汚い—きれい」における「汚い」、「大雑把—繊細」における「大雑把」だった。また、「荒っぽい—穏やか」における「荒っぽい」、「大声—小声」における「大声」、「厳しい—優しい」における「厳しい」、「聞きとりにくい—聞きとりやすい」における「聞きとりにくい」、「古めかしい—新しい」における「古めかしい」も、偏って回答された。「早口—ゆっくり」、「暗い—明るい」では、中間値である 3 と回答した漁業者が 2 名いたが、それ以外はそれぞれ「早口」、「明るい」に偏って回答された。一方で、

「柔らかい—硬い」では、B、C、J氏が「硬い」寄りの回答で、それ以外が「柔らかい」寄りだった。このように漁業者によって回答が分散した形容詞対は、「冷たい—温かい」、「親しみにくい—親しみやすい」、「つまらない—楽しい」、「地味—派手」、「使いたくない—使いたい」、「かっこよくない—かっこいい」だった。この調査では対象者が10人と少なかったこともあり、分散の仕方に年齢や性別、営漁年数などの属性による影響は見られなかった。しかし参与観察を通して、漁業者集団語に対する個人の意識・評価も一部明らかになっているので、口頭発表時に詳しく言及する。

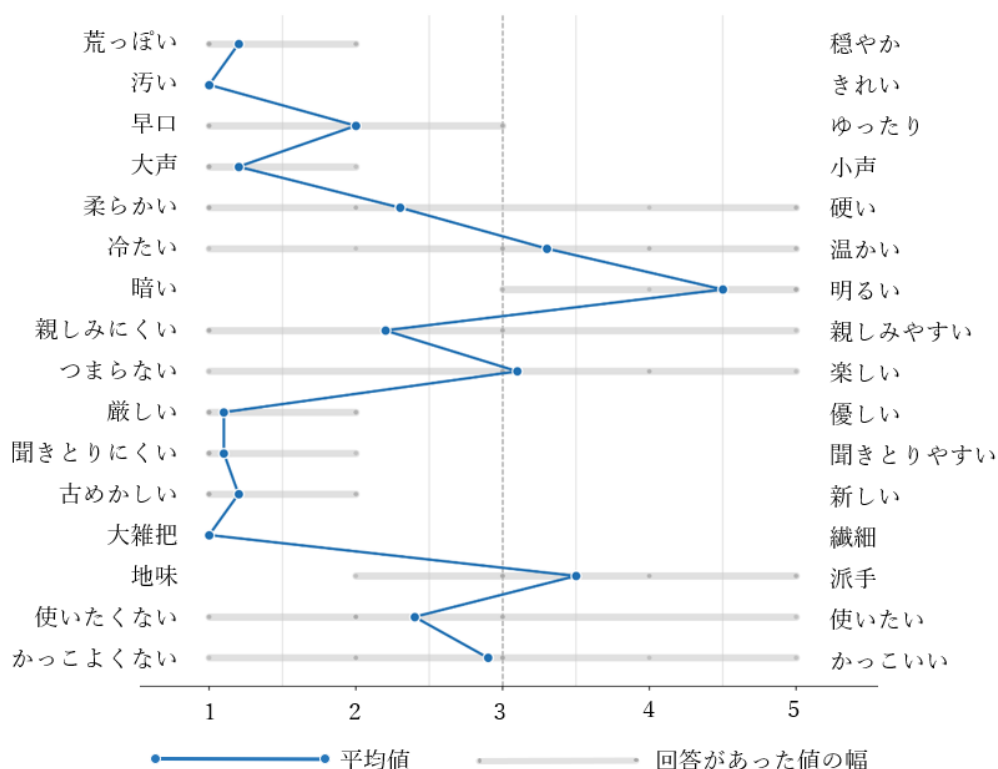


図1：SD法による漁業者集団語全体に対する漁業者の言語イメージ評価(発表者作成)。

次に、漁業者集団語の各語に対する言語イメージの調査結果である。今回は南風を意味する「カゼ」、「イガイ根」などの漁場の名前、水中を覗く箱眼鏡である「カガミ」に絞って調査票を設計した。「カゼ」については、参与観察を通して、船出に影響の大きい南風の省略表現であることがわかっており、省略することによる効率性や、風全般を意味するカゼと混同しないのかという、意味の伝わりやすさ/伝わりにくさに対する漁業者の評価を明らかにするために選定した。漁場名については、参与観察にて、漁家ごとに秘密の漁場を継承するために用いられたという話があったため、伝統性や隠語的機能を漁業者がどれだけ認識しているのか調べるために取り上げた。「カガミ」は、本調査の調査票による聞き取りで、全漁業者が高い使用頻度で使っていることがわかったので、代表的な漁業者集団語として、習慣性や発語する際の意識について明らかにする目的で選んだ。結果は図2の通りである。「カゼ」については、「非効率的—効率的」、「理解しにくい—理解しやすい」で回答が分散した。特に後者は「理解しにくい」寄りの回答が半数以上を占めたが、属性による影響は見られず、若い人ほど理解しにくいというわけではないことがわかった。「独特—一般的」ではB、J氏を除く全員が「独特」寄りの回答で、A氏からは漁業者やサーファーなど海の活動に従事する人の言葉であるという指摘があった。漁業者集団よりも大きい言語集団で使われていることが考えられるが、地域方言や共通語

に比べて「独特」と認識する漁業者が多いようである。漁場名については、「秘匿的—オープンな」において「秘匿的」寄りの回答が半数を超えたが、G氏は「オープンな」寄りの回答だった。G氏いわく漁場名の隠語的な使用の機会は、先代が現役最盛期だった30年から40年前より大きく減っており、それを意図しての回答だった。しかし他の漁業者の言語イメージでは、いまだに「秘匿的」な印象が残っていることがわかる。一方「伝統的—現代的」、「マイナー—メジャー」はそれぞれ「伝統的」、「マイナー」に偏って回答され、少人数の集団で継承されてきた言葉という認識が根強いようだった。最後に「カガミ」では、「簡単—難しい」で2名が中間値3で回答した以外は、全ての形容詞対で偏った回答となった。箱眼鏡を「カガミ」と呼ぶことは、集団内においては慣例的に行われており、集団語らしい様相を確認できた。

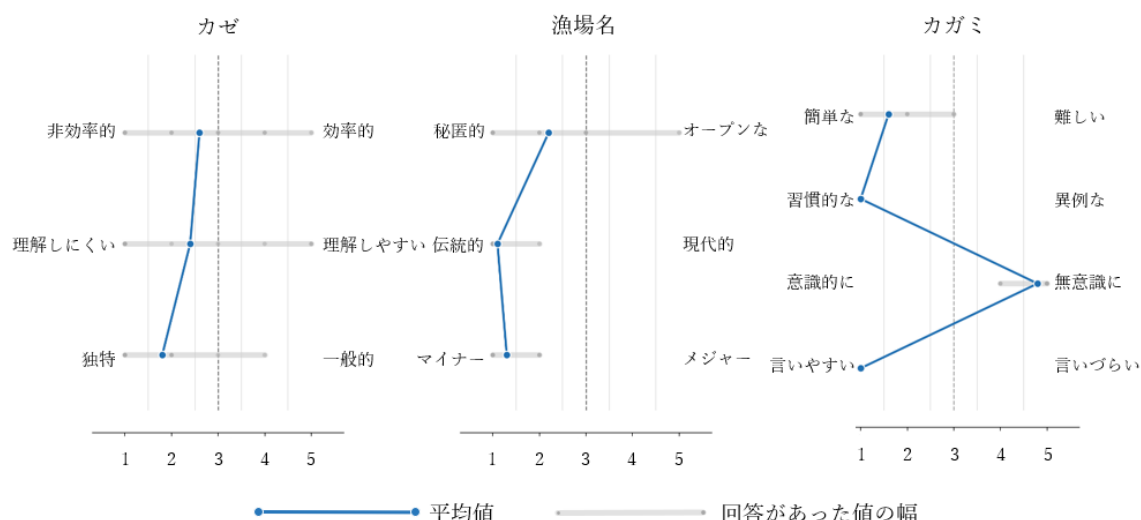


図2：SD法による各語に対する漁業者の言語イメージ評価(発表者作成)。

5. 新規語彙の使用頻度・認知度

5.1 調査票による使用頻度・認知度調査

今回の追加調査では、風位語彙3語、漁具名2語、生物名9語、操船に関する語彙3語、漁場名28語について、認知度や使用頻度を5段階で評価してもらった(1=現在でも頻繁に使用する、2=現在では時折使用することがある、3=現在の使用はほとんどないが、過去に使っていた、4=過去の使用もないが、聞いたことはある、5=過去の使用もなく、聞いたこともない、の5段階)。よってここでは回答の値が小さいほど、使用頻度が高く、値が大きいほど認知度が低いということになる。

まず風位語彙は、加齢と営漁年数に応じて認知度が高まる傾向がみられた。「ニシナレエ(北西風)」を現在でも頻繁に使用するのはA、B氏のみで、「サガ(西北西風)」「ニシノカゼ(西風)」も含め今回挙げた風位語彙を使用すると回答したのは、他にC、D氏などのベテラン漁師のみであった。特にB、C氏は3語の使用頻度が高く、回答平均2.00だったのに対し、J、F氏は4.67と認知度が最も低かった。年齢別のカテゴリー平均値は、30代で4.50、40代4.00、50代3.22、60代以上で2.50と、全体的に「現在は使わない」傾向にあるものの、年齢に伴って認知度が高くなる傾向が読み取れる。

次に漁具名であるが、今回は「アカクミ(船底の水を掻き出す桶)」、「〇寸〇分(目の大きさで区別する網の呼称、〇には数字が入る)」の2語のみを調査した。「アカクミ」は4や5を選択する漁業者が10名中6名を占め、全体的には使われなくなった語であることがわかる。1や2と答えたのはE、I氏で、このうちE氏は参与観察中にアカクミが船内にあるのを確認できた。バケツを代わりに使用する漁業者は他にも確認されたが、アカクミそのものを使用してい

たのはE氏のみであり、漁具の使用の有無が漁具名の認知度、使用頻度に紐づいていると考えられる。反対に、現在も漁業に欠かせない漁網の呼称である「〇寸〇分」の回答の値は平均1.10で、10名中9名が1の選択肢を選んだ。世代を問わず共有された、現役の漁業者集団語であることがわかった。

次に生物名は、語ごとの差が最も大きいカテゴリーだった。「サゼエ(サザエ)」、「ギーギー(イセエビ)」、「ナダ(ウツボ)」、「ジコ(カタクチイワシ)」は全体平均3未満の使用頻度、認知度の比較的高いグループで、中でも「サゼエ」は1と回答した人が7名、「ギーギー」は5名いた。一方、「エイッパラ/エイシ(スマガツオ)」、「ウミンチュ(タツナミガイ)」、「カエビ(アワビ)」、「ソゲ(小さいヒラメ)」は平均4以上と認知度が低く、特に「エイッパラ/エイシ」は4.90/4.80とほぼ誰も聞いたことすらなかった。サザエやイセエビ、シラス(主にカタクチイワシの稚魚)などは小坪漁港で獲れる代表的な漁獲物であり、ウツボも小坪漁港で盛んな刺網漁にかかる魚の1種であるため、認知度が高いと考えられる。反対に漁獲量の少ないスマガツオや、漁獲対象ではないタツナミガイの認知度は自然と低くなると推測される。

操船に関する語は、5つのカテゴリーの中でも最も認知度が低く、「ゴーヘイ(船を前進)」「ゴースタン/ゴッサ(船を後進)」の3語で1から3の選択肢を選んだ人は誰もいなかった。「ゴーヘイ」は回答平均4.60、「ゴースタン/ゴッサ」は4.60/4.80で、ベテラン漁業者であるB、C氏と中堅漁業者のF氏だけが4を付けるにとどまった。

最後に漁場名であるが、本調査で28語もの新規語彙が確認され、使用頻度、認知度にも語ごとの差がみられた。全員が1と回答した「オーサキ」、平均1.70の「デーブツ根」、「サゼエ根」2.00、「ヨコ根」2.00、「タキノメエ」2.00、「マツエダシ」2.30、「マエガイソ」2.40、「ナカ根」2.60が高頻度で使用する側にあるのに対し、「カネガサキ」は平均4.50、「ミゾアワセ」4.40、「ニノツカ」4.30、「オーベヤ」4.00は共有度が低かった。属性でみると、年齢別では30代で3.96、40代3.33、50代3.17、60代以上で2.55と、加齢に伴い全体の認知度は上がることがわかった。また営漁年数でも、1~10年で4.04、11~20年で3.11、26年以上で2.67と、長期従事層ほど多くの漁場名を現役で使う傾向が明瞭だった。

5. 2 漁場名に関する半構造化インタビュー

漁場名については、本調査において28語を収集した段階で、漁業者ごとに知っている根が違うことが明らかになった。共通して全員が知っている根と、知っている者が限られる根について、どのように伝承されたのか、違いがどこにあるのかを調べるために、半構造化インタビューを行った。対象者は表1の通りで、本調査で根について新規語彙の回答があった5名を選定した。特にB、F氏は回答数が多く、C氏も回答数は少ないものの認知度は全体的に高かった。G、H氏は参与観察で伝承についてのエピソードを持っていることが分かったので、対象に入れた。質問内容は、それぞれ個別の漁場名と、全員に共有されている漁場名の2つについて、いつ誰からどのように聞いたかを尋ねるものである。

結果としては、認知の限定的な漁場について、F、G、H氏は見習い期間に漁師の先輩から教わったことがわかった。小坪漁港では、「ワケエシ(若い衆)」という言葉があり、見習いの漁業者のことを指す。「ワケエシ」の期間は1年から3年続き、この間に先輩から場所と呼び名、何が獲れるかを教わるようである。B、C氏も同様に「ワケエシ」の期間に漁場名を覚えたというが、教わったというより会話の中で造語として自然に発生していたという。B氏によると「オーベヤ」は、海底の地形が壁に囲まれた空間のようにになっていることが由来で、より小さい空間の「コベヤ」という漁場と共にこう呼ぶようになったそうである。また、最初はスラング的に生まれた「オーベヤ」、「コベヤ」は、漁場を他者から秘匿する目的でも使われる機会があったという。魚がよく獲れる漁場は漁師同士でも簡単に言わなかったようで、「オーベヤ」もそうした漁場の1つだった。小坪漁港は「ハマ」と呼ばれる漁師小屋がひしめき合っており、それぞれの小屋への漁業者同士の往来や交流も非常に多い。普段から仕事の競合相手とラフに話す文化であるゆえに、漁場という重要な情報をもつ語に、そうした隠語的機能が育まれたと考えられる。集団語の他集団への隠語的機能は確認できなかったが、入会を基本とする

漁業らしい集団語の様相を確認することができた。

一方で、集団全体に共有されている「オーサキ」や「デーブツ根」などについては、漁業者というよりも地域全体が知っているようで、方言的な要素が強かった。例えばF氏は「デーブツ根」について、地元のサーファー友達から教えてもらったという。もちろん漁業者の先輩から教わった人もいたが、認知の限定的な漁場のように、漁業者間の緊張した関係を象徴するようなものではなく、あくまで小坪で漁撈を営む上での前提として教わっているようだった。

6. おわりに

本発表では、逗子市小坪漁港における漁業者集団語の言語イメージおよび新規語彙の認知度・使用頻度について考察を行った。新規語彙の漁場名に関する分析からは、認知度の限定的な語ほど秘匿性や造語性といった「集団語らしさ」を有している一方で、現在ではそうした語が伝承されず衰退の一途をたどっている実態が明らかとなった。反対に、地域全体に広く知られる「集団語らしからぬ」語の方が集団内でも頻繁に使用されており、伝統的な集団語の機能が変容・消滅しつつある過渡期にあると考えられる。

一方で、本研究には限界点も存在する。追加調査のインフォーマントが10名と少数であるため、統計的に有意な実証調査には至っていない点や、フィールドワーク等で収集したデータが膨大であるため、依然として分析の途上にある点が挙げられる。

今後は、調査対象者や分析データをさらに拡充させるとともに、収集した語彙や関連する語の情報を体系的・辞書的に整理し記録・保存を図ることが課題である。これにより、小坪漁港における語彙体系の全体像を明確にし、漁業者集団語の研究に寄与したい。

参考文献

- 石井清司（1985）『はまことば（小坪）小辞典』
- 加治工真市（1986）「鳩間方言の漁業語彙」『琉球の方言』10:1-24.
- 久木田恵（1986）「漁業社会における風の語彙体系の記述と比較の方法」『方言研究年報』29:91-109.
- 柴田昭二・東川栄子（1983）「備讃瀬戸漁村語彙稿（1）（2）」『香川大学教育学部研究報告』58:1-57.
- 柴田武（1956）『現代社会とことば＜ことばの講座＞』東京創元社
- 逗子市教育委員会編（1993）『逗子市文化財調査報告書第15集小坪の漁労具』逗子市教育委員会
- 高橋そよ（2014）「魚名からみる自然認識：沖縄・伊良部島の素潜り漁師の事例から」『地域研究 = Regional Studies』13:67-94.
- 永瀬治郎（1994）「霞ヶ浦の漁業語彙」『専修国文』55:19-36.
- 灰谷謙二（2009）「出雲地方の漁業集落の風位語彙と漁場確定語彙－出雲市小伊津町方言からみる開放系 漁場の特徴－」『尾道大学日本文学論叢（2011年度まで）』5:21-35.
- 灰谷謙二（2011）「漁場の地理的環境と漁場特定語彙」『尾道大学日本文学論叢（2011年度まで）』7:15-25.
- 方言ゼミナール（2009）「紀伊半島南部の漁業社会における風位語彙の構造—印南町印南と串本町古座の比較—」『国語と教育』34:23-38.
- 室山敏昭（1982）「真鍋島共同学術調査報告 国語学班@岡山県笠岡市真鍋島岩坪方言の魚名関係の語彙」『内海文化研究紀要』10.
- 室山敏昭（1983）「全国各地漁業社会の風位語彙資料」『広島大学文学部紀要』43(特輯 2):1-143.
- 梁敏豪（2010）「日本の船舶用語に見られる外来語方言の使用に関する研究—三陸南部地域の調査を中心に—」『日本言語文化』16:247-267.
- 米川明彦（2009）『集団語の研究（上）』東京堂出版

琉球諸語の言語資源のコーパス化—同源性接続枠組に基づく提案と実現性検証—

セリック・ケナン¹ エイデン・コールマン¹ トレバー・スレビン¹横山晶子¹ (よこやま・あきこ) ¹国立国語研究所

1. 背景と目的

日本語研究では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』、『日本語話し言葉コーパス』、『日本語歴史コーパス』など、共通の形態素情報を備えた検索可能なコーパスが整備され、語彙や文法などに関わる現象を量的に検証できる基盤となっている。一方、琉球諸語では、各地の辞典、語彙集、例文集、談話・音声資料が蓄積され、『大琉球辞典』のようにデータベース上での公開も進みつつあるものの、① 形態素情報を備えたコーパスの構築、② 独立に作成された既存の言語資源を横断的に検索できる共通基盤の整備、という課題が残されている。そのため、日本語研究と琉球諸語研究の研究基盤の整備水準には、依然として大きな隔たりがある。

形態素情報を備えた琉球諸語のコーパスを構築するには、次の課題がある。第一に、琉球諸語は「低資源言語」であるため、コーパス構築には構造的な制約がある。話者人口がもとより小さく、日本語への言語交替によってさらに減少している上、例外を除き書き言葉の伝統を持たないため、文字資料が少ない。すなわち、利用可能な言語資源が構造的に限られている。今後の資料拡充は可能であるものの、同様の構造的要因によって強く制約されるため、琉球諸語について大規模なコーパスを新たに構築していくことは、必ずしも現実的ではない。したがって、各地で独立に蓄積されている希少な言語資源を相互に接続し、その総体を一つの研究基盤として最大限に活用することが望ましい。しかし、琉球諸語の既存の言語資源は、相互理解が成り立たない複数の言語にまたがる上、目的、構造、表記などを異にする非等質な資料から構成されている。したがって、各資料の独立性を保ちながら、横断的に検索・比較可能な形で接続する必要がある。第二に、形態素情報を備えたコーパス構築の一般的課題として、形態素情報を付与するためには、各資料に現れる形態素を安定して同定できる ID 体系が必要となる。しかし、琉球の各言語・方言について網羅的な形態素 ID 体系をゼロから構築することは、作業負担が極めて大きい。

本発表では、これらの課題に対して、「形態素間の同源性」を接続原理として採用し、琉球諸語の語彙資源を同源性に基づいて接続するために開発された UniCog (Celik et al. 2024) を転用した形態素注釈枠組を提案する。さらに、琉球諸語 3 地点、すなわち北琉球の沖永良部語上平川方言、南琉球の宮古語皆愛方言および八重山語西表祖納方言の言語資料への試験的な適用を通じて、その実現可能性を検証する。

2. 接続原理としての形態素間の同源性とその実現性

琉球諸語は、音韻・文法などが極めて多様である一方、共通の祖語に由来しているため、現在もなお祖語から継承された多くの「同源語」を共有している。257 の基礎概念に基づいて琉球諸語 15 変種を比較すると、変種の対ごとの同源語共有率は 65~95% に及び、全組合

せの平均は 79.5 % である (Pellard et al. 2026 のデータに基づき計算)。そのため、文法体系が大きく異なる変種間でも、同じ内容を表す文には、対応する位置に同じ祖形に遡る同源の形態素がしばしば現れる (図 2)。

このように、言語間で高い同源語共有率が認められる以上、各言語・方言ごとに独立した形態素 ID 体系を構築するよりも、琉球諸語全体で共有可能な形態素 ID を共通層として整備する方が効率的である。そして、変化しうる音形・意味や、資料ごとに

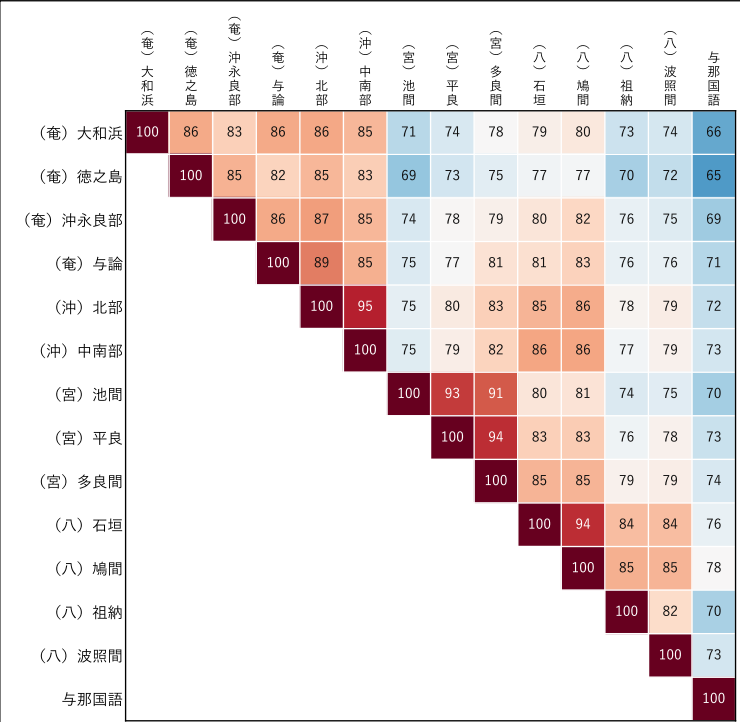


図 1 琉球諸語 257 基礎概念における同源語共有率

異なりうる表記などと違って、形態素間の同源性、つまり、共通の祖形に由来するという歴史的関係そのものは変化しない。そのため、同源性に基づく形態素 ID を用いれば、形態素を安定して同定できるだけでなく、言語や資料の違いを越えて非等質な言語資源を横断的に接続することも可能となる。

宮古語 (砂川)	nnama	kara	du	duʃ	nkai	tigamj	u:	kak	ɣ	gamata
八重山語 (宮良)	nama	gara		dusi	ge	tigami	du	kak		u
日本語訳	今	から		友達	に	手紙	を	書く		

図 2 文例における同源形態素 (同じ色 = 同源形態素)

しかし、同源性が現実的な接続原理として機能するためには、琉球諸語について、信頼できる同源語認定が十分に蓄積されている必要がある。この点については、100 年近くにわたって膨大な研究成果が蓄積されており、一から始めなければならない段階には、とくにない。ネフスキーによる 1920 年代の宮古語辞書稿本を重要な初期の到達点として、Thorpe(1983)、Martin (1987)、五十嵐 (2016)、ローレンスによる一連の比較研究などに加え、地域の話者・研究者によって編纂された大型方言辞典 (前新 2011、富浜 2013 等) にも、他の琉球諸語や日本語との対応語が体系的に記載されている。これらは、個別の語について散発的に同源性を論じた研究ではなく、数千語規模で語彙対応を体系的に提示した研究・資料を含む。例えば、ネフスキーの宮古語辞書稿本は 5,682 項目のうち 3,049 項目 (53.7%) について同

源語情報を掲載しており、『竹富方言辞典』は 5,300 項目について首里方言の同源語を示している（発表者による調べ）。

さらに、こうした研究の成果を踏まえ、琉球諸語に分布する同源語を共通の ID 体系によって整理した UniCog (Celik et al. 2024) が構築されており、v2.1 では 8,633 の同源語セットが登録されている。UniCog はすでに新たな語彙資料への注釈にも実際に用いられており、『日琉言宝』の語彙データベース v.180 では、登録されている 34,605 語彙項目のうち 18,732 項目 (54.1%) に UniCog に基づく形態素注釈が付与されている。したがって、同源性に基づく形態素 ID 体系を構築するにあたって、既存の比較研究と UniCog の ID 体系を再利用することができる。同源性が不確か、あるいは不明な語については、後述する local ID によって処理すればよく、同源性を接続原理として利用する上での妨げにはならない。

3. 同源性に基づく形態素情報注釈枠組

3.1 二層型形態素 ID 体系と ID 設計

提案する枠組では、琉球諸語全体に共通する形態素 ID 基盤として UniCog を転用する。一方、琉球諸語の各言語・方言の共時体系を、中央的に定められた共通 ID の集合だけで記述することには限界がある。とりわけ、各言語固有の文法形式、感動詞・オノマトペなど UniCog で扱いにくい語彙範疇、UniCog に未登録の語彙については、各注釈スキーマ内で定義される local ID を用いる。

したがって、本枠組では、UniCog ID による「共通層」と、各言語・方言の記述に必要な local ID による「個別層」を組み合わせる。共通層によって言語間の接続可能性を確保すると同時に、個別層によって各言語の共時的な形態素体系を独立に記述することができる。個別層は注釈スキーマを単位として独立に定義され、通常は近縁な言語群・方言群の間で共有して用いることを想定する。したがって、異なる個別層に同じ acc という local ID があっても、例えば宮古語の個別層では -ju を、八重山語の個別層では -ba を指し、両者は同一の形態素とはみなされない。また、個別層は言語群そのものに一意に対応するものではないため、同じ言語群についても、分析方針の異なる複数の注釈スキーマ、すなわち複数の個別層を併存させることができる。これにより、言語間の接続可能性を確保しながら、個々の研究・資料における分析の多様性を保持することができる。

ID 設計については次の通りである。

【UniCog ID】UniCog には、形態素の同一性を機械的に管理する数値 ID と、人間が読み取ることのできる文字 ID がある。文字 ID は、原則として「漢字等による意味ラベル」「語頭分節音」「簡略品詞記号 (n = noun, v = verb, a = adjective, o = other)」「識別数字」から構成されており、例えば、同じ *imama に遡る宮古語 nnama「今」と八重山語 nama「今」に対して、UniCog ID の「今 in2」(*ima「今 in」とは別) が該当する。注釈にはこの文字 ID を用いるが、データベース上では、数値 ID によって同一性を管理する。

【Local ID】local ID については、UniCog の文字 ID と混同しない形式を用いる以外、基本的に自由に設計できる。ただし、データ間の一貫性を確保するため、各注釈スキーマ内で

命名規則を定めておくといよい。発表者らの注釈では、文法形式については原則として文法グロスに準じたラベルを用い、UniCog で扱いにくい語彙範疇については、次に述べる group:member 型の ID を、UniCog に未登録の語彙については l: を付した ID を用いる。

【ID の群化】関連する local ID を同じ範疇の下に整理するため、group:member 型の ID を用いることができる。例えば、感動詞を intj:agai、intj:egee、intj:ogoi のように表す（この例では member の部分は各形態素の語形である）。この場合、group は member の解釈範囲を限定するスコープとして機能し、group:member 全体が一つの形態素 ID を構成する。

【サブ ID】さらに、同一の ID の内部で区別を設ける必要がある場合には、>1、>2 のようなサブ ID を用いる。例えば、同一の local ID で表される形式について、主格用法と属格用法を区別したい場合には、ng>1、ng>2 のように記述できる。UniCog ID についても、同一の同源語セットに由来する形式が共時的に分化しており、注釈上区別する必要がある場合には、同様にサブ ID を用いることができる。

以上の二層型 ID 体系による注釈例を(1)に示す。色付きの ID は UniCog ID、それ以外は local ID である。

- (1)

nnama	kara	du	du ₁	nkai	tigamj	u:	kak ₁	gamata
今 in2	abl	foc	友 dn	all	手紙 tn	acc	書 kv	fut

「今から友達に手紙を書く」（宮古語砂川方言）

3.2 注釈設計およびシンタックス

注釈のシンタックスは、資料種別を問わず利用できるよう、あえて単純なものとする。基本構造として「文 > 文節 > 分割単位 > 注釈原子」という階層を採用し、各境界および構造情報を表 1 の記号によって表す。

表 1 注釈記号		
記号	機能	種別
space	文節境界	分割
-	分割単位境界	
;	同一分割単位内の注釈原子境界	
r	完結文末 (EOS)	構造制御
u	未完	
p	休止	
h	言い淀み	
x	不明区間	

3.3 日本語層の n: ID

現代の琉球諸語話者の多くは日本語とのバイリンガルであり、談話中

でも日本語の語彙・表現が日本語として用いられる。これは、琉球諸語側に定着した借用語と区別する必要がある。例えば、宮古語 pitai「兵隊」は、琉球諸語側の形態素 ID「兵隊 pn」で扱う一方、日本語として用いられる heitai「兵隊」は日本語層として扱う。本来的には UniDic 等の日本語側 ID との対応付けが望ましいが、現段階では暫定的に n: を付した ID（例：「n:兵隊」）を用いる。n:は ID 体系上は、日本語由来形式を一律に標示するものではなく、各形式を共時的に日本語層として分析したことを明示し、その分布を検索・検証するための注釈である。

3.4 注釈例

実際の談話資料の注釈された例を(2)に示す。

(2) kenan	nnja	du:-ta-ga	panas-sa	taigai-du	suripp-a:
pn:ケナン	fil:nnja	rfl:1-pl:1-ng:ga>2	話	pn-top:1	大概 tn-foc n:スリップ-abs
fi:	dzɿri	nja:-nni-ba			
為 sv;cvb	n:ずれる;cvb	irr-neg-csl>1			
「ケナン、私たちの話しはかなりスリップしてずれてしまったから...」					
(ユキちゃんの話・宮古語皆愛)					

3.5 提案する形態素情報注釈枠組の利点

このような注釈枠組を適用することで、各言語・方言および各資料における共時的な分析を個別層として保持しながら、同源形態素を UniCog ID による共通層を介して言語横断的に接続することができる。また、資料自体を全面的に統一することなく、語彙・例文・談話資料に共通の注釈体系を適用できるため、資料の特徴や種別を越えて同じ形態素 ID を検索・比較することが可能となる。例えば、現代語の資料のみならず、ハングルで記された沖縄語資料、『おもろさうし』、琉歌などもそれぞれの原表記を保持したまま注釈できる。

4. 実現可能性の検証

提案した二層型注釈枠組を採用することで、コーパス構築上の課題の一つである網羅的な形態素 ID 体系をゼロから構築する負担を大幅に軽減できる可能性がある。文法形式の種類数は語彙項目に比べて限定的であるため、語彙の形態素の多くを UniCog ID で同定できれば、新たに整備すべき local ID の数も比較的小規模に抑えられると予測される。つまり、UniCog ID を共通層として利用することで、各地点について網羅的な形態素 ID 体系を効率よく構築できる見通しが立つ。この見通しを検証するため、① 各資料に現れる形態素 ID タイプのうち、どの程度を UniCog ID で同定できるか、② その結果、新たに整備すべき local ID の集合がどの程度の規模に収まるか、という二点を検討する。

北琉球沖永良部語上平川方言、南琉球宮古語皆愛方言および八重山語西表祖納方言の例文・談話資料に試験注釈を行った。全体で 16,159 文節、33,973 形態素 ID である。UniCog ID のタイプカバー率は、各資料に現れた形態素 ID タイプのうち UniCog ID が占める割合とし、算出した。なお、日本語層を表す n: ID および構造制御記号は、琉球諸語側の形態素 ID 体系のカバー率を測る本集計から除外した。

4.1 結果と解釈

結果を表 2 に示す。UniCog ID のタイプカバー率は、上平川方言で 62.5%、皆愛方言で 77.8%、祖納方言で 72.6% であった。いずれの資料でも UniCog ID が形態素 ID タイプの過半数を占め、とりわけ資料規模の大きい皆愛方言と祖納方言では 7 割を超えている。こ

のことから、UniCog ID を共通層として利用することで、各地点について新たに整備すべき local ID の種類数を比較的小規模に抑え、網羅的な形態素 ID 体系の構築負担を大きく軽減できる可能性が示された。実際、必要となった local ID は、上平川 208 タイプ、皆愛 307 タイプ、祖納 112 タイプにとどまっている。

ただし、カバー率には上平川 62.5%から

皆愛 77.8%まで幅があり、その差の一部を資料規模の差で説明できる可能性があるものの、今後、資料量に伴うタイプ数の飽和、資料ジャンル、語彙選択などを考慮した追加検証が必要である。現段階では、UniCog が琉球南北を問わず、各資料の形態素 ID タイプのおおむね 6～8 割を共通層として覆い、残りを比較的小規模な local ID 体系で補完できることが、3 地点の試験注釈から示された。

表 2 UniCog ID のタイプカバー率

指標	上平川	皆愛	祖納
文節総数	993	13,108	2,058
形態素総数	2,410	26,618	4,945
ID タイプ数	554	1,380	409
うち UniCog ID	346	1,073	297
うち local ID	208	307	112
UniCog カバー率	62.5%	77.8%	72.6%

5. 結論と展望

本稿では、UniCog に基づく共通層と個別層を組み合わせる二層型形態素注釈枠組を提案し、その実現可能性を琉球 3 地点で検証した。3 地点への試験的な適用では、UniCog ID のタイプカバー率は 62.5～77.8%となり、いずれの資料でも琉球諸語側の形態素 ID タイプの過半数を、資料規模の大きい二資料では 7 割以上を共通層によって覆うことができた。したがって、各言語について網羅的な形態素 ID 体系をゼロから構築するのではなく、UniCog を共通層として利用し、残る形式のみを local ID によって補完することで、ID 体系を効率的に構築できる見通しが得られた。この共通層を介することで、各資料の分析的独立性を保持したまま、言語・資料種別を越えた横断的な検索・比較を行うための基盤を構築できる。

今後は、本枠組に基づく注釈データを NRDB で蓄積し、その Cps-Module (kikigengo.ninjal.ac.jp/nrdb/cps) で形態素 ID に基づく横断検索、頻度集計、KWIC、N-gram 分析等に利用する。これらの分析を通じて、本枠組の有効性を引き続き検証する。

参考文献：五十嵐陽介 (2016) 「アクセント型の対応に基づいて日琉祖語を再建するための語彙リスト『日琉語類別語彙』」『日本語学会 2016 年度春季大会予稿集』233-238／Celik Kenan, K. Nakazawa, R. Aso (2024) UniCog: a Framework Proposal for the Dynamic Compilation of Comparative Data for the Reconstruction of proto-Ryukyuan. *NINJAL Research Papers* 26: 69-97／Thorpe, Maner (1983) *Ryūkyūan language history*. Phd Thesis／富浜定吉 (2013) 『宮古伊良部方言辞典』沖縄タイムス社／Martin Samuel (1987) *The Japanese Language Through Time*. Yale U. Press／ネフスキー、ニコライ・A. (2005) 『宮古方言ノート 複写本』上・下。平良市：沖縄県平良市教育委員会／前新透他 (2011) 『竹富方言辞典』南山舎／Pellard, Thomas et al. (2026) Exploring the Impact of Inference Method, Character Coding Scheme, and Cognacy Criterion on Phylolinguistic Inference: The Case of the Japonic Language Family. OSF Preprints／琉球大学『大琉球辞典』<https://ryukyu-lang.lab.u-ryukyu.ac.jp/> (2026 年 9 月 17 日閲覧)。

日本語では〈何が〉「渋滞する」のか
 —「国立国会図書館全文テキストデータ」・新聞記事・Xに見る用法の変遷—
 おかだ しょうへい
 岡田 祥平 (新潟大学)

1. はじめに

「渋滞する」という語について、毎日ことば plus(2025)には、以下のような指摘がなされている。

- ・「渋滞」というのは物事がはかどらず滞ることを指す言葉である。
- ・数十年前からはもっぱら交通渋滞、すなわち自動車の流れが滞ることを指して使われる言葉になっている。
- ・近年 SNS などで見られるようになった用法として、「可愛いが渋滞している」のようなものがある。
- ・Web アンケートの結果、近年観察されるようになった用法も 3 分の 2 の人は「知っている。意味も分かる」と回答している。また、「知らないが、意味は分かる」という回答も含めると、意味の分かる人が 8 割を超える。

このように、「渋滞」という語に関して、近・現代の日本語では、〈何が〉「渋滞する」のかという点について変化が生じていると思われるが、その詳細を調査した先行研究は管見の範囲では見当たらない。そのため、そもそも毎日ことば plus(2025)が指摘するような変化が生じているのか、変化が生じているとするならばいつごろ、どのような変化が生じたのかなど、その実態は詳らかではない。そこで、本発表ではこの点について、用例をつぶさに観察することによって、実態の一端を明らかにする。具体的には、まず、2 節で各種国語辞典の記述を確認したうえで、3 節では「国立国会図書館全文テキストデータ」(国立国会図書館のデジタル化資料のうち、全文テキストデータが付与された資料のこと。以下「NDL 全文テキストデータ」と表記)を中心に、国立国語研究所が構築した各種コーパスも併用して、主に 20 世紀における実態を確認する。そして 4 節では、二つの新聞記事データベース(「朝日新聞」と「新潟日報」)、ならびに X を利用し、21 世紀における実態を確認する。最後に、5 節で調査結果を踏まえた議論を行う。

2. 各種国語辞典の語釈の確認

1 節で述べたとおり、〈何が〉「渋滞」するのかという点について、その変化や動態を扱った研究は管見の範囲では見当たらない。そこで、まず、3 節以降での用例調査に先立ち、各種国語辞典における「渋滞」の語釈を確認する。

『日本国語大辞典 第二版』(小学館・2000-2002 年)の「渋滞」の項には、以下の二つの語釈が掲載されている(用例の揭示は省略)。

- (1)①ものごとがすらすらとはかどらないこと。とどこおって進行しないこと。
- ②道路が混雑して、車両などがなかなか先へ進めないこと。

また、①の用例として 19 世紀後半のものが複数(日本語文献に限る)、②の用例としては 1973 年のもの(古井由吉「弟」)が挙げられている。これらの記述から、そもそも、日本語において「渋滞」という語が使用されるようになったのは(おおよそ)明治以降であること、また、(1)の②のように交通関係の事柄を描写する際に「渋滞」の使用が目立つようになったのは第二次世界大戦後であることが推察できる。

一方、『三省堂国語辞典』第 8 版(三省堂・2022 年)の「渋滞」の項には、以下の三つの語釈が掲載されている(「[文]」は「文章語」、「[俗]」は「俗語」の意)。

- (2)①自動車がつかえ(て進まなくな)ること。「交通一・一キロの一」
- ②[文]はかどらないでとどこおること。「事務が一する」
- ③[俗]受け止めきれないほどく多い/強いこと。「かわいさが一してる」

ただ、毎日ことば plus(2025)が指摘するように、『三省堂国語辞典』第 7 版(2014 年)では、以下の(3)のような語釈であり、意味・用法を分類して説明するのではなく、特に〈何が〉「渋滞する」のかという点は作例で示唆するにとどまる。

- (3)はかどらないでとどこおること。とどこおり。「事務が一する・交通一 [=自動車がつかえること]・一キロの一」

毎日ことば plus(2025)に着想を得、現代における「渋滞」の意味・用法を確認する手がかりとすべく、手元にある 2010 年以降に刊行された国語辞典 19 冊¹について「渋滞」の項を確認した。その結果、殆

¹ 確認した国語辞典は以下のとおり。『広辞苑』(岩波書店)第 7 版(2018 年)、『大辞林』(三省堂)第 4 版(2019 年)、『大辞泉』(小学館)第 2 版(2012 年)・『デジタル大辞泉』(2026 年 9 月 13 日参照)、『岩波国語辞典』(岩波書店)第 7 版新版(2011 年)・第 8 版(2019 年)、『旺文社国語辞典』(旺文社)第 11 版(2013 年)・第 12 版(2023 年)、『学研現代新国語辞典』(学研教育出版)改訂第 5 版(2012 年)・改訂第 6 版(2017 年)、『新明解国語辞典』(三省堂)第 7 版(2011 年)・第 8 版(2021 年)、『三省堂現代新国語辞典』(三省堂)第 4 版(2011 年)・第 5 版(2015 年)・第 6 版(2019 年)・第 7 版(2024 年)、『新選国語辞典』(小学館)第 9 版(2011 年)・第 10 版(2022 年)、『明鏡国語辞典』(大修館書店)第 3 版(2021 年)。

どの国語辞典が(3)『三省堂国語辞典』第7版のように意味・用法を分類して説明しておらず、(1)『日本国語大辞典 第二版』や(2)『三省堂国語辞典』第8版のように意味・用法を分類して説明している辞典は、調査対象とした19冊のうち、以下の2冊であった。つまり、(その性格上、当然ではあるが)国語辞典を調べても日本語では〈何が〉「渋滞する」のかという点は判然としない側面があるというわけである。

(4)『三省堂現代新国語辞典』(三省堂)第7版(2024年)：①ものごとがつかえて、すらすらと進まないこと。とどこおること。「交通―・事務の―・思考の―」②←(引用者註「...から来た」の意)交通渋滞。「事故―に捕つかまる・―を抜ける・―が解消する・大―」

(5)『大辞林』第4版(2019年)：①物事がなめらかにゆかず、とどこおること。「婆さんの声は...―することなく」(引用者註・長塚節「土」からの用例)②道路が込んで、車が進めないこと。「交通―」

3. 主に20世紀における実態

本節では主に20世紀の日本語において〈何が〉「渋滞する」のかを明らかにすべく、「NDL 全文テキストデータ」(その詳細は岡田(2024, 印刷中)も参照)を中心とした調査結果を報告する。まず、3.1で「NDL Ngram Viewer」と国立国語研究所が構築した各種コーパスを利用して「が渋滞」に前接する文字列を抽出、整理し、主に20世紀の日本語において〈何が〉「渋滞する」のかを示す。そのうえで、3.2では、3.1で見いだしたものについて、「国立国会図書館デジタルコレクション」で検索をし、使用実態の一端を計量的に示す。なお、本節の内容は、岡田(2026・印刷中)で提案した「NDL 全文テキストデータ」を利用した日本語研究の方法の有効性を検討する試みとしても位置付けられる。

3.1 〈何が〉「渋滞する」のか： 「NDL Ngram Viewer」と各種コーパスを併用した調査

〈何が〉「渋滞する」のかを調査するにあたって、まずは、「NDL Ngram Viewer」(<https://lab.ndl.go.jp/ngramviewer/>)を利用することにした。

「NDL Ngram Viewer」とは「NDL 全文テキストデータ」を検索するために NDL ラボ(<https://lab.ndl.go.jp/index.html>)によって開発されたツールである。「NDL Ngram Viewer」では「NDL 全文テキストデータ」のうち、図書・雑誌資料約230万点(図書は主に1960年代までに、雑誌は主に1990年代までに刊行されたもの)について、検索結果を出版年別に可視化することができるほか、簡単な正規表現を利用した検索も可能である。また、検索結果のデータはダウンロードできる。つまり、「NDL Ngram Viewer」は20世紀を中心とした日本語の動態の一端を捉えるツールとして活用できるわけである。

今回は、「NDL Ngram Viewer」で正規表現「+が渋滞」(「が渋滞」の前に任意の一文字以上が存在する場合)を検索し、その結果をダウンロードした。そのデータについて、目視で確認、整理を行った結果、74表現を見いだした²。ただ、岡田(2026)で指摘したように、「NDL Ngram Viewer」で正規表現を利用した検索結果には「漏れ」(「NDL 全文テキストデータ」内には存在しているにもかかわらず、ヒットしない用例)が生じる。そこで、あわせて、国立国語研究所が構築した各種コーパスで検索を行い³、「NDL Ngram Viewer」による検索では見いだせなかった12表現を追加した(以下の一覧で下線を引いたもの)。

以上のような手順で見いだした86表現について、2節で確認した各種国語辞典での語釈も参照しつつ、以下のAからDのように分類した⁴。その結果を以下に列記する(列記した各表現の直後にカッコ内で記した数字については後述する)。なお、今回の調査で主に利用した「NDL Ngram Viewer」は単純な文字列検索しかできないため、以下の例は複合語の一部として使用されている場合があることに留意されたい(例えば、「車」には「自動車」「救急車」「電車」などが、「道路」には「高速道路」や「幹線道路」などが、「道」には「街道」や「国道」などが、「筆」には「運筆」などが、それぞれ含まれるということである)。また、列記した各表現の直後にカッコ内で記した数字は、「国立国会図書館デジタルコレクション」(以下、「デジコレ」と表記)での検索結果件数である。

以下の分類には判断に迷う場合も少なからず存在したため、この分類の妥当性についても検討の余地はあるが、20世紀の日本語においては分類A系統＝交通関係と分類B＝作業・活動関係の双方が「渋滞する」と表現されていること、交通関係では特定の表現(「車」「道路」「交通」)が「渋滞する」と表現さ

² 文字列検索の結果であるため「語」ではないことに注意。なお、異なる表記であっても同一語・表現と判断できるものは一覧上では「支払/支払い」のように併記するとともに1表現としてカウントしている。

³ 検索にはコーパス検索アプリケーション『中納言』(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>)を利用した。検索条件は【キー＝条件を指定しない＋後方共起1＝キーから1語・語彙素「が」・品詞の大分類「助詞」＋後方共起2＝語彙素「渋滞」】。その結果、『現代日本語書き言葉均衡コーパス第1部』(前川[監修]2014)から28語、『昭和・平成書き言葉コーパス』(小木曾ほか[編]2024)から9語、『現代日本語書き言葉均衡コーパス第2部』(<https://www2.ninjal.ac.jp/BCCWJ2/>)と『日本語話し言葉コーパス』(国立国語研究所2006)から各3語、『日本語日常会話コーパス』(小磯ほか2023)と『名大会話コーパス』(藤村ほか2011)から各1語の用例を得た(語数はいずれも異なり語数である)。

⁴ 杉浦(2022)などが指摘するように、「渋滞する」は、移動体を表す名詞だけでなく、場所格交替によって渋滞の発生場所を表す名詞がガ格に現れる場合もある。さらに、「交通」「運行」のように交通現象や活動を包括的に表す要素も認められた。そこで、AをA1からA4の四つに下位分類した。

れることが多いのに対し、作業・活動関係は「事務」を中心として交通関係に比べて相対的に様々な表現が「渋滞する」と結びつきやすい傾向が読み取れる。

- ・A1 交通関係・無情物 4 表現： 車(4095)・車両(168)・バス(91)・トラック(55)
- ・A2 交通関係・有情物 2 表現： 人(51)・ドライバー(2)
- ・A3 交通関係・場所 18 表現： 道路(3524)・道(882)・車線(215)・号線(113)・高速(83)・通り(82)・前方(80)・前(59)・交差点(56)・どこ(48)・付近(47)・区間(27)・周辺(26)・ライン(12)・上り(9)・下り(5)・アウトバーン(5)・街中(2)
- ・A4 交通関係・包括的表現 2 表現： 交通(3391)・運行(57)
- ・B 作業・活動関係 48 表現： 事務(1862)・仕事(461)・筆(424)・処理(353)・作業(287)・支払(127)・支払い(119) (計 246)・業務(200)・業務など(28) (計 228)・活動(180)・輸送(174)・政務(162)・審議(143)・生産(132)・手続(103)・手続き(25) (計 128)・人事(126)・言語(125)・交渉(113)・事件(107)・取引(107)・流通(107)・回収(97)・行政(96)・工事(93)・話(86)・運営(85)・機能(81)・国政(81)・事業(81)・物事(77)・議事(67)・作用(53)・供給(48)・整理(48)・金融(43)・審査(40)・出荷(36)・発展(35)・発育(30)・動作(29)・決済(27)・審理(27)・運搬(21)・融通(21)・増加(15)・装置(14)・治療(10)・行為(5)・想念(4)・支給(3)
- ・C A か B のいずれかに分類されるが個々の文脈による判定を必要とするもの 3 表現： 流れ(562)・進行(249)・列(128)
- ・D A と B のいずれにも分類しがたいもの 9 表現： 血液(116)・血行(70)・運び(54)・全体(50)・時間(29)・部分(17)・自体(16)・情報(10)・量(10)

上述のとおり、列記した各表現の直後にカッコ内で記した数字は、「デジコレ」での検索結果件数である。ここでは簡単に、「デジコレ」での検索結果件数を付記した意図と検索方法を説明しておく。

岡田(2024, 印刷中)でも触れているとおり、「デジコレ」は「NDL 全文テキストデータ」の検索ができるプラットフォームの一つである。先に使用した「NDL Ngram Viewer」とは異なり単純な文字列検索しかできないが、検索できるデータ量が圧倒的に多く、資料の種類も豊富である(2026年7月末時点で、図書約248万点、雑誌約141万点、博士論文18万点、官報約2万点などが検索可能)。「デジコレ」の検索結果は同一資料内に検索語が複数使用されていても1件としかカウントされないなど、検索結果件数を用例数と見なすことはできないが、それでもおおよその使用傾向を数値として把握できると考え、参考までに各表現を「デジコレ」で検索した結果件数を付記した次第である(検索日は2026年9月12日)。

なお、上述のとおり、「デジコレ」は単純な文字列検索しかできない。したがって、「各表現+が渋滞」という形で検索すると、「トラックが渋滞中の車の列に衝突した」といった「ノイズ」の例も多数ヒットしてしまう可能性がある。しかし、岡田(2024, 印刷中)でも触れているとおり、「デジコレ」の検索結果は膨大であり、検索結果を一つ一つ確認して「ノイズ」を取り除くことは現実的には不可能である。そこで、可能な範囲で「ノイズ」が含まれないようにするため、今回は「デジコレ」の OR 検索を活用し、「各表現+が渋滞し/す/せ」という文字列で検索することにした⁵。また、今回は「車が渋滞状態/渋滞気味/渋滞中」という「渋滞する」状態を描写した表現も用例に含めるべく、先に述べた条件に加え「各表現+が渋滞状態/中/気味」といった文字列も検索している。なお、検索対象資料については特に指定しなかった(「デジコレ」で全文検索が可能な全資料を調査対象とした)。

3.2 「国立国会図書館デジタルコレクション」を利用して経年変化をとらえる試み

3.1 では「NDL Ngram Viewer」と各種コーパスを利用して日本語では「何が」「渋滞する」と表現されるのかを整理したが、1節で引用した毎日ことば plus(2025)の2番目の指摘を踏まえると、3.1の分類Bとしてまとめた表現の割合が低下する一方、分類Aとしてまとめた表現の割合が増加することが予想される。そこで、3.1で見いだした諸表現を「デジコレ」で検索し、検索結果件数を10年ごと・分類ごとに集計したうえで、各期間における構成比(各年代の検索結果総件数に占める各分類の検索結果件数の割合)を求めグラフ化した結果が、以下の図1である。なお、10年刻みの検索結果は「デジコレ」のファセット項目を利用して集約した(「デジコレ」の検索結果画面に表示されるファセット項目の詳細については岡田(印刷中)を参照)。また、棒グラフの上部に付記している数値は当該分類の検索結果件数である。

特に1900年代以前、そして2020年代は合計件数が100件以下であるため、構成比を論じる場合には扱いに注意を要するが、図1からはおおよそ、1960年代から分類A系統＝交通関係用法の検索結果が急激に増え始め、2000年代の検索結果に占める交通関係の割合が90%を超える。これは、自動車の普及の様相(石川 2008 や総務省統計局[監修]2006などを参照)と軌を一にする。つまり、自動車の普及という社会的な事象が「渋滞する」の用法の使用実態に関与した可能性が考えられるわけである。一方で、1990年代以降でも分類B＝作業・活動関係用法の検索結果も一定数存在しており、毎日ことば plus

⁵ それでも、「トラックが渋滞している車の列に衝突した」といった「ノイズ」の例は除去できない点は付記しておく。

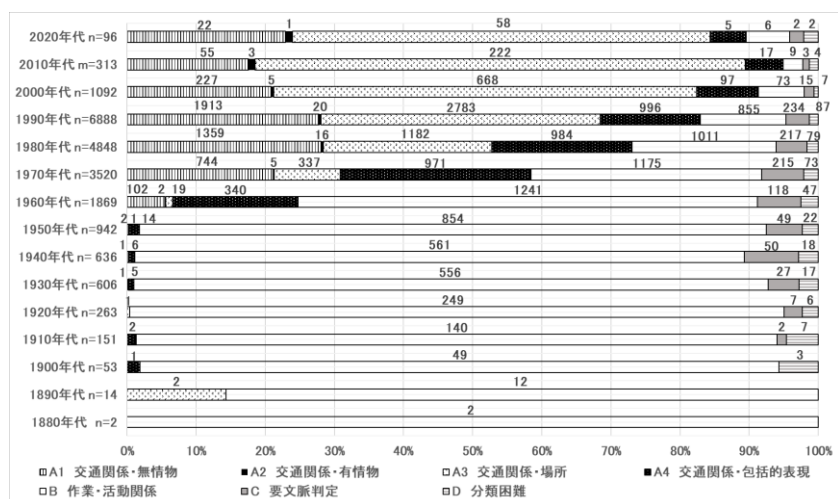


図1 〈何が〉「渋滞する」のか・「国立国会図書館デジタルコレクション」における分類別・期間別検索結果件数の構成比

料は主に 20 世紀に産出された日本語に偏っていた。したがって、毎日ことば plus(2025)が指摘するような近年の動向については判然としない。そこで、21 世紀における動向の一端を明らかにすべく、4.1 では新聞記事データベースを、4.2 ではX(旧 Twitter)を、それぞれ調査した結果を報告する。

考察対象となる表現は前節で扱った「各表現＋が渋滞する」の各活用形と「各表現＋が渋滞状態/中/気味」に加え、「が渋滞。」という「体言止め」の用法も含めた⁶。「体言止め」用法を含めたのは、当該用法が新聞記事データベースとXの双方に一定数看取されたためである。なお、新聞記事データベースもXも文字列検索しかできないため、用例採取の第一段階として「が渋滞」を文字列検索し、その結果を目視で確認し、考察対象となる表現を逐次抽出した。

4.1 新聞記事データベースを利用した調査結果

発表者の所属機関の附属図書館が契約している新聞記事データベースの中から、全国紙として「朝日新聞クロスサーチ」⁷(以下、「朝日新聞」と表記)については 2001 年 1 月 1 日から 2026 年 8 月 31 日までを、地方紙として「新潟日報記事データベース」(以下、「新潟日報」と表記)についてはデータベースに記事が反映されている 2002 年 4 月 1 日から 2026 年 8 月 31 日までの記事について検索を行った。検索結果は目視で確認し、分析対象とする表現を抽出した。その結果、「朝日新聞」から 787 例、「新潟日報」から 104 例、合計 891 例の用例を得ることができた。

得られた用例を 3.1 で示した分類に振り分けたところ、分類 A 系統＝交通関係に該当するものは 847 例で全体の 95.1%，分類 B＝作業・活動関係に該当するものは 7 例で全体の 0.8%，分類 D＝分類困難に該当するものは 37 例で全体の 4.2%であった(ここでの調査は全用例を目視で文脈を確認して分類したため、分類 C＝文脈判定を要するものは存在しない)。つまり、今回調査をした 21 世紀の新聞記事(および一部の雑誌記事)では、「渋滞する」のは交通関係の事象が殆ど(作業・活動関係を描写する用法の使用は僅少)であると言える。

ただ、注意を要するのは、交通関係を描写する場合であっても、毎日ことば plus(2025)の指摘、「もっぱら交通渋滞、すなわち自動車の流れが滞ることを指して使われる言葉」として使用されているわけではないということである。すなわち、今回の調査からは、少数であるが、以下の(6)から(8)(すべて「朝日新聞」からの用例)の下線部のように、自動車以外にも人や物の移動の流れが滞る状況を描写する用例も確認できる(今回はこれらの用例を便宜的に分類 A としたが、この判断自体、妥当性を検討する必要があるのかもしれない)。

(6)(前略)人が渋滞しそうな所にポスターをはれば宣伝効果が上がる(後略)・2007 年 10 月 8 日(朝刊)2 面

(7)「東海道と、大坂とを結ぶ京街道が合流し、日本一、旅人らが渋滞する場所だったんです」・2017 年 7 月 8 日(朝刊)滋賀全県版 26 面

(8)ただ、1 台しかないエレベーターの前ではベッドが渋滞し、グループホームから避難してきた車いすの入所者も待たされる課題も見えた。・2021 年 6 月 19 日(朝刊)大分全県版 25 面

また、21 世紀の新聞記事においては作業・活動関係の用法より使用が多かった分類 D＝分類困難

(2025)の指摘、すなわち「数十年前からはもっぱら交通渋滞、すなわち自動車の流れが滞ることを指して使われる言葉になって」(傍点引用者)いと見なしでもよいか、検討の余地があると考える。

4. 21 世紀における実態

日本語では〈何が〉渋滞するののかという問題について、前節での調査で利用した各種言語資

⁶ 3 節で触れた「デジコレ」での調査において「体言止め」の用法を対象としなかったのは、「デジコレ」では句点を含めた検索ができないことに加え、3.1 で説明したとおり、膨大な「デジコレ」での検索結果を目視で確認することが叶わなかったという事情による。

⁷ 検索結果には、「朝日新聞」に加え週刊誌である『AERA』と『週刊朝日』に掲載された記事も含まれる。

に該当するもの 37 例の中には、「回線」(8 例)、「通信/通信網」(5 例)、「ネットワーク」(3 例)と、情報技術に関する用例が一定数、看取された。その一方で、(9)の下線部のような将棋関係の記事での使用が 3 例認められたほか、(10)の下線部のように物体が密集している様を描写する場合など、多岐にわたる事象について「が渋滞する」が使用されていることを示唆する用例(すべて「朝日新聞」からの用例)が得られた。

(9)先手銀得の分かれだが、2 枚の大駒が渋滞していてこれまではむしろ後手持ちの見方が多かった。・2012 年 10 月 10 日(朝刊)6 面

(10)この地を訪ねた外国人が「ロッキーヒル」と呼んだ山は、巨岩が多い。頂上近くは軽自動車くらいの岩が渋滞している。・2021 年 1 月 13 日(朝刊)福岡全県 24 面

そして、4.2 で見るような X(旧 Twitter)で非常に多く見られる「新しい」用法も、以下の(11)から(13)のように 21 世紀の「朝日新聞」上に認められる。

(11)「うますぎて売れない」「才能が渋滞している」などとも評された。・2015 年 7 月 25 日(朝刊)11 面

(12)AG 世代がいちばん話したいこと 43 歳で若年性認知症と診断「頭の中が渋滞する感じ」・2022 年 5 月 26 日(夕刊)7 面

(13)少し余裕ができ病棟内を見回した時、色んな我慢や無理が渋滞しているのではと思った。病と闘っているのは子どもだが、支える大人も闘っている。・2022 年 12 月 4 日(朝刊)10 面

4.2 X(旧 Twitter)を利用した調査結果

「近年 SNS などで見られるようになった用法」(毎日ことば plus 2025)の実態を確認すべく、X(旧 Twitter, 以下「X」と表記)を対象とした調査を行った。検索期間は 2006 年から 2014 年までは各年の通年(12 か月間)、2015 年 12 月の 1 か月間、そして 2026 年 6 月下旬の 15 日間(16 日～30 日)である。検索期間が異なるのは、後述するように 2015 年以降、検索結果数が膨大となり、すべてを目視で確認することが困難になったためである。それゆえ、ここでは計量的な観点に関する議論は踏み込まないことにする。

検索結果を目視で確認したところ、2006 年から 2009 年までの 4 年間で計 9 例、2010 年で 48 例、2011 年で 61 例、2012 年で 55 例、2013 年で 58 例、2014 年で 422 例、2015 年 12 月で 907 例、2026 年 6 月下旬で 1781 例の分析対象とする表現を抽出できた。

得られた用例の用法を確認した結果、X では 3.1 で示した分類では整理しきれない、実に様々な事象が「渋滞する」と表現されていることが判明した。そのため、X での用例については、3.1 で示した分類に加え、以下に示すようなカテゴリを追加して分類を行った。なお、短文で投稿されることが殆どであり、また文脈も確認しにくいという X の性質上、用例を目視で確認しても分類することが困難であった表現が存在していることも付記しておく(3.1 の分類 D は目視で確認すれば分類できるものであり、それとは性格を異にする)。

- ・E1 (交通に関係なく)密集している有情物・無情物・概念を表現: 客・中年女性・坊主・推し・コスモス・ボム・チェック(チェック柄のこと)・撮らなければいけない時計たち・雲・お皿(回転寿司のお皿のこと)・記念日 など
- ・E2 (交通に関係なく)有情物(もしくは有情物に相当するもの)が密集している場所の表現: 自動改札の前・目黒駅改札・トイレ・歩道・登山道・廊下・エスカレーター・家・台所・階段・玄関・ソファ・アーケード・レジ・レジ待ち・チケット売り場・ケーキ屋さん・南部公民館・流れるプール・楽屋口・霊園・(「お渡し会」の)2 部・生産の列の方・自分の背後・三途の川・回転寿司のライン・義くんと YOMA さんの立ち位置・かなえ先生ゾーン など
- ・F 感情・評価・属性関係: 感情・情念・やる気・アイデア・可愛さ/可愛い・格好いい・嬉しさ・幸せ・サプライズ・好き・甘さ・欲しい・疑問・余韻・わからん・乃木充・あたまガンガン街道・才能・属性・キャラ/キャラクター・沈潜人格・個性・設定・ボケ・萌え・わちゃわちゃ・やんちゃ・ギャップ萌え・おしゃれ・映え・味・描きたい など
- ・G 身体の一部: 体内の色々・心・頭/頭の中・脳みそ・舌・耳・食道・お腹/お腹の中・腸・膝の上 など
- ・H 人などの配置関係: 前(高齢世代のこと)・二遊間の選手(野球ゲームにおける選手の配置のこと)・先発投手(野球選手のこと)・MF(サッカーのミッドフィルダーのこと)・3 歳馬(競走馬に関する話題の中での使用) など
- ・I 情報・通信関係: 情報・写真・トレンド・ネット・ツイート・ツイッター公式・X の検索機能・タイムライン・DM 欄(ダイレクトメッセージ欄のこと)・リブ欄・通知・回線・サーバーのトラフィック・社内 NW(社内ネットワークのこと) など

ただし、分類 B=作業・活動関係にも、3.1 で示した表現以外のものが散見される。具体的には、「コラボ」「ディスリ」「課題」「店への提案」「絵」といった作業・活動内容を包括的に表現するもののほか、「銀の匙ともう 1 冊」「創作とポケナイ(「ポケットナイツ」というゲームだと思われる)」「(絵の)線」「復習レシピ」「ドリップ用の浅煎り豆」といった作業・活動に関する事物をより具体的に描写する表現が認められる。さらに、「思考」「思考の回路」「心の環状線」といった人間の内面活動に関する表現に加え、「乃木充」⁸「頑張ってますアピール」「描きたい物」「育成したいポケモン」「書くべき本」のように作業・活動に感情表現を付与し

⁸ 「乃木坂用語集」(<https://www.nogizaka.info/glossary.html>)によると、「乃木充」とは「1.メンバーが乃木坂の活動で充実しているとき 2.ファンが乃木坂のイベントやテレビ・ラジオなどで乃木坂に触れる機会が充実しているとき」などを描写する際に使用される表現のようであるが、発表者が採取した用例では 2 の意味で「乃木充が渋滞」と表現していた。

た表現が散見されることは注目される。特に「動詞＋たい名詞」という表現は多数看取され、少なくともXでは多用されているようである。これらの表現は分類 F との連続性を有するものと考えられ、分類 F の使用に触発されて生まれた用法だとも考えられる(上記分類 F に示したように、「描きたい」のような「動詞＋たい」が連体修飾の形ではなく単独で用いられる用法が存在することにも留意されたい)。また、**分類 D＝いずれにも分類しがたいもの**として、「人生」「人間関係」「ネタ」「寿司」のように 20 世紀には看取されなかった表現も認められる。

いずれにせよ、Xにおいては分類 E1・E2・F・G のように個人の生活や関心に密接に関わる表現が少なからず存在する。これは、「趣味など、自身が好きなものについて」や「日常の出来事、感情など」が多く投稿される(アスマーク編集局 2022⁹)Xという言語資料の性格を反映した結果とも考えられ、興味深い。

今回の調査結果からは、毎日ことば plus(2025)でいう「近年 SNS などで見られるようになった用法」、すなわち(2)の③で示した『三省堂国語辞典』第 8 版の語釈「受け止めきれないほど(多い/強い)こと。」について、〈何が〉という点は非常に多岐にわたり、精緻な整理をする必要があろう。また、Xにおいても時期によって用法に変遷が認められる。ただし、これらの点については詳述する余裕がない。ここでは、X、特に 2010 年代中頃(2014～2015 年頃)以降は、既に指摘されているような事象以外にも、実に多様な事象が「渋滞する」ものとして表現される事実を強調しておく。その他詳細は、別の機会に報告したい。

5. おわりに

本発表では、種々の言語資料を利用して、主に 20 世紀以降の日本語では〈何が〉「渋滞する」と表現されてきたのか、その諸相を素描した。その詳細はここでは繰り返さないが、今回の調査を通じて見えてきたことは、(i)「渋滞する」がその基本義、すなわち「何らかの流れが滞ること」を保ちつつ、〈何が〉についてはその時代時代に応じて適用範囲が柔軟に変化してきたのではないかと、(ii)特に 21 世紀の SNS では「流れの滞り」という事象から連想される〈密集・過剰〉という側面が前景化したのではないかと、という 2 点である。このように考えるならば、自動車の普及に呼応する形で、一時は交通関係の用法が圧倒的に優勢になったものの、21 世紀、特に SNS においては個人の関心に依拠して多様な事象が「渋滞する」ものとして表現されるようになったと解釈できよう。毎日ことば plus(2025)は、Web アンケートの調査結果に基づき、「近年 SNS などで見られるようになった用法ですが、意外に広く浸透している」「従来の使い方の転用として、意外になじみやすい用法なのかもしれ」ないと指摘しているが、その背景には基本義を保ち、それぞれの用法との間に連続性を認めることができるという点があるのではないかと考える。

なお、今回の調査は探索的なものであり、繰り返しになるが、特に用法について設定した分類が妥当なのか、検討の余地がある。また、そもそも〈何が〉が記されていない場合については方法論上の制約もあり、今回の調査では考慮に入れることができなかった。これらの点については、今後の課題としたい。

参考文献 (副題は省略) ●アスマーク編集局(2022)「Twitter の使い方に関する調査」<https://www.asmarq.co.jp/data/ex202201twitter/>(2026 年 9 月 17 日最終閲覧) ●石川和男(2008)「わが国のモータリゼーション発展期における自動車産業の環境と自動車メーカーによるマーケティング対応」『専修商学論集』88 ●岡田祥平(2024)「『国立国会図書館デジタルテキストデータ』を利用した日本語研究の可能性と限界」『日本語学会 2024 年度春季大会予稿集』 ●岡田祥平(2026)「言語変種を表す複合語「～訛(り)」の諸相」言語資源ワークショップ 2026 発表原稿 ●岡田祥平(印刷中)「『国立国会図書館全文テキストデータ』を利用した近・現代日本語研究とはじめ」『新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』19(1) ●小木曾智信・近藤明日子・高橋雄太・間瀬洋子[編](2024)『昭和・平成書き言葉コーパス』の設計・構築・公開『情報処理学会論文誌』65(2) ●小磯花絵・天谷晴香・居間友里子・白田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香(2023)「『日本語日常会話コーパス』設計と構築」『国立国語研究所論集』24 ●国立国語研究所(2006)『日本語話し言葉コーパスの構築法』国立国語研究所 ●杉浦滋子(2022)「場所の表現に関する日英対照研究」『麗澤大学紀要』105 ●総務省統計局[監修](2006)『新版 日本長期統計総覧 第 3 巻』日本統計協会 ●藤村逸子・大曾美恵子・大島ディヴィッド義和(2011)「会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究」藤村逸子・滝沢直宏[編]『言語研究の技法』ひつじ書房 ●前川喜久雄[監修]・山崎誠[編](2014)『講座日本語コーパス 2 書き言葉コーパス』朝倉書店 ●毎日ことば plus(2025)「意外に通じる? 可愛い「渋滞」」<https://salon.mainichi-kotoba.jp/archives/276099>(2026 年 9 月 17 日最終閲覧)

利用データ ●国立国語研究所(2026)『現代日本語書き言葉均衡コーパス第 1 部』(中納言バージョン 2.7.3, データバージョン形態論情報 2021.03, 分類語彙表情報 2025.03) <https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/>(2026 年 9 月 12 日確認) ●国立国語研究所(2026)『現代日本語書き言葉均衡コーパス第 2 部』(バージョン 2026.03, 中納言バージョン 2.7.3) <https://www2.ninjal.ac.jp/BCCWJ2/>(2026 年 9 月 12 日確認) ●国立国語研究所(2018)『日本語話し言葉コーパス』(中納言バージョン 2.7.2, バージョン 2018.01) <https://clrd.ninjal.ac.jp/csj/>(2026 年 9 月 12 日確認) ●国立国語研究所(2023)『日本語日常会話コーパス』(中納言バージョン 2.7.2, バージョン 2023.03) <https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc.html>(2026 年 9 月 12 日確認) ●国立国語研究所(2022)『名大会話コーパス』(中納言バージョン 2.7.2, バージョン 2022.10) <https://mmsrv.ninjal.ac.jp/nucc/>(2026 年 9 月 12 日確認) ●小木曾智信・近藤明日子・高橋雄太・田中牧郎・間瀬洋子[編](2023)『昭和・平成書き言葉コーパス』(中納言バージョン 2.7.2, バージョン 2023.5) <https://clrd.ninjal.ac.jp/SHC/>(2026 年 9 月 12 日確認)

謝辞 本発表は JSPS 科研費 JP25K04063, JP25K04144 の助成を受けたものである。

⁹ アスマーク編集局(2022)は、週 1 回以上 Twitter にログインし、Twitter を主に「文章の投稿」のために使っている全国の男女 20～49 歳を対象に実施された調査の結果を報告している。

接頭辞「没-」の意味特性に関する一考察
—「存在性の否定」を中心に—

チャン クオック ヒエップ
TRAN QUOC HIEP

(大阪大学日本語日本文化教育センター 非常勤講師)

1. 研究の背景と本発表の目的

『新明解国語辞典』(2020: 1448)の「没(ボツ)」の項目を見ると、①「死んだ」の意(例: 大正五年没／没後／没年)、②「没書」(例: 没にする)などの記述のほか、「字音語の造語成分」として、次のように記載されている。

- (1) ①沈んで見えなくなる。沈めてなくする。「没入・沈没・陥没・埋没」
②なくす。なくなる。「没我・死没」
③……がない。「没交渉・没趣味」

(『新明解国語辞典 第八版』2020: 1449)

他の国語辞典にも類似した記述が見られるが、特に上記の③の意味については、「接頭」あるいは「接頭辞」として明記されている。例えば、『大辞林 第四版』では、「名詞について、それが無い意を表す」と説明され、「没常識」「没個性」「没価値性」などが例として挙げられている。本発表では、この「没-」を接頭辞として捉え、現代日本語におけるその実情を明らかにすることを目的とする。特に、同じく「存在性の否定」を表す代表的な否定接頭辞である「無-」と比較し、「没-」の意味特性を明らかにする。

2. 先行研究の概要と本発表の方向

まず、接頭辞の定義について、本発表では、影山(1993)の形態論的な立場に従い、接頭辞を「語基の前に付加され、一定の意味的・文法的機能を加えて新たな語を形成する形態素」と捉える。この定義に基づけば、「没交渉」「没趣味」における「没-」は、語基に「～がない」という否定的な意味を付加しているため、接頭辞として扱うことができる。

次に、「存在性の否定」に関して、相原(1986)は、「不-」「無-」「非-」「未-」と結合する語基の性質から、否定の意味を「概念性の否定」「存在性の否定」「行為性の否定」「事態性の否定」「価値性の否定」の五つに分類している。そのうち「存在性の否定」は、「無職」「無趣味」「無表情」などのように、語基が表す事物や状態が存在しないことを表す。相原(1986: 68)によれば、「無-」の主要な意味がこの「存在性の否定」である。「没-」にも「～がない」という意味が認められることから、「没-」と「無-」には意味的な共通性、いわゆる「存在性の否定」があると考えられる。

また、久保(2017)は、否定接辞を「明示的な否定意を示す接辞」「状態変化によって否定意を示す接辞」「認識の対比によって否定意を示す接辞」の三つに分類し、その分析に「動的特性」と「価値特性」という二つの指標を用いている。動的特性とは、ある語が表す状態が、時間的な推移によって別の状態へと変化する性質を指す。一方、価値特性とは、ある語が表す内容が肯定的または否定的な価値判断と関わる場合に、その語と価値判断との関係を示すものである。久保(2017: 53)によれば、「無-」は明示的に否定を示す接辞であり、基本的には動的特性も価値特性も持たないとされる。

さらに、張（2018）は、字音接辞を品詞的な基準から分類し、意味的・文法的性質に基づいてその特徴を捉えている。この分類によれば、「没-」は字音接頭辞の「動詞型」に位置づけられる。「動詞型」は、動詞性を持つ接頭辞と名詞性の語基との間に、意味的な格関係が認められることを特徴とする（張 2018: 62）。一方、「無-」は「助動詞型」に分類され、接頭辞が助動詞に近い機能を持つとされる（張 2018: 63）。このように、いわゆる「存在性の否定」を示す「没-」と「無-」の間には、明確な相違点が存在する。

以上の先行研究を踏まえ、「没-」は日本語の接頭辞として認められているものの、その意味特性については十分に検討されていない。そこで、本発表では、次の三つの課題を設定した。①「没-」はどのように形成されたのか。②「没-」の「存在性の否定」は「無-」と同じなのか。③「没-」と「無-」はどのように区別できるのか。これらの課題を明らかにするため、三つの側面から考察する。第一に、国語辞典とコーパスから「没-」の使用実態を調査する。第二に、収集した語の語構成と意味を分析し、「没-」の「存在性の否定」の特徴を明らかにする。第三に、久保（2017）の「動的特性」と「価値特性」を用いて、「無-」との違いを検討する。

3. 調査とその結果

調査は二つの方法で行った。第一に、国語辞典を対象に「没」を接頭辞とする語を目視で収集し、表1の「辞典」に示した。第二に、現代日本語書き言葉均衡コーパス 第1部と第2部（以下、それぞれ「BCCWJ1」「BCCWJ2」と呼ぶ）を対象に、「没」を接頭辞とする語の使用実態を調査した。長単位検索で「書字形出現形」に「没」、追加条件で「品詞大分類」に「接頭辞」を指定し、語種別に検索した。抽出語を目視で精査し、その結果を表1の「コーパス」に示した。

表1 日本語における「没-」を接頭辞とする語

	辞典／コーパス	語数	語
載 載	『新明解国語辞典』	6	没交渉、没個性、没主体（的）、没趣味、没常識、没論理
	『大辞泉』	6	没交渉、没趣味、没常識、没風流、没分曉、没理想
	『大辞林』	8	没意義、没価値（性）、没交渉、没趣味、没常識、没風流、没分曉、没理想（論争）
	『日本国語大辞典』	14	没意義（1920年初出）、没交渉（1901年）、没個性（1918-21年）、没自我（1908年）、没趣味（1897年）、没常識（1917年）、没人道（1898年）、没道義（1908年）、没人情（1908年）、没表情（1923年）、没風流（1911年）、没分曉（1894年）、没理想（1891年）、没論理（1909年）
コ ー パ ス	BCCWJ1	19	没個性（28回）、没交渉（22回）、没理想（5回）、没価値（5回）、没歴史（3回）、没関心（2回）、没思想（2回）、没主観（2回）、没論理（2回）、没観点（1回）、没個人（1回）、没世間（1回）、没写真（1回）、没主体（1回）、没趣味（1回）、没人格（1回）、没理性（1回）、没マルキスト（1回）、没場所（1回）
	BCCWJ2	5	没個性（6回）、没交渉（4回）、没人格（1回）、没批判（1回）、没論理（1回）

辞典調査の結果、「没-」を接頭辞とする語は辞典によって掲載語に差があるものの、6～14語と少なく、現代日本語における生産性は低いことが分かった。『日本国語大辞典第二版』の初出を見れば、1891年の「没理想」をはじめ、1890年代から1910年代にかけて次々と現れ、明治後期から大正期にかけて特に多く使われるようになったといえる。結合相手は主に二字漢語であり、「没価値性」「没個人的」のように、「性」「的」などとさらに

結合する例も確認された。一方、コーパス調査では、二字漢語だけでなく、「没マルキスト」「没場所性」のように外来語・混種語と結合する例も見られる。また、コーパスでは「没主体的」「没人格的」「没価値的」など、「的」を伴う形式も複数確認された。これらは文中で状態や性質を表す表現として用いられており、「没-」の語が述語や連体修飾などに用いられることが分かる。出現頻度には語によって大きな差が見られる。BCCWJ1 と BCCWJ2 の両方において、比較的高い頻度で現れる語として「没個性」「没交渉」が挙げられる。また、BCCWJ1 では「没理想」「没価値」なども一定数の用例が確認され、「没-」を含む語が実際の書き言葉の中で使用されていることが分かる。BCCWJ2 では、BCCWJ1 と類似した語が見られるほか、「没批判」という新しい語も見られる。

4. 「没-」ではじまる語の語構成とその意味

まず、辞典の記述と定義を確認した結果、「没-」は単純に「～がない」だけでなく、「～が感じられない」「～が見られない」「～を欠いている」などによって説明されていることが分かった。以下では、便宜上、「没-」ではじまる語を「没 X」と表記する。

- | | |
|---|---|
| (2) <u>没交渉</u> ：かかわるところが <u>無い</u> こと。 | <u>没常識</u> ：常識を <u>欠いている</u> 様子だ。 |
| <u>没個性</u> ：その人（物）に取り立てて言う特徴も <u>なく</u> 、他と違った魅力が何ら <u>感じられない</u> こと。 | <u>没論理</u> ：物の考え方や文章・議論の展開などに理論的な整合性（を重んじようとする態度）が全く <u>見られない</u> こと。 |
| <u>没主体的</u> ：主体性を全く <u>欠いている</u> 様子だ。 | |
| <u>没趣味</u> ：趣味の <u>（感じられ）ない</u> 様子だ。 | 『新明解国語辞典 第八版』2020: 1448-1450 |

これらの記述から、(2) の「没個性」「没常識」「没論理」などでは、対象に本来備わっていること、あるいは現れることが期待される「個性」「常識」「論理」などが十分に認められないことが分かる。つまり、「没 X」は、X が表す事柄が本来期待される程度に備わっていない状態、すなわち X の欠如を表すと考えられる。では、なぜ「没-」がこのような意味を表すのであろうか。「没」ではじまる二字漢語を分析すると、①死ぬ（没年）、②沈む／沈める（没入）、③物事に打ち込む（没頭）、④取り上げる（没収）、⑤「なくなる、なくする」（没我）といった主要な意味があるとされる。なかでも、接頭辞「没-」の意味を考えるうえで注目されるのが、「なくす、なくなる」という意味であろう。なぜなら、「なくす・なくなる」という消失の意味から、あるべき X が失われた状態としての「欠如」へと意味的に連関し、さらに「X がない」という意味につながると考えられるからである。

次に、「没-」が結合する語基に注目すると、それらが心的世界の概念を表す語が多く見られる。特に、「常識」「理想」「論理」といった望ましい性質を表す語基が目立つ。「没-」がこれらの語基に付加されると、その性質や特徴の欠如が示され、その結果として語全体が否定的な評価を伴う場合がある。また、(3) に挙げた語では、語基自体は必ずしも望ましい性質を表さないが、語義全体として否定的な評価を示すことも確認できる。

- (3) a. 一見したところ、軍人特有の没主観に回帰しており、これが地の文体なのだといえないこともない。(BCCWJ1, LBp9_00058)
- b. 夫の父とは、結婚に反対されて以来、没交渉だったし、実家の父も同様だった。(BCCWJ1, PB39_00020)
- c. 護憲論の多くは、没歴史的で方法論に無頓着である。(BCCWJ1, PM41_00536)
- d. 現在使われている歴史教科書はとも「没価値的な事実記述が中心になっている」と言える代物ではない。(BCCWJ1, LBs3_00046)

- e. なぜならば、自己意識から生まれる強い関心の支配するところでは、没批判的な党派性に対する安全を保証し得るのは、学的精神だけだからである。(BCCWJ1, PB091_04156)
- f. 従来、日本の経営の中心的機能をはたしてきた集団主義的思考、あるいは、没人格的な忠誠心は、現代の若年労働者には、次第に失われつつあるとする指摘が、経営社会学や産業社会学のサイドから、しばしば行われてきた。(BCCWJ1, PB43_00163)
- g. 高層ビルやコンベンション・センターの建設が「世界都市」の象徴として行われ、どの都市も没場所性 (placelessness) を帯びるようになった。(BCCWJ2, PB23_00418)

この点からみると、「没-」が結合する語基が表す性質や能力などは、語基本来の意味のあり方にかかわらず、いずれも「望ましい」状態であることが前提とされているとわかる。

一方、BCCWJ1 の用例をさらに検討すると、次のような例も確認された。

- (4) ジュランビルはいつも花のアップばかりで全体の写真アップしてませんね・・・没写真ですが・・・アップしときます。(BCCWJ1, OY05_02710)

(4) の「没写真」は、単純に「写真がない」という意味ではなく、文脈からは、撮影したものの、完成度や出来栄に満足していない写真を指していると解釈できる。この用法では、「没-」が「写真」に付加され、「写真としての価値や出来栄が十分でない」という意味を表していると考えられる。

以上の分析から、「没-」の意味は単なる「～がない」という解釈にとどまらず、語基が表す性質や状態の欠如（すなわち存在性の否定）、さらには不十分な状態を表すことへと広がる点が明らかになった。

5. 「没-」と「無-」の対照

「没-」は「無-」と同じく「～がない」で説明されるが、両者には相違点がある。特に、同じ語基 (X) に接頭する「無-」と「没-」を比較すると、両者の否定の捉え方には一定の差が認められる。本発表では、BCCWJ1、BCCWJ2 から、(5) の「無個性／没個性」、(6) の「無趣味／没趣味」、(7) の「無価値／没価値」、(8) の「無思想／没思想」、(9) の「無批判／没批判」などの例を抽出し、それぞれのペアの意味を比較した。

- (5) a. 戦後の「民主教育」が無気力で無個性な若者を大量に生んでいるというおかしさにそろそろ気づくべきだ。(BCCWJ1, LBp3_00001)
- b. 組織に加わると、きわだった個性よりも、没個性であることが大切な場合もあり得る。(BCCWJ1, OB2X_00230)
- (6) a. 金額も署名もなかったか、あるいは、ハーブスマンがバスターにもう金がないことを知っていて、無価値の小切手を怒りにまかせて引き裂いたのだと思う。(BCCWJ1, LB19_00082)
- b. 規範的会計理論は、価値判断を含む理論である。「規範的」という用語は、「没価値」とは対照的な「多くの価値観」(full of value) を包括するものと理解されるべきである。(BCCWJ1, PB23_00383)
- (7) a. 私の父は、五十三歳になります。腰を痛めていてほぼ無趣味、休みの日は家でゴロゴロしているのが殆どです。(BCCWJ1, OC09_04703)
- b. 来客があっても約束の時間に理髪師が来ると、「医者と床屋は、おあとがあるから待たせてはならぬものさ」そういつて散髪を優先した。「没趣味である」というのも原の口癖だった。(BCCWJ1, PM51_00044)
- (8) a. カール・クラウスはオーストリアの作家で、新聞記者は無思想と批判している。「新聞はつねに好奇心をそそる。だが、読み終わってみると、だれでも十分に好奇心が満たされずに失望する。チャールズ・ラム」と、また黒覆面が言った。(BCCWJ1, LBm9_00026)

- b. わけても軍国主義が、わが国を支配していた時に詠まれた多くの天皇讃美、戦争謳歌の作品をひとまとめに「戦争詠」として扱うことは、伝統を歪めて没思想の詩型と認識させる誤りを導入することになるのではないか。(BCCWJ1, PM22_00051)
- (9) a. EU が規範進化のアリーナとして、価値の共有を実現してきたことの意義を見落としてはならない。もちろん、EU を理想郷の実現であるかのごとく無批判に賞賛しようというのではない。(BCCWJ1, PB53_00253)
- b. なぜならば、自己意識から生まれる強い関心の支配するところでは、没批判的な党派性に対する安全を保証し得るのは、学的精神だけだからである。(BCCWJ2, PB091_04156)

(5) では、「無個性」が「個性が無い」という客観的な状態を表すのに対し、「没個性」は組織の中で個性を「抑え込む」「埋没させる」ような、個性を目立たせないあり方を表す。(6) では、「無価値」が「価値がなく、何の役にも立たない」という強い否定を表すのに対し、「没価値」は価値判断や価値観を含まないことを表している。(7) では、「無趣味」が趣味を楽しんでいないというライフスタイルの事実を表すのに対し、「没趣味」は趣味的な豊かさや娯楽を重視しない態度を表す。(8) では、「無思想」がしっかりした思想や信念が「無い」状態を指すのに対し、「没思想」は思想性が失われていたり、思想を欠いたものとして扱われたりする状態を表す。(9) では、「無批判」が批判精神や検討を伴わずに受け入れる態度を表すのに対し、「没批判的」は批判的な思考が失われ、物事を批判的に捉えない状態や態度を表す。このように、「無-」が単純な存在の否定を表すのに対し、「没-」は望ましい状態の欠如や評価的ニュアンスを伴うという特徴は、第 4 節での分析結果とも合致している。ただし、上記の (5) ～ (9) の例はそれぞれ別々の文脈で出現するものであったが、次の (10) の「無関心」と「没関心」を同一文脈で比較することで、両者の違いを見る。

- (10) 芸術作品の要求する無関心性とは、決してすべての関心の否定（“生からの解脱”）ではなく（どんな知覚でも、完全に没関心的でありえないことは、きわめて明白である）、むしろ多元的関心の緊張を保持し、それらの調和の達成から高次の精神的自由を手にすることなのである。(BCCWJ1, PB31_00087)

(10) では、「無関心」と「没関心」は、必ずしも同じ意味を示す表現として用いられているわけではない。「無関心」が個人的な利害や特定の欲望の不在という客観的な態度を指すのに対し、「没関心」はあらゆる関心を根こそぎ失い完全に没却するという極端な状態を指す。この点からも、「無-」が要素の不在を客観的かつフラットに表すのに対し、「没-」は主観的な排除といった文脈的ニュアンスを帯びる傾向がある。

そこで、久保（2017: 29）が提示した「動的特性」と「価値特性」という二つの指標を参考に、「没-」の意味特性を検討する。まず、動的特性について考察する。久保（2017）は、「無-」について、基本的には動的特性を持たない接頭辞として位置づけている。確かに、「無感動」「無投票」「無抵抗」「無得点」など、「無-」は動詞性を持つ語基と結合し、「行為の不成立・未実施」を表す場合がある。しかし、語義全体からみれば、これらは本来の意味と異なる状態変化を表すものではなく、すなわち「静的特性」を示すものと考えられる。一方、「没-」は、消失に関わる意味を持ち、対象を排除・否定するようなニュアンスを含む場合もある。そこで、これらの意味が接頭辞「没-」において「動的特性」として反映されているだろうか。例えば、「没個性」は、個性が「ある」状態から「ない」状態への変化を想起させるようにも捉えられる。しかし、「没個性」が表しているのは、必ずしもその変化の過程ではなく、認識の対比において個性が十分に認められないという状態

である。そのため、「没-」で表される意味には、「本来想定される要素が失われている、あるいは十分に認められない」という意味的方向性が含まれるが、そこに時間的推移が伴わないため、これを「動的特性」として認めることは難しいと考えられる。

次に、価値特性について考える。久保（2017）は、「無人」「無線」「無重力」のように、特定の価値判断を伴わない語基が存在する一方、「無害」「無事故」「無邪気」のように、「無-」によって否定される語基が否定的な価値を持つ場合もあれば、「無教養」「無感動」「無防備」のように、肯定的な価値を持つ場合もあることを指摘している。したがって、「無-」自体が特定の価値判断と強く結びつくとはいえず、特定の傾向も認められない。この点で、「無-」は「没-」とは異なる。「没-」と共に起る語基の価値特性について観察すると、語基は肯定的な価値を持つものとして解釈できる。ただし、語基の評価は、語彙内在的な肯定的価値を持つ事例よりも、文脈依存的な肯定的価値を持つ事例の方が多いと言える。例えば、「没交渉」は、「交渉」という行為そのものを否定的に評価するのではなく、交渉することが期待される人物や組織について、交渉が（十分に）行われないことを表している。その結果として、「交際が完全に断たれている・失われている」という、やや距離感や隔たりのニュアンスを伴った否定的評価が生じる。以上から、「没-」は、語基が表す性質の欠如を否定的に評価する方向に働く、一定の価値特性を持つと言える。

このように考えると、「没-」の意味特性として「動的特性」は確認されないものの、認識上の対比によって状態変化を想起させる意味的方向性を持つと考えられる。また、「没-」が付加されることで、語義全体が否定的な意味を帯び、語基の解釈にも影響を与えるという点で、「価値特性」を持つと考えられる。以上から、「没-」のこれらの意味特性は、「無-」とは異なる特徴であると結論づけられる。

6. まとめ

本発表は、辞典の定義と BCCWJ の用例をもとに、「無-」と対照しながら「没-」の意味特性を考察した。その結果、次の三点が明らかになった。第一に、「没-」は、「没」が本来有する「なくなる、なくす」という消失の意味を背景に、単なる「存在性の否定」ととどまらず、「本来期待されるものが欠如している状態」を表す。第二に、「没-」は実際の時間的变化を表す「動的特性」を持つとはいえないが、認識の対比を背景とした状態変化の特性を持つ。第三に、「没-」は欠如に対する否定的評価を生じさせやすいという「価値特性」を持つ。本発表は、先行研究で十分に捉えられていなかった「没-」の具体的な意味特性を明らかにし、日本語における接辞の多様性を示すことができた。今後の課題としては、「存在性の否定」を表す他の接辞との厳密な区別を進めることなどが挙げられる。

参考文献：相原 林司（1986）「不－無－非－未－」『日本語学』5(3), 67-72／影山 太郎（1993）『文法と語形成』、ひつじ書房／久保 圭（2017）『日本語接辞にみられる否定の意味的多様性とその体系的分類』、京都大学大学院人間・環境研究科博士論文／張 明（2018）「字音接辞の分類」『学習院大学大学院日本語日本文学』(14), 47-76／北原 保雄（著）、久保 田淳・谷脇 理史・徳川 宗賢・林 大（編集委員）、前田 富祺・松井 栄一・渡辺 実（編集委員）（2002）『日本国語大辞典 第二版』、小学館／松村 明（監修）小学館国語辞典編集部（編集）（2012）『大辞泉 第二版』、小学館／松村 明（編集）（2019）『大辞林 第四版』、三省堂／山田 忠雄・倉持 保男・上野 善道・山田 明雄・井島 正博・笹原 宏之（編集）（2020）『新明解国語辞典 第八版』、三省堂／国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス 第一部』『現代日本語書き言葉均衡コーパス 第二部』（<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>）最終閲覧日 2026 年 9 月 15 日。

『今昔物語集』の主格標示 —文体的性格に着目した分布の相違—

大金 奈央 (名古屋大学大学院生)

1 はじめに

日本語の主格標示は、古代語において無助詞(φ)中心であったが、中世の過渡期を経て、16世紀末までに格助詞「が」による標示が拡大したとされる。この通時的变化の枠組みは、幅広い年代の資料を用いた包括的な研究により実証的に明らかにされてきた。しかし、先行論の多くは資料の成立年代のみに即した観察に基づいており、文体など資料の性格的な違いは看過されてきた。主格標示の実態をより精緻に記述するためには、時間的推移による影響と、文体・語法上の性格差による影響とを峻別しつつ、双方を勘案して検証する必要がある。本発表では、過渡期に位置する資料でありながら、具体的な実態が明らかにされていない『今昔物語集』(以下、『今昔』)を対象に、実態の報告を行うとともに、作品内部に指摘される文体的差異によって主格標示のあり方に違いが生じるか否かを検討する。

2 先行研究

2.1 『今昔』の資料的性格

『今昔』は、12世紀前半の成立と推定される全31巻の大規模な説話集である。本文は漢字片仮名交じり文で記され、その文体は、基本的に漢文訓読文の流れを汲むものとされる(今野 1999)。ただし、漢文資料に依拠するものの多い天竺・震旦・本朝仏法部(巻20以前、以下前半部)は漢文訓読的性格が強く、和文資料に依拠すると考えられるものの多い本朝世俗部(巻22以降、以下後半部)は、和文的性格に傾くという文体的境界が指摘される。

『今昔』の文体をめぐる様々な観点から検討がなされ、巻20・22の間とは異なる位置に境界を求める見解や¹、個別の巻ごとの傾向も指摘されている²。こうした指摘は、主格標示のあり方を検討する上でも注意を要するが、本発表は「巻二〇を境として大きく漢文訓読体・和文体と分け得る」(山田 1958)という大きな枠組みでの文体的差異を前提とする³。

2.2 『今昔』における主格標示

『今昔』における主格標示のうち、会話文・心話文の主体を示す場合については、阿部(1979ab, 1980)による一連の分析がある。阿部は「甲 {φ / ノ / ガ} ート言フ」等の形式の会話文と心話文を対象に、主体(甲)に下接する助詞の分布を調査し、助詞に下接する待遇表現(宣フ・申ス・言フ等)との関係を分析している。概略は表1のように整理できる⁴。

¹ 巻17・19の間に境界があるとする大坪(1936)、巻19・20のみ変体漢文からの強い影響を受け、それ以前・以降のいずれとも性格が異なるとする山本(2015)等。

² 堀田(1944)や山田(1958)等で、前半の巻でも巻5や巻16で和文的傾向が、後半の巻でも巻25などで漢文訓読的傾向がやや強く現れることが報告されている。

³ 本発表の調査範囲は、文体的境界に関わる議論の中心となる巻と重ならない。

⁴ 各稿の間で用例数に多少の相違が見られるため阿部(1980)の値に依り、引用に際し表の体裁を改めた。あわせて、各部の用例合計に占める各形態の割合を算出し、小数点第1位を四捨五入して示した。

阿部によれば、いずれの部でも無助詞が大半を占め、次いで現れる「の」の割合は後半部にかけて減少する。また、「が」は一貫して少数な

表 1 会話・心話文の主体を示す助詞の分布(阿部 1980)

	無助詞	の	が	合計
天竺震旦	1577 (74%)	514 (24%)	28 (1%)	2119
本朝仏法	1648 (81%)	361 (17%)	20 (1%)	2029
本朝世俗	1693 (86%)	202 (10%)	66 (3%)	1961

がら後半部で用例が微増する。阿部はこうした傾向の背景として、会話・心話文の主体となる登場人物の身分や、引用形式との関係を示唆している。このうち引用形式については、古代日本語においても「の」や「が」が現れる環境の一種とされるク語法(金水 2011)との関係から説明することができる。平安時代の漢文訓読文やその影響下にある作品では、引用形式としてク語法が盛んに用いられることが指摘され、『今昔』においても天竺・震旦部ではク語法が7割以上を占めるが、本朝仏法部で約4割、本朝世俗部で約1割へと減少する(稲垣 1966)。阿部の調査における「の」の割合の減少は、ク語法という助詞が出現しうる特定の環境の減少を反映した可能性がある。なお、「が」に関しては、ク語法が頻用される前半部でも用例数が限られるほか、後半部では、話し手に対する敬意の低い場合に限られるという、前半部の制約から外れた例が見られることから使用範囲の拡大が指摘されている。こうした事情が後半部における「が」微増の要因となっていると考えられる。

また、『日本古典文学大系』(以下『大系』)の解説では、天竺部を除く各部・巻の主格標示の傾向に言及があり、一貫して無助詞優勢で「の」や「が」が限定的に使用されることが述べられている。しかし、具体的な数値は示されておらず、無助詞への偏りの度合いや、文体的性格との関係、阿部が指摘する傾向が資料全体にも該当するか等は判然としない。

以上のように、『今昔』の主格標示に関わる先行論は、対象の限定的な分析や、全体に対する概括的な記述にとどまっており、資料の特徴として指摘される文体的境界との関係を含め、具体的な実態は十分に明らかにされていない。

3 調査範囲と方法

現存する『今昔』諸伝本のうち、最も古態の表記をとどめるとされる鈴鹿本を調査の底本とする⁵。文体と主格標示の関係を検討するため、前半部(天竺・震旦・本朝仏法部)から巻2・7・12を、後半部(本朝世俗部)から巻27・29を選定し、出現傾向の比較を行う。また、用例採集にあたっては、既に分析がなされている会話・心話文の主体を示す例(1)を除き、地の文(2)・会話文中(3)の主格の例を対象に、各巻冒頭から300例を採った。

(1) 帝王ノ宣ハク、「申ス所然ルベシ。…檀越ト為ベシ」ト。(巻12第5話)

(2) 其ノ時ニ、仏 ϕ 、無常ノ文ヲ説給フ。(巻2第1話)

(3) 仏、帝釈ニ告テ宣ハク、「過去ノ無量阿僧祇劫ニ国王 ϕ 有リキ。…」(巻2第3話)

全巻とも京都大学貴重資料デジタルアーカイブにて底本の公開画像を確認し、通読目視により用例を収集した⁶。

⁵ 資料全体の様相を把握するためには諸本欠巻を除く全ての巻を揃える流布本の調査も必要になる。ただし流布本は、全体の傾向を見る場合には概ね使用にたえうとされる一方、語法をおさえるにあたってはかなりの欠脱があることも指摘されるため(酒井 1967)、資料選定も含め、今後の課題とする。

⁶ 巻11以降は「日本語歴史コーパス」にも収録されるが、校訂箇所を含む(池上 2016)。

4 無助詞・「の」・「が」三形態の分布

巻ごとの各形態の用例数と出現割合（小数点第2位を四捨五入）を表2に示す。

調査した全ての巻において無助詞が7割程を占めており、『大系』が指摘する無助詞優勢の傾向が数値的に裏付けられる。なお、その割合には前半部と後半部と

表2『今昔』巻別の無助詞・「の」・「が」の分布

	無助詞	の	が	計
巻2	262 (87.3%)	37 (12.3%)	1 (0.3%)	300
巻7	281 (92.7%)	15 (5.0%)	7 (2.3%)	300
巻12	272 (90.7%)	26 (8.7%)	2 (0.7%)	300
巻27	203 (67.7%)	86 (28.7%)	11 (3.7%)	300
巻29	215 (71.7%)	72 (24.0%)	13 (4.3%)	300

の間で差異が見られる。前半部（巻2・7・12）では無助詞が9割前後と極めて高く、「の」の出現が限定的であるのに対し、後半部（巻27・29）では無助詞が7割程度にとどまり、「の」の割合が高い。「が」は、一貫して僅少であるが、前半部に比べ後半部に用例が多い。

こうした『今昔』に見られる分布の特徴、とりわけ後半部における三形態の割合は、同時期の和文資料でのあり方と重なる。中古中世の和文物語資料⁷でも、無助詞が優勢かつ、「の」が2～4割を占め、「が」の用例が僅少であるという傾向が観察されている（大金 2026）⁸。また、『今昔』前半部、特に巻7・12に見られるような、無助詞への顕著な偏りを見せる資料は、同時期の資料を対象とした先行研究（山田 2010, 金 2024 等）においては報告されていない。文体的性格と主格標示との関係を直ちに断定する段階にはないものの、三形態の出現実態という全体の傾向において、従来指摘される文体上の境界を反映するような分布の差異が生じていることが指摘できる。

5 無助詞・「の」・「が」各形態が現れる環境

表2で見た『今昔』前後半部で異なる三形態の分布について、各形態が現れる構文環境に着目し精査する。分析にあたっては、まず主格に立つ名詞句に係る述語の単複に着目する。三形態のうち無助詞は、特定の節にとどまらず、次の節の述語に際限なく係る構造を取ることができることとされ（金 2024）、中古中世の和文資料を対象とする調査でも、主格に立つ名詞句が複数の述語に係る用例では、基本的に無助詞が主格標示を担う傾向が報告されている（大金 2026）。名詞句に係る述語の単複が、分布を考える指標の一つになると考え、これを観点として取り入れる。また、無助詞・「の」・「が」三形態が現れる環境を分析する先行論の知見に基づき、構文環境を準体節・連体節・従属節・主節に分類し、観察を行う⁹。

5.1 主格に立つ名詞句が単一の述語に係る用例

主格に立つ名詞句が単一の述語に係る用例を準体節(4)・連体節(5)・従属節(6)・主節(7)に分類し、用例数と各巻・節ごとの合計用例数に占める各形態の割合を表3に示す。

(4) 中ノ御門ノ門ニ弁ノ車ノ立タリケルヲ見テ、…（巻27第9話）

(5) 其レニモ人ノ住ケル時ニ、夏比、西ノ台ノ延ニ人ノ寝タリケルヲ、…（巻27第1話）

⁷ 鎌倉初期までに成立の資料として『在明の別』・『松浦宮物語』、鎌倉中期成立の資料として『むぐらの宿』・『苔の衣』、鎌倉後期以降成立の資料として『木幡の時雨』・『雲隠六帖』を対象としている。

⁸ 金（2024）による『源氏物語』の調査結果（無助詞75%「の」24%「が」1%）も同様。

⁹ ここでの従属節は、準体節・連体節を除いた節を指す。また、山田（2010）は連体節・従属節・主節としており、本発表での準体節とする例は連体節に分類されている。

- (6) …門ヲ押ス音ノシケレバ、貞盛、「此レハ盗人ニヤ有ラム」ト思テ、… (巻 29 第 5 話)
 (7) 其ノ時ニ、十五六許ナル童 φ、空ヨリ聖人ノ前ニ墮タリ。(巻 12 第 1 話)

表 3 主格に立つ名詞句が単一の述語に係る例の分布

		準体	連体	従属	主
巻 2	無	1 (8%)	14 (54%)	52 (90%)	92 (95%)
	の	12 (92%)	12 (46%)	6 (10%)	5 (5%)
	が	0	0	0	0
	計	13	26	58	97
巻 7	無	2 (17%)	13 (59%)	36 (100%)	104 (98%)
	の	5 (42%)	7 (32%)	0	2 (2%)
	が	5 (42%)	2 (9%)	0	0
	計	12	22	36	106
巻 12	無	4 (80%)	27 (56%)	44 (96%)	106 (98%)
	の	1 (20%)	19 (40%)	2 (4%)	2 (5%)
	が	0	2 (4%)	0	0
	計	5	48	46	108
巻 27	無	2 (9%)	20 (42%)	47 (68%)	78 (93%)
	の	18 (78%)	26 (54%)	21 (30%)	5 (6%)
	が	3 (13%)	2 (4%)	1 (1%)	0
	計	23	48	69	83
巻 29	無	2 (9%)	24 (50%)	57 (71%)	70 (89%)
	の	18 (82%)	20 (41%)	20 (25%)	5 (6%)
	が	2 (9%)	5 (10%)	3 (4%)	3 (4%)
	計	22	49	80	78

表 3 から、全巻で共通して、「の」が準体節・連体節に、無助詞が従属節・主節に偏る傾向が見られる。この傾向は、金 (2024) が指摘する「が」が拡大する室町期以前の無助詞と「の」の棲み分けの傾向と一致する。また、前後半部の相違点としては、従属節における「の」の割合が指摘できる。前半部では用例が見られない巻 7 を含め、出現が限定的であるのに対し、後半部では「の」がおおよそ 3 割を占めている。加えて、「が」についても前半部では全巻で用例が見られない従属節や主節の例が後半の巻では散見されるようになる。

特に明確な割合の差が見られる、従属節での「の」の出現傾向をより具体的に見るために、従属節の用例を種別に分け、その用例数を表 4 に示した。前半部における「の」は連用形節やテ節に限って出現している。対する後半部では、連用形節やテ節の用例も一定数見られるが、後半部で顕著なのは(8)・(9)のようなバ節での出現である。

- (8) 其ノ後、家ニ物恠ノ有ケレバ、陰陽師ニ其ノ祟ヲ問フニ、… (巻 27 第 13 話)
 (9) 而ル間、近キ所ニ火ノ出来タリケレバ、「移モゾ為ル」トテ… (巻 29 第 12 話)

バによる順接条件句は、準体節や連体節と同様に、上代・中古においても「の」や「が」が見られる環境である (金水 2011)。こうした「の」の出現可能な環境において、前半の巻でも「の」の用例は認められるが、その割合は相対的に低い。後半の巻ではバ節を含めて「の」の出現割合が高く、こうした傾向が全体における割合の差に反映されていると考えられる。

表 4 無助詞・「の」が主格標示を担う従属節の種類

	連用形		テ		バ		ドモ		ニ		ヲ		程に	
	無	の	無	の	無	の	無	の	無	の	無	の	無	の
巻 2	9	1	38	4	2	0	0	0	2	0	0	0	1	0
巻 7	4	0	16	0	5	0	2	0	6	0	0	0	1	0
巻 12	3	1	23	1	9	0	1	0	7	0	1	0	0	0
巻 27	7	1	15	3	11	13	6	1	5	2	1	1	2	0
巻 29	5	2	22	5	20	9	1	0	5	2	0	1	0	0

5.2 主格に立つ名詞句が複数の述語に係る用例

前節と同様の観点から、主格に立つ名詞句が複数の述語に係る用例の分布を観察する。ここでの準体節(10)・連体節(11)は、各節内で主格に立つ名詞句が複数の述語に係る例、従属節(12)は、主格に立つ名詞句が複数の述語に係るが文末の述語には係らない例、主節(13)は、

主格に立つ名詞句が複数の述語に係り、なおかつ文末の述語まで係る用例を指す。

- (10) 人ヒト ϕ 持来テ差置テ去ヌルヲ、「何文ナラム」ト思テ… (巻 29 第 4 話)
 (11) …大臣 ϕ 御シテ入テ、頼信ガ寝タルヲ驚カシ給ケル時ニ… (巻 27 第 12 話)
 (12) 仏 ϕ 父ノ御傍ニ在シテ、本経ヲ説給フニ、大王、即チ阿那含果ヲ得ツ。(巻 2 第 1 話)
 (13) …天人 ϕ 比丘ノ所ニ来テ、天ノ甘露ヲ以テ供養ス。(巻 7 第 7 話)

表 5 複数の述語に係る例の分布

		準体	連体	従属	主
巻 2	無	2 (100%)	13 (87%)	12 (100%)	76 (99%)
	の	0	1 (7%)	0	1 (1%)
	が	0	1 (7%)	0	0
	計	2	15	12	77
巻 7	無	2 (100%)	11 (100%)	17 (94%)	93 (100%)
	の	0	0	1 6(%)	0
	が	0	0	0	0
	計	2	11	18	93
巻 12	無	0	17 (100%)	20 (100%)	54 (98%)
	の	1 (100%)	0	0	1 (2%)
	が	0	0	0	0
	計	1	17	20	55
巻 27	無	2 (67%)	4 (67%)	26 (70%)	24 (77%)
	の	0	2 (33%)	9 (24%)	5 (16%)
	が	1 (33%)	0	2 (5%)	2 (6%)
	計	3	6	37	31
巻 29	無	3 (75%)	3 (60%)	31 (91%)	25 (89%)
	の	1 (25%)	2 (40%)	3 (9%)	3 (11%)
	が	0	0	0	0
	計	4	5	34	28

表 6 中古中世和文物語資料における
複数の述語に係る用の分布 (大金 2026)

	無助詞	の	が	小計
源氏物語	11	2	0	13
在明の別	9	0	0	9
松浦宮物語	20	1	0	21
むぐらの宿	14	8	0	22
苔の衣	16	2	0	18
木幡の時雨	27	5	0	32
雲隠六帖	7	2	1	10

格が表出せられ、また、容易に判明する上に、かつ比較的短文であることが多い」(山田 1960: 13) などと説明される。対して、和文、特に物語の構文の特性は「句節をつぎつぎと継ぎたすことによって構成されているために、後続する部分に対する関係が必ずしも緊密でない形をとる。」(小松 2012: 248) などと説明される。同様の分布傾向が見られるものの構文的な事情は異なる。とりわけ複数の述語に係る用例については資料間や巻ごとの構文的性質

出現実態を表 5 に示す¹⁰。主格に立つ名詞句が複数の述語に係る用例では、いずれの巻においても環境を問わず、無助詞が圧倒的優勢である。しかし、「の」の出現状況に注目すると、前後半部の間でわずかながら差異が認められ、前半部では巻 2 の 1 例を除き用例が見られないのに対し、後半部ではいずれの巻でも「の」が複数例見られる。

ここで、中古中世の和文資料における同様の環境での三形態の分布を大金 (2026) から引用する (表 6)。中古中世和文物語資料においても、複数の述語に係る用例は無助詞が優勢である。また、『今昔』と成立時期に近い『源氏物語』や『在明の別』、『松浦宮物語』での分布を見ると、無助詞が優勢かつ、「の」や「が」の出現が限られているという点から『今昔』の中でも特に、前半部の実態と重なるように見える。

しかし、『今昔』では文体的境界に応じた文の構造の差異が夙に指摘されており、前半部の構文の特徴は「大概、主

¹⁰ 表 5 における割合の算出について、特に用例数が限られるため、1 例が全体の割合に与える影響は大きいものの、出現傾向捉えるための指標としては一定の有効性を有すると考える。

の違いと主格標示のあり方との関係を考慮する必要があると考える。複数の述語に係る用例に見られる主格標示のあり方と文体差との関係については、文の長さや接続法といった文の構造的側面を踏まえた上で、今後検討していきたい。

6 まとめと今後の課題

本発表では、作品内部に漢文訓読的性格と和文的性格という文体上の境界が指摘される『今昔』を資料として、無助詞・「の」・「が」三形態の出現実態を調査した。まず、全体の値において、無助詞優勢かつ「が」が僅少であるという資料全体に一貫する傾向を指摘した上で、前半の巻で無助詞が9割を超え、「の」の出現が限定的であるのに対し後半の巻では「の」が一定割合見えるという実態から、先行論が指摘する文体的境界を反映した分布の差異が認められることを指摘した。また、こうした分布の差異について、構文環境に着目した観察から、主格に立つ名詞句が単一の述語に係る環境の従属節、および複数の述語に係る環境の実態が関わることを明らかにした。この調査結果は、主格標示の史の変遷を記述する上で、成立年代にのみ依拠した資料選定に基づく記述にとどまらず、資料の性格や文体的性格を考慮した記述を行うことの必要性を提示するものである。

本発表では、文体的な差異を反映した実態が確認される構文環境を指摘したが、上記のような実態が観察される要因の解明には至っていない。今後は、今回観察された文体的境界を反映した分布の差異が生じる要因を究明していく必要がある。

使用資料

鈴鹿本『今昔物語集』京都大学貴重資料デジタルアーカイブ（最終閲覧日 2026/09/17）
<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00000125>

参考文献

阿部八郎（1979a）『『今昔物語集』天竺震旦部の主格助詞』『学苑』469／阿部八郎（1979b）『『今昔物語集』本朝仏法部の主格助詞』『田辺博士古稀記念国語助詞助動詞論叢』／阿部八郎（1980）『『今昔物語集』本朝世俗部の主格助詞』『国語研究』43／池上尚（2016）『『今昔物語集（本朝部）』のデータについて』国語研コーパスポータル／稲垣瑞穂（1966）『漢文訓読文の引用形式と今昔物語集』『国語国文』35(5)／大金奈央（2026）『中古中世和文物語資料における主格標示の実態—和文物語資料の精査を中心に—』（『Nagoya linguistics』20／大坪併治（1936）『禁止表現史』『国語国文』5(10)／金銀珠（2024）『無助詞・「の」・「が」による主語表示の歴史的展開—平安から現代までの構造変化に注目して—』『日本語の研究』20／金水敏（2011）『第3章統語論』『シリーズ日本語史3 文法史』岩波書店／小松英雄（2012）『仮名文の構文原理〔増補版〕新装版』笠間書院／今野達 校注（1999）『新日本古典文学大系 今昔物語集一』岩波書店／酒井憲二（1967）『今昔物語集の資料性』『山梨県立女子短期大学紀要』1／堀田要治（1944）『今昔物語集に於ける使役の助動詞ス・サス・シムについて』『橋本博士還暦記念国語学論集』岩波書店／山田巖（1958）『日本文法講座 第4』明治書院／山田昌裕（2010）『格助詞「が」の通時的研究』ひつじ書房／山田孝雄ら 校注（1960～1963）『日本古典文学大系 第23～26』岩波書店／山本真吾（2015）『『今昔物語集』話末評語の漢語の性格について』『国語国文』84(1)

【付記】本発表は、JSPS 特別研究員奨励費 25KJ1434 の助成を受けたものである。

「かなり」の機能拡張の通時的検討

やま だ きょう こ
山 田 恭 子 (筑波大学大学院生)

1. はじめに

程度副詞の成立過程については、これまで多くの研究が蓄積されてきた。とりわけ、漢語、あるいは漢語を含む語から成る高程度を表す程度副詞には、形容動詞や名詞など複数の品詞的機能を併せもつものが少なくない。そのため、これらの語が程度副詞として成立・発達した過程は、これまで重要な研究課題として取り上げられてきた(工藤 1983, 鳴海 2013, 田和 2017 ほか)。

「かなり」もその一例として位置づけられる。「かなり」は、句相当の形式であった「可なり」が、意味・機能および用法を変化させながら、程度副詞として発達した語である。現代日本語では、連用修飾用法(「かなり〇」)に加え、「かなりの・かなりな」のような連体修飾用法、「かなりだ・かなりである」のような述語用法、さらには「かなりが・かなりを・かなりは」のような格助詞・係助詞を伴う体言用法も認められる。しかし、これらの用法が成立当初から備わっていたわけではなく、その成立過程や意味・用法の変遷については、先行研究において十分に明らかにされているとはいえない。そこで本発表では、「かなり」の意味・用法の変遷を分析し、程度副詞としての機能を獲得していく過程を明らかにする。

2. 先行研究の概観

工藤(1983)は、程度副詞には他品詞から転成した語が多いことを指摘し、「かなり」を程度副詞化がほぼ完了した語として位置づけた。同時にこれを、典型的な程度副詞であるとともに、周辺の・過渡的な性格をもつ語とも捉えている。さらに程度副詞を、形容詞と結びついて程度を限定する一方、陳述的な肯定・平叙と関わり評価性を帯びるという二重の性格をもつものとした。工藤が「かなり」の同類に挙げる「非常に」「大変(に)」「随分」「相当」「大層」「結構」などの多くは、現代語で「一な」による連体修飾を許容する。この点は、これらが何らかの機能拡張を経た語である可能性を示すものであり、鳴海(2015)にも同様の指摘がみられる。

鳴海(2015)は、「相当」「随分」などの漢語を対象に、意味変化と程度副詞化の過程を論じた。工藤のいう周辺の・過渡的な程度副詞のあり方は、程度副詞への転成類型を示すものであり、転成の仕方は程度的意味の生起過程と関連するとされる。また鳴海(2013)は、程度副詞化を解明するには、程度的意味とその周辺にある量的意味・評価の意味との通時的関係を検討する必要があると説く。

田和(2012, 2017)は、高程度を表す語のうち、話し手が程度を品定めする意味的特徴をもつものを「評価的な程度副詞」と呼ぶ。この類は派生的な連体修飾用法・述語用法をもち、形態・統語・意味の各面で形容動詞に近接する。さらに「随分」を例に、評価的な程度副詞化の前後で同語幹をもつ形容動詞の意味も変化することを示し、程度副詞化が意味変化と密接に関わると指摘している。

以上から、程度副詞化には評価の意味、ないし評価性が深く関与すると考えられる。そこで本発表では、「評価性」を主要な分析項目の一つとして検討する。

「かなり」を個別に取り上げた研究としては、堀内(1971)、森田(1980)、加藤(2011)が挙げられる。

堀内(1971)は、「かなり」に後接する「一な」および「一の」の使用傾向を明らかにするとともに、両形式が担う意味機能の差異について考察している。

森田(1980)は、共時的観点から「かなり」の意味と用法について概括的な記述を行っている。森田は、意味機能の面から「かなり」の文型を次の三種に区分している。

- ① かなりの＋名詞 a, 複数の事物を表す名詞(数量・比率を問題とする)
b, 単独の事物を表す名詞(程度・スケールを問題とする)
- ② かなり＋用言や副詞(程度や量を問題とする)
- ③ かなり＋方向・地点・時点を表す名詞(基準からの隔たりを問題とする)

森田の分類は共時的な観点に基づくものであり、通時変化における意味のバリエーションとしては必ずしも網羅的とはいえない。しかし、後に検討する辞書の記述と比べると、より精緻な分類であり、本発表における意味分類の枠組みを検討する際に示唆を与える。

加藤（2011）は、近世以降の小説に見られる用例を対象として、「かなり」の成立と通時的変化について検討し、その変遷を示している。しかし、調査資料が小説という特定のジャンルに限定されており、意味の分類についても十分に網羅的であるとはいえない。また、「かなり」の段階を含めた分析や、体言用法の用例については、検討の対象とされておらず、「かなり」の機能的拡張の全体像を明らかにするにはなお検討の余地が残されている。

以上を踏まえ、本発表では「かなり」の意味・用法の変化を分析し、その機能拡張の過程を明らかにする。

3. 辞書類における「かなり」の意味記述の検討

本発表では、まず辞書類の記述を調査し、「かなり」の意味記述の変遷とその特徴を整理する。なお、紙幅の都合上、各項目に対応する用例の提示は省略する。

中国語の大規模辞典の一つである『漢語大詞典』では、「可也」に、①～ではないか、②しかし・ところが、③戯曲の添え詞、という三つの意味が掲げられている。『大漢和辞典』には、以下のよう

【可也】カナリ 【一】 よろしい。【二】 まあよろしい。

【可成】k 'e³ch 'eŋ² 【一】 出来る。【二】 カナリ やや。又、すこぶる。 （大漢和辞典、巻二）

「可也」と「可成」のそれぞれに項目が設けられており、表記に応じた意味の相違が示されている。「可」は許可と可能の双方を表しうするため、後接する要素に応じてその意味が変化することが同辞典の記述からうかがえる。

次に古辞書類の検討を行う。室町後期から江戸前期にかけて成立した『日葡辞書』には、「かなり」の語としての独立した項目はないものの、「可」の例として「かなり」が示されている。明治期に初版が刊行された『大言海』には「かなり」が語相当として記述されている上に副詞としての機能を有する旨の記載もある。

CA カ (可) Yoxi. (可し) 良いこと。『例、Ca nari. (可なり) それはよい、または、よいものである。

(邦訳日葡辞書)

かーなり (名) 可成 【可也ノ義、許可ノ意、次次條ヲ見ヨ】 大抵、可キコト。「かなりの出来」副詞ノ如クニモ用キラル。「かなり好い」

(大言海、第一巻)

以上の辞書記述からは、「かなり」が句相当の形式から一語として確立した時期を明確に特定することはできない。ただし、『日葡辞書』および『大言海』の記述に限れば、少なくとも室町期後半までは、「かなり」は是認の意味を担う句相当の形式として用いられ、明治期には語相当の形式として成立していたことが確認できる。

以上の検討から、「かなり」にかかわる通時的な意味のバリエーションとしては、森田（1980）の分類に加え、「許可・是認」「可能」の意味も存在したということになる。これらを踏まえ、次節では、「かなり」の意味・用法の変化に伴う機能拡張の過程を明らかにするため、コーパスおよび関連文献を用いた調査を行う。

4. 用例調査

4.1 調査方法

次に、文献資料およびコーパスに基づいて用例を収集・分析する。用例の収集には、主として『日本語歴史コーパス』(以下、CHJ) および『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下、BCCWJ) を用いる。いずれも、コア・非コアを問わず全レジスターを検索対象とした。検索条件は、語彙素「可成」、ならびに語彙素「可」と語彙素読み「ナリ」の組合せとし、検索の結果、CHJ からは2,171 例の用例が得られた。CHJ で確認できない明治期以前の用例を補うため、“Japan Knowledge Lib” 所収の『新編日本古典文学全集』および『国書データベース』についても調査を行い、18 例を得た。CHJ の検索結果と合わせ、誤解析と判断される用例等を除外した2,189 例を分析対象とする。

BCCWJ からは約2 万例の用例が得られたが、CHJ との比較可能性を確保するため、無作為に用例を抽出し、誤解析を除く2,186 例を分析対象とした。さらに、CHJ およびBCCWJ では、助詞「が」「を」「は」が後接する用例を十分に収集できなかったため、これらの用例については『筑波ウェブコーパス』(以下、NLT) を用いて補足的に抽出する。

意味機能は、辞書記述および森田（1980）の分類を参照し、以下の5 類に区分する。なお、③から⑤の括弧内には、森田が明示した用例を引用する。

①是認を表す機能

(1) 事の由を聞かしむるに、「甚だ以て可なり」と。 (将門記 940)

②実行可能な範囲・限度を表す機能

(2) 二、各室とも、可成、同一温度に温むべし。 (太陽 1901)

③程度・スケールを表す機能（「かなり寒い」「かなり進んでいる」「かなりの無理」）

（3）直に愈りましたが此虫の出るのは可なり珍しいからといッて焼酎へ漬たのを（読売新聞 1875）

④数量・比率を表す機能（「かなりの時間」「かなりの部分」「かなりある」）

（4）開業早く既に可なりの客があり今日は七つ明日は十、と次第にお客は増すばかり（婦人倶楽部 1925）

⑤基準からの隔たりを表す機能（「かなり右」「かなり昔」）

（5）このくわだては、可なり前から吾々友達の間考へられてゐたものだが（読売新聞 1925）

②は、辞書記述および用例調査の結果を踏まえ、新たに意味分類として設定する必要があると判断した。該当する用例はいずれも「できるだけ」や「なるべく」に置き換え可能である類として、ラベルを付与している。

また、用法については、ニ型連用修飾用法（以下、ニ連用）、〇型連用修飾用法（以下、〇連用）、ノ型連体修飾用法（以下、ノ連体）、ナ型連体修飾用法（以下、ナ連体）、述語用法および体言用法に分類する。さらに、「かなり」の各用例における評価性についても分析を行う。

なお、「評価性」の定義をめぐることは、形容詞研究および副詞研究の立場から、西尾（1998）、樋口（2001）、八亀（2008）、田和（2011, 2017）等、さまざまな先行研究においてなされているが、本発表では概ね樋口（2001）・八亀（2008）の立場を採用する。両氏は「主体のかかわり一般」および「主観性」を「評価」と捉えている。

以上の調査方法をもとに、意味機能と用法との対応関係を踏まえながら、「かなり」の意味・用法の変遷と程度副詞としての機能獲得の過程を明らかにする。

4.2 「かなり」の用法・意味の変遷

前節で示した調査方法に基づく分類結果を、表1から表4に示す。表1および表2にはCHJと『新編日本文学全集』ほかの結果を、表3および表4にはBCCWJの結果を示した。

江戸期までに認められる特徴は、述語用法への偏りである。これらはいずれも①「是認」の意味で用いられ、古代中国文献に見られる用法を踏襲したものと位置づけられる。江戸期以前には①以外の意味・用法は確認されない。江戸期には初めてニ連用が現れ、③の程度的意味で用いられるようになる。

明治期以降の特徴は、用法の多様化である。それ以前は述語言い切り用法（「かなり」）に限られていたのに対し、明治期以降は「可ならん」「可ならず」「可なるを」など、助動詞「なり」の活用による形式が現れる。また、〇連用・ノ連体が急増し、ナ連体、体言用法、「一的」を後接する用法も確認される。これらは、「なり」が助動詞としての性格を次第に失い、「かなり」全体が一語相当の形式として捉えられるようになったことを示す。1900年代以降には「かなりである」「かなりだが」など、助動詞「だ」を後接する形式も18例確認され、この一語化を裏づける。1900年代の用例はいずれも①の「是認」の意味であるが、BCCWJでは同形式が③の程度的意味も表す。

ただし、「可なるの」「可なるを」など、助動詞「なり」の活用による形式は①の「是認」に限られる。一方、「かなりの」「かなりは」のように、「なり」の形式が固定化した後に別の要素が後接する形式では、①から離れた意味・用法が認められる。述語用法は明治期まで高頻度であったが、大正期を境に急減する。

〇連用では①以外の多様な意味が成立し、特に②「実行可能な範囲」を表す用法が注目される。この意味は現代の辞書には記載されていないが、CHJの収録時期下限である1920年代頃までは多数確認され、その後BCCWJでは消失する。②は「可」が本来的にもつ「可能」の意味から派生したと考えられ、「かなり」から可能にかかわる意味が失われたことを示唆する。

③の程度的意味はニ連用が先行して成立し、後に〇連用にも拡大し、ノ連体にも多く認められる。④の数量・比率の意味は主に〇連用とノ連体に現れ、ニ連用・ナ連体では少ない。また、「かなりは」は1890年代から確認され、この時期には④に限定される。⑤「基準からの隔たり」は1900年代以降に確認され、〇連用にのみ現れる。

BCCWJでは、②の消失、ニ連用の衰退、ナ連体の少数化、述語用法の衰退が確認される一方、⑤の意味は増加している。CHJと併せると、⑤は比較的新しく成立した意味と判断できる。また、評価性の強い用例は、CHJでは用例総数の62.5%を占めるのに対し、BCCWJでは2.8%に低下している。このことから、「かなり」の語内部に含意されていた評価性は時代とともに衰退したと考えられる。これは、述語用法および②の可能にかかわる意味の衰退とも対応する。以上から、「かなり」はこれらの用法・意味の衰退に伴って評価性を失い、純粋な程度的意味を表す語へと変化したものと判断できる。

表1：CHJ・新全集ほかにおける「かなり」の用法・意味の変遷

用法意味	φ型運用修飾					二型運用修飾					ナ型運用修飾					ノ型運用修飾					述語			体言	的型	ナル型	ナル型
	②	③	④	⑤		②	③	④		③	④		③	④		①	②	③	④								
時代																											
奈良期																									2		
歴史書																									2		
平安期																									2		
軍記物																									2		
鎌倉期																									3		
随筆																									2		
日記・紀行																									1		
室町期																									6		
軍記物																									1		
歌謡集																									1		
抄物																									3		
キリシタン																									1		
江戸期						1	1																		15		
随筆・紀行						1																			2		
人情本							1																		1		
仮名草子																									1		
歌論書																									4		
黄表紙																									2		
洒落本																									2		
読本																									1		
料理書																									2		
明治期	54	94	25	3	1	17																			2		
雑誌	47	81	2	1		15																			1341		
新聞	1	3	3			1																			69		
初期口語						1																			1293		
小説	6	10																							15		
教科書																									1		
大正期	10	488	25	3		29	6																		21		
雑誌	10	438	25	1		25	4																		11		
新聞		7		2																					8		
小説		36				4	2																		15		
教科書		7																							48		
昭和期		31	2																						36		
教科書		31	2																						36		
総計	64	613	32	4		1	47	6																	2189		

表2：CHJおよび新全集ほかにおける用例の評価性

時代	強					弱					総計
	①	②	③	集計	割合	③	④	⑤	集計	割合	
奈良期	2			2	100%					0%	2
平安期	2			2	100%					0%	2
鎌倉期	3			3	100%					0%	3
室町期	6			6	100%					0%	6
江戸期	13	1	1	15	100%					0%	15
明治期	1137	57	16	1210	90.2%	120	10	1	131	9.8%	1341
大正期	103	12	13	128	16.3%	589	64	3	656	83.7%	784
昭和期			2	2	5.6%	31	3		34	94.4%	36
総計	1266	70	32	1368	62.5%	740	77	4	821	37.5%	2189

表3：BCCWJにおける「かなり」の用法・意味の変遷

用法 意味 年代・ジャンル	φ型連用修飾			ニ型	ト型	ナ型連体修飾		ノ型連体修飾		述語	体言	総計
	③	④	⑤	③	③	③	④	③	④	①	④	
1970	48	1				1		11	1			62
ベストセラー	11	1						3				15
国会会議録	22					1		3	1			27
白書	15							5				20
1980	144	5	2	2				21	10	1	1	186
書籍	61	3	2					8	4	1		79
ベストセラー	14	1		2				2	1			20
国会会議録	47							8	2		1	58
白書	22	1						3	3			29
1990	295	9	9	1		2		39	41	5	1	402
図書館・書籍	240	7	8	1		2		34	33	5	1	331
ベストセラー	16							3	2			21
国会会議録	34	2	1					1	4			42
白書	5							1	2			8
2000	1162	34	35	1	2	4	1	169	102	25	1	1536
雑誌	55	2	2					12	5			76
新聞	3								1			4
出版・書籍	337	7	11	1		1	1	64	41	20	1	484
図書館・書籍	121	3	6			1		21	24	3		179
ブログ	312	5	6		2			37	13			375
ベストセラー	7	2						2	2	2		15
教科書	1	1										2
広報紙	3								1			4
国会会議録	24	3						2	3			32
知恵袋	297	11	10			2		31	10			361
白書	2								2			4
総計	1649	49	46	4	2	7	1	240	154	31	3	2186

表4：BCCWJにおける用例の評価性

評価性 意味 年代	強				弱					総計
	①	③	集計	割合	③	④	⑤	集計	割合	
1970		2	2	3.2%	58	2		60	96.8%	62
1980	1	3	4	2.2%	164	16	2	182	97.8%	186
1990	5	7	12	3.0%	330	51	9	390	97.0%	402
2000	25	19	44	2.9%	1319	138	35	1492	97.1%	1536
総計	31	31	62	2.8%	1871	207	46	2124	97.2%	2186

「が」「を」「は」を伴う体言用法については、BCCWJ および NLT から計 78 例を抽出した。その内訳は、「が」を伴う用例が 30 例、「を」を伴う用例が 33 例、「は」を伴う用例が 15 例である。これらの用例はいずれも、以下の(9)～(11)に示すように、④の数量・比率を表す機能を有することを確認した。

(9) 抑留期間の加算を三年にすることによって、抑留者のうち恩給対象年限に達しない人かなりが対象になって、そして実質的な救済が図れると思うんであります。(国会会議録、第 91 回国会 1980)

(10) ストレスを含む数多い要因が重なりあったときに、胃潰瘍や十二指腸潰瘍になるわけですが、原因のかなりをヘリコバクター・ピロリによる粘膜傷害が占めていると考えられています。

(『ピロリ菌除去で潰瘍を治す』榊信廣 1998)

(11) そこがわかってもらえれば、「経済的理由で購読できない」という問題も、かなりは解決できるのではないのでしょうか。(第 4 回中央委員会総会/志位委員長の話)

(9)は、恩給対象年限に達しない抑留者のうち、相当数が救済の対象となることを表している。(10) (11)も同様に、「かなり」は程度そのものではなく、数量や割合を示す語として用いられており、④の意味に該当する。

これらは、「かなり」と助詞との間に何らかの要素が省略された用例と解することも可能である。しかし、「かなり」が名詞的に用いられる場合には、純粋な程度を表すのではなく、数量・比率・割合を表す機能を担うと考えられる。このことは、句相当の形式であった「可なり」が一語化し、形容動詞的・副詞的な用法を経たのち、さらに名詞的用法へと機能を拡張したことを示している。

以上の用例調査から「かなり」の歴史的変遷をたどると、当初は句相当の評価的意味をもつ形式として用いられていたが、江戸期以降、程度的意味が生じ、「なり」の部分の助動詞としての性格は次第に弱まった。明治期までは、是認や可能な範囲を表す用法、および「かなりの」にみられる程度の用法にも評価性の強い例が認められたが、これらの用法は徐々に衰退し、評価性の弱い純粋程度の意味が定着した。さらに、そこから数量・比率を表す意味や、基準からの隔たりを表す意味が派生した。現代語では、評価性の弱い純粋程度の意味が中心的な用法となっている。

5. おわりに

本発表では、句相当の形式であった「かなり」が他品詞として機能を拡張していく過程について検討した。以下に、その結果として明らかになった点をまとめる。

- (12) ①の是認を表す「かなり」は、明治期まで「可なり」「可也」の表記で多く認められるが、大正期以降、次第に衰退する。
- (13) 昭和期以降、二型連用・ナ型連体修飾用法は縮減し、〇型連用・ノ型連体修飾用法へ収斂する。
- (14) 格助詞「が」「を」、係助詞「は」を伴う体言用法は1890年代以降に成立し、数量・比率を表す。
- (15) ①②のすべておよび③の一部は評価性が強いと判断できるが、その割合はCHJでは用例総数の62.5%であるのに対し、BCCWJでは2.8%へ低下しており、「かなり」の変化は評価性の衰退として捉えることができる。

本発表では、「かなり」の表記上の問題に加え、程度的意味の成立過程における個別用例の精査、ならびに1930年代から1960年代にかけての通時的変遷について、十分な検討を行うには至らなかった。とりわけ後者については、現在、『昭和平成書き言葉コーパス』を用いた調査を進めており、各時期における用法の分布や意味的特徴の変化を明らかにすることを今後の課題とする。また、「かなり」と同様に高程度を表す漢語系の程度副詞、および漢語を含む関連表現についても、継続的な調査が必要である。こうした語との比較・対照を通じて、「かなり」に固有の変化だけでなく、程度副詞の意味・用法に生じる通時的変化の一般的なパターンの解明を目指す。

〈 引用参考文献および調査資料一覧 〉

大槻文彦 (1932) 『大言海』 第1巻 富山房／加藤浩司 (2011) 「研究ノート：副詞『かなり』の語史（付、形容動詞『かなり・だ』）」 こだはら 33: pp. 31-44／北原保雄・久保田淳・谷脇理史・徳川宗賢・林大・前田富祺・松井栄一・渡辺実 (2002) 『日本国語大辞典』 第二版 小学館／工藤浩 (1983) 「程度副詞をめぐって」 (渡辺実編『副用語の研究』 pp. 176-198, 明治書院)／国書データベース (<https://kokusho.nijl.ac.jp/>) (2026年9月4日確認)／国立国語研究所 (2025) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 (バージョン2021.03, 中納言バージョン2.7.3, 分類語彙表情報 2025.03) <https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/> (2026年7月16日確認)／国立国語研究所 (2026) 『日本語歴史コーパス』 <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/> (2026年7月16日確認)／田和真紀子 (2011) 「程度副詞の評価性をめぐって」 宇都宮大学教育学部紀要 第1部 61: pp. 25-36, 宇都宮大学教育学部 (田和2017所収)／田和真紀子 (2012) 「評価的な程度副詞の成立と展開」『近代語研究』 16: pp. 87-100, 武蔵野書院／田和真紀子 (2017) 『日本語程度副詞体系の変遷—古代語から近代語へ』 勉誠出版／筑波大学・国立国語研究所・Lago言語研究所『NINJAL-LWP for TWC』 (<https://tsukubawebcorpus.jp/>)／土井忠生・森田武・長南実編訳 (1980) 『邦訳日葡辞書』 岩波書店／鳴海伸一 (2013) 「副詞における程度的意味発生の過程の類型」『国立国語研究所論集』 6: pp. 93-110, 国立国語研究所 (鳴海2015所収)／鳴海伸一 (2015) 『日本語における漢語の変容の研究』 ひつじ書房／西尾寅弥 (1998) 「ことばの意味に伴う評価性」『国語と国文学』 pp. 75-06, 東京大学／樋口文彦 (2001) 「形容詞の評価的な意味」『ことばの科学：言語学研究会の論文集10』 pp. 43-66, むぎ書房／堀内武雄 (1971) 『「かなりな」と『かなりの』』 (森岡健二、永野賢、宮地裕編『講座正しい日本語』 第5巻文法編) pp. 162-173, 明治書院／前川喜久雄 (監修) 山崎誠 (編) (2014) 『書き言葉コーパス—設計と構築—』, 講座日本語コーパス2, 朝倉書店／森田良行 (1980) 「かなり」『基礎日本語2—意味と使い方』 pp. 98-102, 角川書店／諸橋轍次 (1956) 『大漢和辞典』 巻2, 大修館書店／八亀裕美 (2008) 『日本語形容詞の記述的研究—類型論的視点から—』 明治書院／羅竹風編 (1993) 『漢語大詞典』 第六巻 漢語大詞典出版社／Japan Knowledge Lib: 『新編日本古典文学全集』 小学館 <https://japanknowledge.com/lib/?gn=s> (2026年9月4日確認)

依頼発話における配慮方略の使用にみられる性別差の経年変化
—岡崎敬語調査（1953・1972・2008 年）の方略カテゴリー別分析—

加藤^{かとう}恵^え梨^り（愛知教育大学）

1. はじめに

国立国語研究所による「岡崎敬語調査」は、愛知県岡崎市において 1953 年、1972 年、2008 年の 3 時点で実施された大規模な経年調査であり、日本語の敬語使用や対人配慮の長期的変化を捉える上で重要な資料である。

本研究の目的は、岡崎敬語調査の依頼場面を対象とし、人に依頼するときに用いられる配慮の方略（以下、配慮方略）の使用が約半世紀の間にどのように変化したのか、また、その使用にみられる性別差がどのように変化したのかを明らかにすることである。

岡崎敬語調査を用いた先行研究では、発話全体の丁寧さや個別の表現・機能的要素について長期的変化が報告されている。Matsuda (2012) は、3 回の調査を通して敬語使用に対する性別・年齢・学歴による差が弱まってきたことを示した。柳村 (2014) は、発話全体の丁寧さが長期的に上昇し、とりわけ第 3 次調査で大きく上昇したこと、また女性は各時点で男性より丁寧である一方、その上昇には男性の変化や高学歴化が関与すると解釈している。井上・金・松田 (2012) は、「てもらう」「ていただく」を含む受惠表現が長期的に普及したことを示した。丁 (2016) は「荷物預け」場面の機能的要素を分析し、「すみません」の定型化や「申し訳」系表現の増加を報告している。また、中西 (2025) は、発話中で用いられる状況説明表現について、その言い方が定型化していく過程を経年的に分析している。これらの研究により、発話全体の丁寧さだけでなく、依頼・関連場面を構成する個別表現や機能的要素も変化してきたことが明らかになっている。しかし、先行研究で示された敬語使用に対する性別の影響の弱まりが、依頼発話を構成する個々の配慮方略にも同様に現れているのかは、十分に明らかになっていないと考えられる。

2. 研究課題

本研究では、岡崎敬語調査の複数の依頼場面に共通する配慮方略カテゴリーを設定し、1953 年、1972 年、2008 年の 3 時点と比較する。具体的には、次の 3 点を研究課題とする。

- (1) それぞれの配慮方略カテゴリーの使用は、3 時点の間でどのように変化したか。
- (2) 一つの発話に用いられる配慮方略カテゴリーの数は、3 時点の間でどのように変化したか。また、その変化の仕方に性別による違いはみられるか。
- (3) 個々の配慮方略カテゴリーの使用にみられる性別差は、1953 年から 2008 年にかけて変化したか。

3. 方法

3.1 資料

分析には、国立国語研究所「岡崎敬語調査データベース」のランダムサンプルを使用した。各場面で「自分ならどのように言うか」と回答して得られた発話を、以下「反応文」と呼ぶ。1,135 人のうち、対象 4 場面の少なくとも 1 場面に分析可能な反応文がある 1,133 人、計 4,510 反応文を分析対象とした。想定相手の属性による影響をそろえるため、想定相手が男性である「用紙受取」「荷物預け」「議事堂」「医者」の 4 場面を対象とした。「用紙受取」は、第 1 次・第 2 次調査では「電報用紙」、第 3 次調査では「振込用紙」である。性別は原資料の記録に基づく。

3.2 配慮方略の分類と自動符号化

本研究では、熊谷・篠崎（2006）および丁（2016）を参考に、複数の依頼場面に共通して適用でき、文字列規則で自動検出可能な 5 つの配慮方略カテゴリーを設定した。反応文はカタカナで表記され、原則として文節単位で分かち書きされているため、検索漏れを減らすために文字種と空白を統一した。その上で、各反応文について 5 カテゴリーそれぞれの該当の有無を自動判定した。各カテゴリーの定義と主な検出例を表 1 に示す。

表 1 配慮方略カテゴリーの定義と主な検出例

カテゴリー	内容	主な検出例
① 謝罪・恐縮／切り出し系	謝罪、恐縮、注目喚起、依頼の切り出しを示す表現	「すみません」「すいません」「恐れ入ります」「申し訳ありません」「失礼します」など
② 事情提示	依頼をする理由や事情を示す表現	「～ので」「～から」「～ため」「用事がある」「急病である」など
③ 疑問・相談関連	疑問・相談の形式を用いる表現	「～ませんか」「～ますか」「～でしょうか」など
④ 敬語・定型依頼関連	敬語や定型的な依頼表現	「～てください」「～くださる」「～ていただく」「お願いします」など
⑤ 受益型間接依頼	相手の行為を話し手が受ける形で表す依頼	「～ていただけますか」「～ていただきたい」「～てもらえますか」「～てくれませんか」など

一つの反応文が複数カテゴリーに該当する場合は重複して符号化した。たとえば「すみませんが、預かっていただけませんか」のような反応は、①「謝罪・恐縮／切り出し系」、③「疑問・相談関連」、④「敬語・定型依頼関連」、⑤「受益型間接依頼」に同時に該当する。⑤は③および④と構造的に重複しうるため、一つの反応文に含まれるカテゴリー数を算出する際には、①～④への該当数のみを用い、0～4 の範囲とした。

自動符号化の抽出精度を予備的に検証するため、調査年（3 時点）×場面（4 場面）の 12 層から各 10 反応文、計 120 反応文を抽出し、著者が人手で参照判定を行い、自動符号化結果と照合した。カテゴリー別の自動符号化の精度を示す F1 値は、①「謝罪・恐縮／切り出

し系」=.836、②「事情提示」=.781、③「疑問・相談関連」=.949、④「敬語・定型依頼関連」=.976、⑤「受益型間接依頼」=.991であった。③～⑤では高いF1値が得られた一方、①・②では切り出し表現および事情提示の見落としが認められた。そのため、①・②に関する分析結果については、自動符号化による抽出誤差の可能性を踏まえて慎重に解釈する。なお、「すみません」は、謝罪、恐縮、注目喚起、発話の切り出しなど複数の機能をもちうるが、現行の自動符号化ではこれらを区別していない。

3.3 統計分析

同一回答者が最大4場面に回答しているため、回答者IDをクラスタとする一般化推定方程式（GEE；作業相関構造はexchangeable型）を用いた。各カテゴリーの使用の有無にはロジスティックGEE、①～④のカテゴリー数には線形GEEを適用した。各モデルには調査年、性別、両者の交互作用、年齢、年齢二乗、場面、調査年×場面を含めた。各カテゴリーについて調査年×性別別の調整済み平均予測確率を、カテゴリー数について調整済み平均値を算出した。カテゴリー数の性別差の変化は、3時点全体の調査年×性別交互作用を2自由度Wald検定で評価した。個別カテゴリーでは、1953年と2008年の性別差の違いを主要対比とし、5カテゴリーのp値にHolm補正を適用した。併せて、両時点の調整済み使用率差（女性－男性）の違いを検定した。感度分析として、①「用紙受取」の除外、②15～69歳への限定、③第1次調査のプロパー群への限定、④学歴の追加調整を行った。学歴構成の変化は社会の実時間変化の一部と捉え、学歴は感度分析でのみ調整した。

4. 結果

4.1 各配慮方略の経年変化

年齢および場面の違いを調整し、さらに男女の人数構成の違いに結果が左右されないよう、男女が同じ割合で含まれると仮定して推定した。各カテゴリーの推定使用率を表2に示す。①「謝罪・恐縮／切り出し系」、②「事情提示」、③「疑問・相談関連」、⑤「受益型間接依頼」の推定使用率は後の調査時点ほど高かった。一方、④「敬語・定型依頼関連」の推定使用率は、後の調査時点ほど低かった。

表2 年齢・場面を調整した各配慮方略の推定使用率（％）

カテゴリー	1953年	1972年	2008年
①謝罪・恐縮／切り出し系	32.3	42.9	52.1
②事情提示	34.4	49.3	61.6
③疑問・相談関連	57.7	62.9	76.9
④敬語・定型依頼関連	68.6	63.6	53.5
⑤受益型間接依頼	31.5	39.2	51.3

注：各値は、年齢および場面の違いを統計的に調整し、男女が同じ割合で含まれると仮定してモデルから算出した推定値である。

4.2 使用カテゴリー数の変化

次に、一つの反応文に含まれる①～④の使用カテゴリー数について検討した。年齢・場面調整済みの平均使用カテゴリー数は、男性では1953年1.79、1972年2.05、2008年2.32であった。女性では、それぞれ2.07、2.32、2.58であった。男女とも、推定平均カテゴリー数は後の調査時点ほど大きかった。

女性－男性の差は、1953年では0.28、1972年では0.27、2008年では0.26であり、いずれの時点でもほぼ同程度で、女性のほうが男性より約0.3カテゴリー多かった。

3時点全体の調査年×性別交互作用は有意ではなかった（2自由度Wald検定、 $p=.954$ ）。したがって、使用カテゴリー数の性別差が経年的に変化したことを示す証拠は得られなかった。

4.3 個別カテゴリーにおける性別差

次に、それぞれの配慮方略について、1953年から2008年にかけて性別差が変化したかを検討した。その結果、1953年と2008年の調査年×性別の交互作用がHolm補正後も有意であったのは、④「敬語・定型依頼関連」のみであった。

オッズ比は、ある表現を使用する相対的な傾向を女性と男性で比較する指標である。④について女性対男性のオッズ比を比較すると、2008年のオッズ比を1953年のオッズ比で割った値は0.52であった（95%CI [0.34, 0.81]、Holm補正後 $p=.017$ ）。これは、女性と男性の相対的な使用傾向の差が、1953年より2008年のほうが小さかったことを示す。一方、モデルから推定した調整済み使用率の性別差は、1953年の12.6ポイントから2008年の7.6ポイントへ数値上縮小した。しかし、1953年と2008年の調整済み使用率差の変化について検定した結果、この差の変化は有意ではなかった（ $p=.176$ ）。オッズ比と調整済み使用率差は異なる尺度であるため、同じデータでも検定結果が一致しない場合がある。したがって、④では相対的な尺度で性別差の変化が認められたものの、調整済み使用率の絶対差が縮小したと断定できる結果ではなかった。他の4カテゴリーでは、1953年から2008年にかけて性別差が変化したことを示す十分な証拠は得られなかった。また、感度分析においても、④では主分析と同じ方向の結果が得られた。

5. 考察

5.1 依頼発話における配慮方略の変化

本研究では、④「敬語・定型依頼関連」を除く4カテゴリーで推定使用率が後の調査時点ほど高く、①～④の推定平均カテゴリー数も後の調査時点ほど大きかった。このことから、後の調査時点の依頼発話では、一つの反応文に含まれる配慮方略カテゴリー数が増加する傾向がみられた。ただし、①「謝罪・恐縮／切り出し系」と②「事情提示」は、予備的な抽出精度の検証において③～⑤よりFI値が低かったため、これらの経年変化については、自

動符号化による抽出誤差の可能性を踏まえて慎重に解釈する必要がある。各カテゴリーの変化を先行研究と照らし合わせると、②「事情提示」については、中西（2025）が状況説明表現の定型化を指摘している。ただし、対象場面や分析単位が異なるため、両者を直接対応づけることはできない。⑤「受益型間接依頼」の推定使用率が後の調査時点ほど高かったことは、井上・金・松田（2012）が示した「てもらう」「ていただく」を含む受惠表現の普及と方向として整合する。また、①「謝罪・恐縮／切り出し系」の変化は、丁（2016）が報告した「すみません」の定型化や「申し訳」系表現の増加と関連する可能性がある。ただし、本研究では下位形式を区別していないため、丁（2016）の結果との直接比較はできない。一方、④「敬語・定型依頼関連」の推定使用率は後の調査時点ほど低かった。ただし、④には敬語形式と定型的な依頼表現の双方が含まれるため、この結果を敬語形式そのものの減少と解釈することはできない。柳村（2014）が報告した発話全体の丁寧さの上昇と併せて考えると、岡崎敬語調査にみられる長期的変化は、敬語形式の単純な増加としてのみ捉えることはできず、依頼発話を構成する配慮方略の組み合わせや使用カテゴリー数の変化も含めて捉える必要がある。

本研究は、複数の依頼場面に共通するカテゴリーを同一基準で適用することにより、個別表現の増減だけでなく、一つの反応文に用いられる配慮方略カテゴリー数の経年変化を示した。この点は、発話全体の丁寧さを扱う研究と、個別表現・機能的要素の変化を扱う研究との間をつなぐ視点を提供する。以上から、岡崎敬語調査にみられる長期的変化では、依頼発話に用いられる個々の配慮方略が一様に増加したのではなく、カテゴリーごとに異なる変化が生じるとともに、一つの反応文に用いられる配慮方略カテゴリー数が増加していたことが示された。

5.2 性別差の経年変化

男女とも①～④の推定平均カテゴリー数は後の調査時点ほど大きかったが、その性別差が経年的に変化したことを示す証拠は得られなかった。女性の平均カテゴリー数は全時点を通して男性より約0.3カテゴリー多く、両者はほぼ平行した推移を示した。個別カテゴリーでは、調査年と性別の交互作用が有意であったのは④「敬語・定型依頼関連」のみであった。④では女性と男性の相対的な使用傾向に変化が認められたが、調整済み使用率の絶対差が縮小したとは断定できなかった。Matsuda（2012）は、敬語使用全体では性別を含む社会属性の影響が後の調査ほど弱まることを示している。これに対し、本研究のカテゴリー別分析では、1953年から2008年にかけて性別差の変化が統計的に確認されたのは④のみであった。このことから、敬語使用に対する性別の影響の弱まりが、個々の配慮方略に一様に現れるとは限らないことが示唆される。発話全体の丁寧さが上昇していても、それが必ずしも性別差の縮小を意味するわけではなく、どの方略にどのような変化が生じたのかを個別に検討する必要がある。柳村（2014）が指摘した男性の丁寧度上昇についても、本研究のカテゴリー別の結果に照らせば、それを男性の使用傾向が女性に一方向的に近づいた結果として

のみ説明することはできない。本研究の結果は、丁寧度の経年変化と性別差の経年変化を区別して考える必要があることを示している。すなわち、全体として丁寧度が上昇した場合でも、丁寧さの経年変化と性別差の経年変化は、必ずしも同じ方向に進むとは限らない。

6. 本研究の限界と今後の課題

本研究には三つの限界がある。第一に、①・②のFI値は相対的に低く、抽出誤差の影響を考慮する必要がある。第二に、想定相手が男性である4場面のみを対象としているため、他の相手属性・依頼場面への一般化には慎重である必要がある。第三に、本研究は横断データに基づくため、個人内変化を直接示すものではない。今後は対象場면을拡大するとともに、抽出規則の改善と再符号化による再検証が必要である。

7. 結論

本研究では、依頼発話における配慮方略の使用と性別差の経年変化を検討した。その結果、発話全体の丁寧さの上昇は性別差の単純な縮小として捉えることはできず、依頼発話ではカテゴリーごとに異なる変化が生じるとともに、一つの反応文に含まれる配慮方略カテゴリー数が後の調査時点ほど多くなることが示された。

参考文献

- 井上史雄・金順任・松田謙次郎（2012）「岡崎 100 年間の『ていただく』増加傾向—受惠表現にみる敬語の民主化—」『国立国語研究所論集』4, 1-25.
- 熊谷智子・篠崎晃一（2006）「依頼場面での働きかけ方における世代差・地域差」国立国語研究所編『言語行動における「配慮」の諸相』, 19-54, くろしお出版.
- 国立国語研究所（2016）『岡崎敬語調査データベース』ver. 1.0.
- 丁美貞（2016）「岡崎敬語調査での機能的要素の経年変化について—『荷物預け』場面の対人配慮を中心に—」『国立国語研究所論集』10, 41-54.
- 中西太郎（2025）「岡崎敬語調査に見る言語行動の経年変化—状況説明表現の定型化の観点から—」『計量国語学』34(8), 547-562.
- 柳村裕（2014）「ことばの丁寧さの経年変化と社会的要因—岡崎敬語調査から—」『国立国語研究所論集』8, 177-196.
- Matsuda, Kenjiro (2012) "What Happened to the Honorifics in a Local Japanese Dialect in 55 years: A Report from the Okazaki Survey on Honorifics." University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics, 18(2), 49-57.

文数の傾向から見た中古和文資料

いずみ さ き
泉 沙希（筑波大学大学院生）

1. はじめに

1.1 本発表の目的

『日本語歴史コーパス』(以下 CHJ) の「語彙統計」(バージョン 2017.3) には、収録資料の「文数」が示されている。しかし、「語彙統計」が示す「文数」には後述するように問題があり、中古和文資料の文数の傾向について検討する余地が残されている。そこで、本発表では、中古和文資料を対象に、『CHJ 平安時代編 I 仮名文学』(バージョン 2023.3) における文末の認定を精緻化し、歌・地の文・会話文・消息文・心内文という 5 種類の文の種類を認定した上で、文数調査を実施し、文の種類や文末形式に基づいた資料間の差異について実証的に検討することを目的とする。

1.2 先行研究が示す文数と CHJ「語彙統計」(バージョン 2017.3) が示す文数

本項では、『源氏物語』の地の文・会話文・消息文を例に、先行研究が示す文数と CHJ の「語彙統計」(バージョン 2017.3) が示す文数を比較する。

まず、『新編日本古典文学全集』に基づいて文末数を調査した北川 (2009) は、『源氏物語』の地の文が 10798 文、会話文 (消息文を含む) が 8105 文であるとしている¹。

一方、CHJ の「語彙統計」が示す『源氏物語』の「文数」は表 1 のようになる²。基本的に、表 1 に見られる CHJ の「本文種別」において、会話文と消息文は「会話」「会話-発話引用」「手紙」、地の文は「(空白)」つまり CHJ の検索結果の「本文種別」が空白になっている分類に含まれていると考えられる。

以上を踏まえ、北川 (2009) が示す文数と表 1 が示す文数を比較する。表 1 では地の文が 9989 文、会話文と消息文が合わせて 5830 文であり、北川 (2009) が示す文数と比べて、地の文の文数では 809 文、会話文と消息文を合わせた文数では 2275 文少ない。従って、CHJ の「語彙統計」が示す「文数」が実際の文数を示しているとは言い難いと考えられる。

表 1 CHJ における「文数」

源氏物語	
CHJ「本文種別」	「文数」
歌	794
会話	5690
会話-発話引用	33
手紙	107
(空白)	9989
計	16613

¹ 北川 (2009) は、基本的に『新編日本古典文学全集』の「」に囲まれている部分を会話文とした上で、和歌と明らかな引用の言葉 (念仏や吟詠・古歌の引用等) を除いて集計している。また、「消息は「書かれたもの」ではあるが、会話の延長的な場合も多く、全体の量も多くはないということから、この稿では会話文として扱っている。」(北川 2009:89) と述べており、会話文の文数に消息文の文数が含まれている。

² 表 1 の「文数」は、「語彙統計」(バージョン 2017.3) (国立国語研究所 a) における「延べ・異なり語数 (ジャンル・作品名・成立年・巻名等・部・本文種別・コアフラグ別)」による (短単位・長単位で同じ文数)。

2. 文数の調査方法

本節では、『CHJ 平安時代編 I 仮名文学』を用いた文数の調査方法について述べる。第 1 項、第 2 項において CHJ の文末の認定を精緻化し、第 3 項において各文末の文の種類を認定する。

2.1 『CHJ 平安時代編 I 仮名文学』における検索方法

本発表の調査では、CHJ の検索結果のキーに文末の情報を与える。15 の散文資料を対象に³、各資料において (1) の検索を行い、文末の可能性のある用例を網羅的に収集する。

(1) 検索対象：本文種別「会話」／「手紙」／「地の文ほか」

a. キー：文末から 2 語 書字形出現形が「%」

b. キー：書字形出現形が「%」 後方共起 1 キーから 1 語：書字形出現形が「[]」>≫」

検索対象：本文種別「歌」

c. キー：文末から 1 語 書字形出現形が「%」

「%」は「0 個以上の文字で構成される任意の文字列」、「[]」は「指定した範囲（たとえば[a-f]）またはセット（たとえば [abcdef]）内の任意の 1 文字」を指定するワイルドカードである（国立国語研究所 c）。つまり、(1) では、『CHJ 平安時代編 I 仮名文学』における「会話」「手紙」「地の文ほか」「歌」という検索対象の「本文種別」ごとに、文末から 2 語または 1 語の位置にあるすべての語⁴、および、「[]」>≫”のいずれかが後接するすべての語⁵を検索することになる。

2.2 調査対象から除く用例

(1) に示した検索方法で得られた検索結果のうち、(2)、(4)、(5) の 3 つのタイプの用例は、調査対象から除く必要がある⁶。まず、(2) のような用例を調査対象から除く必要がある。

³ 『竹取物語』『伊勢物語』『土佐日記』『大和物語』『平中物語』『蜻蛉日記』『落窪物語』『枕草子』『源氏物語』『和泉式部日記』『紫式部日記』『堤中納言物語』『更級日記』『大鏡』『讃岐典侍日記』である。本発表では、散文資料における地の文、会話文を中心に文数の傾向を調査するため、『古今和歌集』は扱わない。

⁴ 「本文種別」が「歌」の場合に「文末から 1 語」で検索するのに対し、その他の場合に「文末から 2 語」で検索するのは、歌の場合には (i) の二重下線部のように、文末から 1 語の位置に文末の語があることが多いのに対し、歌以外の場合には (i) の一重下線部のように、文末から 2 語の位置に文末の語、文末から 1 語の位置に記号があることが想定されるためである。以下、用例では、短単位の検索結果における「文脈中の区切り記号」() や「文脈中の文区切り記号」(#) を付す。

(i) #足ずり|を|し|て|泣け|ども|かひなし。

#白玉|か|何|ぞ|と|人|の|問ひ|し|時|つゆ|と|こたへ|て|消え|な|まし|もの|を| # (伊勢物語)

⁵ (1b) の検索を行うのは、『CHJ 平安時代編 I 仮名文学』では、閉じ括弧の直前が文末として認定されていない場合が多く、(1a) では (ii) の波線部のような閉じ括弧の直前の文末が検索されないためである。

(ii) #翁、|「|嬉しく|も|のたまふ|もの|かな」|と|いふ。 # (竹取物語)

第 1 節第 2 項で見たように、北川 (2009) が示す文数と CHJ の「語彙統計」(バージョン 2017.3) が示す文数において、特に後者の会話文と消息文の文数が少ない背景には、(ii) のような文末が後者の文数に集計されていないことが可能性として考えられる。なお、山括弧、二重山括弧は、『新編日本古典文学全集』の『落窪物語』において心内文であることを示すために用いられている。(1b) の閉じ括弧の種類は、『CHJ 平安時代編 I 仮名文学』の底本である『新編日本古典文学全集』の各資料の凡例を踏まえて定めている。

⁶ 本項の用例では、着目している検索結果のキーに網かけを施す。

(2) キーが閉じ括弧である用例

- a. # (略) |『| (略) #人|の|御|恨み|も|ある|まじ|』|と|いふ|。# (竹取物語)
- b. #大伴|の|大|納言|に|は|、|「| (略) #それ|を|取り|て|賜へ|」|。# (竹取物語)
- c. #<| (略) #誰|に|借ら|まし|>|。# (落窪物語)

(2a) は、閉じ括弧が連続しており、(1b) の検索により、文末「まじ」と、その直後の閉じ括弧の両方が検索結果のキーに含まれる。また、(2b)、(2c) は、文末から 2 語の位置に閉じ括弧があり、(1b) で文末「賜へ」「まし」が、(1a) で続く閉じ括弧が検索結果のキーに含まれる。(2a)、(2b)、(2c) のような場合に、同一の文を重複して集計することを避けるため、キーが閉じ括弧である用例を調査対象から除き、「まじ」「賜へ」「まし」のようなキーが閉じ括弧の直前の文末である用例を調査対象とする。ただし、「本文種別」が「歌」の場合は (1c) の検索のみを行っているため、(3) のように歌に閉じ括弧が続く場合には、文末から 1 語の位置にある閉じ括弧のみが検索結果のキーに含まれ、文数を数える上で重複が生じないため、集計する必要がある。

(3) # (略) |内侍|、|「|御|心|も|て|ある|こと|に|こそ|は|あ|なれ|。#大幣|に|なり|ぬる|人|の|悲|しき|は|よる|せ|と|も|なく|しか|ぞ|なく|なる|」| #と|なむ|いひ|やり|ける|。# (大和物語)

従って、「本文種別」が「歌」で、キーが歌に続く閉じ括弧である用例は、調査対象に含める。

続いて、(4) のような用例を調査対象から除く必要がある。

(4) 閉じ括弧の直前のキーが文末とは言い難い用例

- # (略) |これ|を|聞き|て|ぞ|、|と|げ|なき|もの|を|ば|、|「|あへなし|」|と|いひ|ける|。# (竹取物語)

文というより語句を強調するために括弧が用いられている (4) のような用例は調査対象から除く。このような用例は、「本文種別」が「地の文ほか」の検索結果に見られることが多いため、「本文種別」が「地の文ほか」の (1b) の検索結果を確認し、文末とは言い難い用例を除外する。

さらに、(5) のような用例を調査対象から除く必要がある。

(5) 読点が後接するキーが文末とは言い難い用例

- # (略) |いささか|け近き|遊び|など|し|て|、#身|の|うみ|の|思ひ|なぐ|間|は|今宵|かな|うら|に|立つ|浪|うち|忘れ|つつ#と|あり|。# (平中物語)

『CHJ 平安時代編 I 仮名文学』では、地の文中に歌が引用される (5) など、「本文種別」が切り替わる箇所に「文脈中の文区切り記号」(#) が用いられている場合がある。従って、(5) では、(1a) により、文末の「あり」のみならず、文末ではない「て」も検索結果のキーに含まれる。このような場合には、(5) の「て」のように文末から除くべきキーに読点が後接しているため、キーに読点が後接する用例の中で、キーが文末とは言い難い用例を調査対象から除外する。

2.3 CHJ (バージョン 2023.3) における検索結果の「本文種別」の整理

本項では、第 2 節第 1 項、第 2 項で収集した文末に見られる CHJ の「本文種別」を整理して、

各文末の文の種類を認定する。『CHJ 平安時代編 I 仮名文学』（バージョン 2023.3）における検索結果の「本文種別」は、「旧本文種別/新本文種別」の形で表示され⁷（国立国語研究所 d）、分類が細かくなっている。そこで、本項では、CHJ の検索結果の「本文種別」を、歌・地の文・会話文・消息文・心内文の 5 種類の文の種類に整理する。各資料について整理した 5 種類の文の種類と、CHJ の検索結果の「本文種別」の対応は（6）のようになる。

- （6） 歌：全資料⁸「歌/会話」「歌/手紙」「歌/心内文」
地の文：全資料「（空白）」、『大和物語』「手紙/会話⁹」
会話文：全資料「会話/会話」「会話-発話引用/会話」、『落窪物語』「会話/心内文¹⁰」，
『大鏡』以外の資料¹¹「会話-発話引用/手紙」「会話-発話引用/心内文」
消息文：全資料¹²「会話/手紙」「手紙/手紙」、『大鏡』「会話-発話引用/手紙」
心内文：全資料「会話/心内文」、『落窪物語¹³』「/会話」「/心内文」「会話/会話」「会話
/手紙」「会話-発話引用/会話」「（空白）」、『大鏡』「会話-発話引用/心内文」

3. 調査結果

調査の結果、各資料における文の種類ごとの文数と割合は表 2 のようになる。

第 1 節第 2 項で見た北川（2009）では、『源氏物語』の地の文は 10798 文、会話文と消息文は合わせて 8105 文とされていた。本発表の『源氏物語』の調査では、地の文が 11037 文、会話文と消息文が合わせて 8176 文であり、北川（2009）との差異が地の文で 239 文、会話文と消息文を合わせて 71 文である。一方、第 1 節第 2 項で見たように、北川（2009）と CHJ の「語彙統計」（バージョン 2017.3）との差異は、地の文で 809 文、会話文と消息文を合わせて 2275 文である。従って、本発表の調査結果は、CHJ の「語彙統計」と比べて文数の精度が高いと考えられる。

⁷ 『CHJ 平安時代編 I 仮名文学』には、バージョン 2022.10 以降、話者を特定するための「話者情報」および性質を異にする本文を区別するための「本文種別」の情報が付与されている（国立国語研究所 b, d）。この「本文種別」の追加について、竹内ほか（2022:22）は、「従来の『CHJ 平安時代編 I 仮名文学』データには、テキストの役割に基づいて分類された「本文種別」というタグがあり、テキストを「和歌」「会話」「手紙」「地の文」の 4 種類に分類していた。今回のアップデートではテキストの役割ではなく、「登場人物によってどのように表出されたことばなのか」という点に焦点をあて、登場人物のことばに分類されたテキストを「会話」「心内文」「手紙」の 3 種類に分類した。「会話」は声に出して表出したことば、「心内文」は心で思ったことば、「手紙」は書きしたためたことばである」と述べている。表 1 に示した CHJ（バージョン 2017.3）における「本文種別」は、CHJ（バージョン 2022.10）以降の「旧本文種別」に対応している。

⁸ 基本的に「歌/会話」は声に出された歌、「歌/手紙」は書かれた歌、「歌/心内文」は心で詠まれた歌である。

⁹ 『大和物語』には、字下げの地の文と考えられる文が「手紙/会話」となっている場合がある。

¹⁰ 『落窪物語』には、山括弧内で引用される会話文が「会話/心内文」となっている場合がある。

¹¹ 「会話-発話引用/手紙」、「会話-発話引用/心内文」は、『大鏡』では鉤括弧で引用され、「書く」「思ふ」などの語が続く消息文や心内文が多いが、『大鏡』以外の資料では二重鉤括弧で引用される会話文が多い。

¹² 基本的に「会話/手紙」は鉤括弧で示される消息文、「手紙/手紙」は字下げで示される消息文である。

¹³ 『新編日本古典文学全集』の『落窪物語』において山括弧、二重山括弧で示される心内文の多くは「/心内文」であるが、文末のキーの直後に山括弧、二重山括弧が続く場合にはその他の「本文種別」の場合もあるため、「/心内文」に加え、文末のキーに山括弧、二重山括弧が続く用例も心内文に含めている。

表 2 各資料における文の種類ごとの文数と割合

		歌	地の文	会話文	消息文	心内文	計
作り物語	竹取	15 (2%)	317 (42%)	389 (52%)	26 (3%)	5 (1%)	752 (100%)
	落窪	82 (2%)	1382 (26%)	2642 (51%)	261 (5%)	854 (16%)	5221 (100%)
	源氏	828 (4%)	11037 (55%)	7846 (39%)	330 (2%)	25 (0%)	20066 (100%)
	堤	51 (5%)	414 (39%)	512 (49%)	1 (0%)	77 (7%)	1055 (100%)
	小計	976 (4%)	13150 (49%)	11389 (42%)	618 (2%)	961 (4%)	27094 (100%)
歴史物語	大鏡	89 (2%)	83 (2%)	3457 (94%)	6 (0%)	59 (2%)	3694 (100%)
歌物語	伊勢	235 (26%)	593 (66%)	63 (7%)	6 (1%)	0 (0%)	897 (100%)
	大和	297 (19%)	929 (60%)	313 (20%)	0 (0%)	1 (0%)	1540 (100%)
	平中	154 (19%)	373 (47%)	264 (33%)	0 (0%)	0 (0%)	791 (100%)
	小計	686 (21%)	1895 (59%)	640 (20%)	6 (0%)	1 (0%)	3228 (100%)
日記	土佐	61 (10%)	455 (78%)	66 (11%)	0 (0%)	4 (1%)	586 (100%)
	蜻蛉	319 (10%)	1661 (53%)	851 (27%)	296 (9%)	1 (0%)	3128 (100%)
	和泉	154 (20%)	267 (35%)	178 (24%)	89 (12%)	67 (9%)	755 (100%)
	紫	18 (2%)	761 (85%)	108 (12%)	4 (0%)	0 (0%)	891 (100%)
	更級	89 (14%)	365 (56%)	182 (28%)	7 (1%)	6 (1%)	649 (100%)
	讃岐	23 (3%)	419 (50%)	379 (45%)	9 (1%)	14 (2%)	844 (100%)
	小計	664 (10%)	3928 (57%)	1764 (26%)	405 (6%)	92 (1%)	6853 (100%)
随筆	枕	42 (1%)	3130 (65%)	1537 (32%)	58 (1%)	63 (1%)	4830 (100%)

3.1 ジャンルごとの地の文と会話文

本項では、ジャンルごとの地の文と会話文に着目し、文数の多寡について傾向を観察する。表 2 では、各資料における最も文数が多い文の種類に網かけを施している。表 2 を見ると、15 資料のうち、『竹取物語』『落窪物語』『堤中納言物語』『大鏡』の 4 資料では会話文の文数が最も多く、その他の資料では地の文の文数が最も多い。1 資料のみである歴史物語、随筆については文数の傾向を把握し難いが、表 2 を踏まえると、作り物語では会話文の文数が最も多い傾向があり、歌物語や日記では地の文の文数が最も多い傾向があると考えられる。

3.2 ジャンルごとの地の文に占める終止形終止の割合

本項では、活用語以外による終止も含む地の文全体に占める終止形終止（終止形・連体形同形を含む）の割合に着目する。各資料の地の文に占める終止形終止の割合は表 3 のようになる。

表 3 各資料の地の文に占める終止形終止の割合

	作り物語					歴史 物語	歌物語				日記							随筆
	竹取	落窪	源氏	堤	平均	大鏡	伊勢	大和	平中	平均	土佐	蜻蛉	和泉	紫	更級	讃岐	平均	枕
割合	92%	89%	85%	67%	83%	58%	60%	53%	52%	55%	63%	76%	77%	70%	76%	72%	72%	43%

まず、物語の地の文に占める終止形終止の割合に着目する。表 3 を見ると、作り物語である 4 資料中『竹取物語』『落窪物語』『源氏物語』の 3 資料では 8～9 割程度と比較的高い割合を占め

る一方、歌物語の全資料では5～6割程度と比較的低い割合を占めている。従って、物語の中でも、作り物語と歌物語では異なる傾向が見られると言える¹⁴。

次に、日記の地の文に占める終止形終止の割合に着目する。表3を見ると、日記の全資料において6～7割程度の割合を占めており、歌物語と作り物語の中間的な傾向が見られる。

1 資料のみである歴史物語と随筆については傾向を把握し難いが、以上の調査結果より、地の文に占める終止形終止（終止形・連体形同形を含む）の割合に着目すると、作り物語、歌物語、日記といったジャンルによって異なる傾向が見られると言える¹⁵。

4. おわりに

本発表では、『CHJ 平安時代編 I 仮名文学』を用いて中古和文資料の文数調査を実施し、文の種類や文末形式に基づいた資料間の差異について実証的に検討し、以下の2点を指摘した。

- (A) 作り物語では会話文の文数が最も多い傾向があり、歌物語や日記では地の文の文数が最も多い傾向がある。
- (B) 地の文に占める終止形終止（終止形・連体形同形を含む）の割合に着目すると、作り物語、歌物語、日記といったジャンルによって異なる傾向が見られる。

大川（2019）は、「会話文率」が「文体対立」を考察する際に有効な指標の1つとなることを指摘しているが、本発表の調査結果を踏まえると、中古和文資料において、地の文の文数や文末形式の割合の差異も、資料のジャンル間の差異を反映している可能性がある。今後は、CHJ 未収録の中古和文資料や、中世以降の資料の文数調査を行うことで、文の種類・資料のジャンルと、文数の傾向・文末形式の分布との関係史についてより詳細に明らかにすることが期待される。

【参考文献】大川孔明（2019）「平安鎌倉時代の文学作品の文体類型—多変量解析を用いて—」『計量国語学』31（8），555-571，計量国語学会／北川真理（2009）『源氏物語』の文末表現—新編日本古典文学全集『源氏物語』の地の文と会話文の文末の違い—『物語研究』（9），87-102，物語研究会／国立国語研究所 a「語彙統計：バージョン 2017.3」日本語歴史コーパス（CHJ），<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/201703.html>／国立国語研究所 b「更新履歴」日本語歴史コーパス（CHJ），<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/update.html>／国立国語研究所 c「中納言マニュアル：検索条件指定」国語研コーパスポータル，<https://clrd.ninjal.ac.jp/chu-02.html>／国立国語研究所 d『日本語歴史コーパス 平安時代編 I 仮名文学』新しい話者情報について <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/doc/speaker-heian-202303.pdf>／竹内綾乃・中村壮範・小木曾智信（2022）「中古仮名文学作品のコーパスに対する話者情報の付与とその活用例」『じんもんこん 2022 論文集』21-26，情報処理学会／吉田茂晃（2001）「文末用言の活用形について」『山邊道』（45），1-16，天理大学国語国文学会
※URL はすべて 2026 年 9 月 17 日確認。

【調査資料】竹取物語・伊勢物語・土佐日記・大和物語・平中物語・蜻蛉日記・落窪物語・枕草子・源氏物語・和泉式部日記・紫式部日記・堤中納言物語・更級日記・大鏡・讃岐典侍日記：『新編日本古典文学全集』（小学館）
※用例の収集には、国立国語研究所（2023）『日本語歴史コーパス平安時代編 I 仮名文学』（バージョン 2023.3）<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/heian.html#kanabungaku>（コーパス検索アプリケーション「中納言」（バージョン 2.7.2）を利用）（2026 年 9 月 17 日確認）を使用。

¹⁴『堤中納言物語』の地の文に占める終止形終止の割合が他の作り物語と比べて低い背景について、当該資料の特徴であるのか中古後期以降の作り物語の地の文の特徴であるのか検討の余地がある。

¹⁵終止形と連体形が異形の〈弱活用動詞〉〈存在詞「あり」〉〈形容詞〉の実態を調査した吉田（2001）も、地の文の終止形終止の比率が『大鏡』『枕草子』→日記→作り物語の順で高くなることを指摘している。

日本語学会 2026 年度秋季大会 シンポジウム

独り言（独話）の言語学

パネリスト

もりやまたくろう
森山卓郎（早稲田大学）

の だ は る み
野田春美（神戸学院大学）

やまおかまさき
山岡政紀（創価大学）

やまぐちほるひこ
山口治彦（神戸市外国語大学）

企画・司会

たむらさなえ
田村早苗（北星学園大学）

ゆきまつはなえ
幸松英恵（東京外国語大学）

趣旨

我々が言語について考える際、典型的に想定されるのは、話し手と聞き手とのあいだで情報や意図が伝達される場面である。しかし、言語が用いられるのは他者への伝達のためだけではない。何かに気づいたとき、感情が湧き上がったとき、自分自身を励ましたり戒めたりするとき、考えを整理するとき、私たちはことばを自分自身に向ける。声に出される独り言だけでなく、心内で展開されることば、他者との会話のなかに入り込む独り言のような発話（疑似独話）、さらには SNS 等に見られる、他者に開かれながらも独り言の形式をとる「つぶやき」など、独り言的な言語使用は、私たちの日常のさまざまな場面に見られる。

一方で、日本語研究において、独り言が独立した研究対象として十分に整理されてきたとは言いがたい。そもそも何を独り言と捉えるのか、対話との境界をどのように考えるのか、また独り言を分析する際にどのような観点が有効なのかといった基本的な論点には、なお検討の余地がある。独り言を正面から取り上げることは、日本語の形式や機能、聞き手との関係、思考と伝達のあり方を考えるうえで、新たな視点をもたらす可能性がある。

本シンポジウムでは、4 名のパネリストが異なる観点からこの問題に取り組む。各発表は、独り言の成立条件、対話との境界、発話機能上の位置づけ、個別形式の分析という、異なる水準から独り言を照らすものである。それぞれの観点は独立しつつも相互に関係している。独り言の成立条件を考えれば「伝達とは何か」が問題となり、対話との境界を考えれば、その境界が必ずしも明確ではないことが問題となる。独り言の発話機能を位置づけようとすると、形式と機能の対応が問い直され、個別形式を具体的に分析すると、その分析結果が再び「独り言とは何か」という一般的な問いに接続する。

したがって、本シンポジウムの目的は、独り言を一つの等質的なカテゴリーとして定義し、その特徴を列挙することではない。むしろ、異なる分析対象と理論的視点から独り言を検討することによって、何をもって独り言と捉えるのか、独り言と対話はどのような関係にあるのか、そして独り言を分析対象として正面から取り上げることで、日本語の形式と機能について何が新たに見えてくるのかを考えることにある。

従来、周辺のあるいは例外的なものとして扱われがちであった独り言を日本語研究の正面に置くことで、対話を暗黙の標準としてきた言語記述を相対化し、文成立、モダリティ、発話機能、談話、文体、個別形式の意味といった諸問題を捉え直すことができるのではないか。4名の報告と討論を通して、独り言研究そのものの論点を整理するとともに、独り言に着目することが、今後の日本語研究にどのような新たな問いをもたらしうるのかを探りたい。

構成

13:30-13:35 趣旨説明・登壇者紹介

13:35-14:00 森山卓郎 「思考と伝達 ー独り言論の展開」

14:00-14:25 野田春美 「疑似独話の疑似性をめぐって」

14:25-14:50 山岡政紀 「発話機能論から見た「独話」——独話的疑問表現を中心に」

14:50-15:15 山口治彦 「「と」と独り言ー自分のディスコースに独り言を取り込む
ことについてー」

15:15-15:30 休憩・質問回収

15:30-16:30 全体討論・質疑応答

質問回収

本シンポジウムではフォームで質問を回収します。以下のQRコードを読み込み、シンポジウム中に質問をお寄せください。



思考と伝達 ―独り言論の展開

森山卓郎 (早稲田大学)

1 はじめに：「独り言不能文（伝達文）」と「独り言文」の存在——森山（1997）

1-1 思考の言語と伝達の言語：「思考の展開」論

森山（1997）：「独り言不能文（伝達文）」：独り言で言うとは不自然な文（モダリティとしてのあり方）の存在。

(1)*（独り言で）私は帰る。 Cf 私は帰ろう。

(2)*（独り言で）もうすぐ彼は着くと思う。 Cf もうすぐ彼は着く。

(3)*（独り言で）彼が来たそうだ。（これだけで終わると変）

・「思考が言語的なコードを通じて進む以上、独立した「判断」を表す文も、そうした「思考の展開」を何らかの意味で反映したものでなければならない」（森山 1997：p176）

・「内容的に話し手にとって自明のことであり、思考・認識において何の変化も伴わないもの」は話し手の思考としては意味はないが、自明のことであっても「それを他者の情報主体（つまり聞き手）に伝えるということにおいて意味がある。」（同：p177）

確定的意志：～する、～するつもりだ

内的な活動そのもの（文末思考動詞による思考作用）：～と思う、～と考える

伝聞：～という、～（だ）そうだ

・ここでの「自明性」とは認識としての自明性。絶対的対聞き手表現（挨拶）や遂行文条件「#正直に話すことをここに誓う」、形式的には対聞き手的表現を含む文もある。

1-2 独り言で言えるということ：独り言化を可能とする文末形式

(4)がんばるぞ。 がんばる。

・「ぞ、わ、さ」「なあ」：独り言で言えなかった文でもこれらが付加すると言いやしくなる。これらの終助詞は、現場での思考の展開であることを明示する。

(5)今日はいい天気だなあ。（先生の目前でも言える） cf いい天気だφ：失礼

・「表出化」：「なあ」の付加によって、「聞き手目当ての表現」となり得るものが「自分目当て」となる。→依頼の意味が無効化（森山 1988:p254）

語用論的な転用としても、「自分目当て」なら依頼としての対聞き手的意味が消失。

(6)どうか、君に行ってもらいたい。

(7)??どうか、君に行ってもらいたいなあ。 →表出

1-3 その後の展開

・西光（2010）：英語では独り言はあまり言わない。聞き手目当てのモダリティがある言語ではそれを落とすことで聞き手目当てにならないので、独り言がいいやすい。そうでない言語では聞き手目当て的に聞かれる可能性があり、独り言は言いにくい。

・形式論的な陳述論の再検討という観点も重要。

(8) [[内容] 内容めあて] 聞き手めあて] (仁田 1980)

→意味・機能を考えた新たなモダリティ論へ。「内容」的に「聞き手」が必要な文。「脱聞き手化」する終助詞類もある。

終助詞におけるイントネーションにも関与「参ったよ H/L」

2 独り言論からのさらなる発展・展開 ―設定される問題群

2-1 独り言の言語差・文化差 →3

・森山(1997)は独り言不能文と独り言文の両方について検討。

・独り言について、言語差や個人差はどの程度あるのか。

2-2 独り言の定義と独り言文の下位類 →4

・独り言をどう定義するか、どういったタイプの文があるのか。

(9)雨が降らないかな～。 聞き手がいても独り言的に言える。

・命令文でも独り言はあり得る。

(10)I say, がんばれ私! (西野カナ “Have a nice day”)

(11)はやく病気がなおりますように。 神仏への祈願

2-3 独り言文の運用：日本語における独り言的コミュニケーション →5

・独り言的に言うことでの伝達→コミュニケーション上の効果とは

・ポライトネス論の“off-record”などの再検討

2-4 文体としての独り言的テキストの利用 →6

・文体としての問題：小説の心内語、日記の文体、漫画の吹き出しなど。

・心内語のあり方：心内語か発話かという問題など。

3 独り言の言語差・文化差・日本語での形式的背景

3-1 独り言と発話動詞など

・日本語での独り言の動詞：ひとりごつ、つぶやく cf「ささやく」

日本語での独り言の副詞：ぼそっと（ぼそり） 伝達を意識しない発話

少なくとも日本語では「独り言」は重要な発話の一タイプ。

3-2 他の言語ではどうか

・英語にも mutter などの動詞があり、自分目当ての発話と見られる例もある。

(12)' Eh, has that turned up again?' Ruth had heard her mutter.' It'll be that lad, hunting through Jake's stuff the way (略) BNC

(13)I watched Jean-Claude pack the money into his inside pocket. Then I heard him mutter to himself:' Avare comme tous les juifs'. (略) BNC

頻度や位置づけはおそらく言語によっても違うほか、人による違いもある。単純に独り言が多い言語かどうかを言語類型論的に規定することは難しいのではないか。

(14) タクシーの順番待ちで財布忘れに気づいて「財布を忘れた」とつぶやきながら列を離れる：「これが中国人にとってとくに気持ち悪いらしい。こんな場合、大半の中国人はだまって立ち去るという。」(中川 2005 : p17)

(15) “我忘了錢包！” →言えるという内省。

・「見られている私」はある。独り言利用型のコミュニケーションはあり得る。個人差も大きい。独り言を言うかどうかの頻度の実証的調査→今後の課題（ここでは触れない）。

(16) 「察し」との関わり：日本語（日本文化的やりとり）においてお互いの察し合いが重要な働き。とすれば、正統的聞き手として扱わなくても、相手は観察して、文脈に位置づけようとしてくれることは期待できる。

→言語的慣習による「独り言的コミュニケーション」は検討の価値がある。

3-3 聞き手との関係の調整

・NVC や声、日本語では文末形式（終助詞など）により、聞き手との関係づけに繊細な調整が可能。それによる実質的なコミュニケーションが指摘できる。

(17) しんちゃん（父と竹馬づくりで竹を切る場面）「すごーい　とうちゃんのこぎりのあつかい　じょうずー」「いやいや」

しんちゃん（ぼそ）「女房のあつかいもこれくらいできるといいのに」

ヒロシ「何か言ったか今・・・」（怒った顔）（『クレヨンしんちゃんアンコール』双葉社 2016 p 38）　しんのすけが後ろ向きで「ぼそ」と言ういいさし文

(17)では独り言として解釈：NVC と独り言的発話ながら、伝達そのものはなされている。

4 独り言文の下位タイプ

4-1 基本的定義と独り言のタイプ

・「内面化タイプの独り言」と「外面化タイプの独り言」（自分の分身の構築）

・創造的テキストでは独り言に特別な機能がある（「演劇的・小説語的独り言」）：テキストでの「独り言」の利用にも注意が必要。音声化の有無もある：「音声化された独り言」と「音声化されていない心内語的独り言」

4-2 内面化タイプ（本当の意味での独り言）

・独り言としての未分化的な感動詞など。→情動的感動詞（森山：1996）

(18) わっ！あちゃ～！こぼしちゃった！（キーボードにコーヒーをこぼした時）

心内語として複雑な内容の発話もある。

・次は心内語として展開する例。

(19) 身体疲労すれば、精神も共にやられる。もう、どうでもいいという、勇者に不似合いな不貞腐れた根性が、心の隅に巣喰った。私は、これほど努力したのだ。約束を破る心は、みじんも無かった。神も照覧、私は精一ぱいに努めて来たのだ。

（略）（太宰治『走れメロス』）

「私」としての一人称スタンス。命令文のようなモダリティも観察される。

(20)I say, がんばれ私！ 「がんばれ私」(西野カナ “Have a nice day”)

・話しかけ・呼びかけを含む心内語：仮構的な「聞き手」

(21) (リチャード卿) なるほど…三世自身はかくれみので、執事の方が、MC130 のボスだったのか！…さすがだなゴルゴ 13! (「スタインベック三世」『ゴルゴ 13』68 平成 12 年リイド社) 絵では一人で発話。

4-3 外面化タイプ もう一人の「自分」への語りかけ

(22)天を仰いで、くやし泣きに泣き出した。ああ、あ、濁流を泳ぎ切り、山賊を三人も撃ち倒し韋駄天、ここまで突破して来たメロスよ。(略) おまえは、稀代の不信の人間、まさしく王の思う壺だぞ、と自分を叱ってみるのだが、全身萎えて、もはや芋虫ほどにも前進かなわぬ。(太宰治『走れメロス』)

・二人称「おまえ」としての言及。自分への呼びかけ「メロスよ」。鏡の我を見るような形。
・独り言における仮構的対話空間構築：もう一人の自分を仮構してそれに対して発話するという仮構的世界であれば、「彼は来ると思う。」のようなものも言えるか
→独り言空間から「外面化したもう一人の自分」への対話空間への接近
・事態選択形式における人称制限における例外にもなる。

(23)「??私は明日早く起きた方がいい」(自分を主語として言うとは不自然。森山 1998)しかし、事実上の「私」が「おまえ」として分裂しているのであればこれは可能。

(24) (鏡をみながら自分に対して)「あなたは明日早く起きた方がいい」

4-4 典型的独り言としての内面化と対者

・対面的環境でも独り言化：独り言的コミュニケーション。呼びかけ語の機能は特に重要。文体論的效果、言語差なども検討の余地がある。

・「対者」認定の問題：現代語の対神仏の祈願の「～ますように」。対者は神仏。：「～ますように守らせたまえ」が元なので丁寧語が入るが事実上は独り言化(森山 2014)。

(25)「なむ拳道第一ねらひさま、何とぞ私が勝まして、蛸助に蕎麦を奢らせますやうにまもらせ給へ。」(『浮世床』古典全集 p 353)

5 日本語における独り言的コミュニケーション

5-1 独り言におけるモダリティ：独り言化形式

カナ・カシラによる脱質問的疑問、疑問+ダロウによる聞き手情報非配慮などは聞き手の存在を考えない文としての発話になる。聞き手が存在する対面的環境での独り言。

(26) (一人暮らしの部屋にノック)「誰かいる！鍵閉めてたかな？今頃誰だろ？」

(27)ケーキ、たーべよっと！

5-2 独り言化と表現の「圧」

(28)幼稚園で泣いている園児に「あれれ？○○ちゃん、どうしたのかな？」

呼びかけているので明確に聞き手を意識しているが、「どうしたの？」よりも「圧」が弱い。応答要求の度合いを下げる。

(29) (京本の顔のコマの後) 藤野「雨降ってきたから帰ろっと」「…またね」

「またね!!」『ルックバック』2021・集英社

「帰ろっ」という独り言だが、事実上、聞き手への発話となっている。「私、帰る」というよりは話しかけ感が弱く「対話の圧」(＝対話上の Face 侵害性)の調整。

5-3 聞き手指向性連続

・会話における聞き手指向性の連続性(参加程度)は連続的に分類できる。

特定の対者めあて文(特定二人称存在・疑問文可能＝聞き手情報配慮が必要)：セッション参加者扱い。対話性キャンセル不可能。

…ただし、焦点化の調整度合い：「大ちゃん、どうしたのかな～」脱焦点化。

非特定の対者めあて文(直接疑問文は不可能)：セッション参加者ではない。論文やラジオなどでは直接の応答は成立しない。しかし、対者ではある。

疑似独り言文：潜在的二人称(存在しても対者不在化表現)・聞き手情報非配慮可。聞き逃し可能。対話性キャンセル可(「あんたに言ったんじゃないよ」)。(学生)「この授業早く終わらないかな～」。(教員)「あれ、こんな時間か。終わろっ」と。独り言化。伝達の言語は不可能(「*～と思う」)。対者存在は認識。

聞き手不在文(演劇的独り言含む)：二人称不可。

セッション非参加者の傍受者環境(聞き耳：「公衆中での演技」としての話題選定や文体選定(丁寧語など対聞き手の要素は回避))

絶対的独り言：伝達の言語は不可能。(文体的自由度あり丁寧語独り言も人による)

5-4 コミュニケーションとしての独り言——“off-record”をめぐる

・FTA(メンツ脅かし)やフェイスワーク論への見直し

・Brown&Levinson1987のoff-recordの再検討：独り言を考える場合、FTAを行うのか行わないのか、がそもそも単純な二値(+-)で決められない。独り言的に言うことでのコミュニケーションはそもそも「成立した発話」でないこともあり得る。

・Brown&Levinson1987(2011)：「伝えたいと思うことがらを直接言わない」。「困った、現金がない、今日銀行に行くのを忘れていた」が「現金を貸してほしい」という意図(p90)などの例。Hintの例としてトートロジー、冗談やあてこすりなど(Goffman1967(2002))。

6 文体としての心内語テキスト

・思考と伝達の間：伝えるように伝えない伝え方、伝えるかのような要素を含んだ思考

・文体としての問題：小説の心内語、日記の文体、漫画の吹き出し

思考を表すが、そこでも対話的要素を含むことはある。聞き手不在でも、疑問と応答といった自己内対話：心内語としての想像的対話。

(30) (冒頭の独話部分) 川口先生を見るだけで胸が痛くなるのはなぜだろう。(略) そう…川口先生は神様だ (『17-21』藤本タツキ短編集・集英社)

・発話としての会話か心内語かにおける解釈上の問題：古典語での「とて」などの解釈：発話か思考かに関する形式上の連続性：古典における心内語の扱い

(31)かきつはたといふ五文字を句のかしらにすゑて旅の心をよまむとてよめる（古今集 410） 「よまむ」：発話？思考？

引用の直接性・間接性（話し手投射）にも関わる（藤田 2000）。

7 おわりに：今後の独り言論の展開へ

- ・思考の言語と伝達の言語ということ。モダリティのあり方を位置づけなおす。
- ・思考と伝達の両面
 - 伝達する中での脱伝達化 独り言的コミュニケーションによる効果。
 - 思考の中での疑似的伝達や対話、呼びかけ。神仏への伝達という思考。
- ・文体ジャンル：「発声する思考」による演劇での独白。マンガの心内語（高橋 2023）。

参考文献

- ゴフマン E. 2002『儀礼としての相互行為』浅野敏夫訳・法政大学出版局（原著 1967）
- 高橋愛子 2023「アニメの心内吐露表現における時代的变化—『サザエさん』の「独り言」と「心内語」について—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』68
- 中川正之 2005『漢語から見える世界と世間』岩波書店
- 西光義弘 2010「ひとりごとの言語学」くろしお出版 HP<https://youtu.be/hkmQKX8gK3E>
- 仁田義雄 1980『語彙論的統語論』明治書院
- 1992「判断から発話・伝達へ—伝聞・婉曲の表現を中心に—」『日本語教育』77 日本語教育学会
- 藤田保幸 2000『国語引用構文の研究』和泉書院
- ブラウン P.&レビンソン S. 2011『ポライトネス』田中範子監訳 研究社（原著 1987）
- 宮地 裕 1979『新版 文論』明治書院
- 森山卓郎 2010「文の意味とイントネーション（同補説）」『日本語学入門』明治書院（宮地裕編）（原著 1989）
- 1990「意志のモダリティについて」『阪大日本語研究』2 大阪大学文学部日本学科
- 1995「『伝聞』考」pp.25-36 『京都教育大学国文学会誌』26
- 1997「独り言をめぐって—思考の言語と伝達の言語—」川端善明・仁田義雄編『日本語文法体系と方法』ひつじ書房
- 2014「『ようにする』命令文と『ように』型指示文」『日本語学』33-4 明治書院
- 2025「文法から見たテキストジャンルの文体論的整理」（近藤泰弘 澤田 淳 編）『日本語文法研究の射程—テキスト・文体・文学との交差—』開拓社

疑似独話の疑似性をめぐって

野田春美（神戸学院大学）

1 独話と疑似独話の区別の難しさ

1-1 独り言（独話）とは

- ・森山（1997）独り言：聞き手なしの発話。文法論上、伝達的環境でなくとも成立する文。

「伝達を目的としない」文と言い換えてもよい。

→聞き手が存在し話し手が聞き手に伝達する発話を行う「対話」と、聞き手を想定しない「独話」は、一見、明確に異なるように見える。

1-2 聞き手が存在する場面での独話と疑似独話

- ・聞き手が存在しても話し手が聞き手への伝達をまったく意識していないと思われる次のような発話は独話と同様に考えられそうである。

(1) (対話中に熱い飲み物を飲んで)「熱っ」

- ・聞き手の存在を明らかに意識しながら、独話であるかのように発話する場合もある。次の(2)は、聞き手との関係によっては、飲み物を出してほしいことを表す、いわゆる間接発話行為となる。聞き手に聞かせようとしていることが明らかであれば、「疑似独話」（聞き手の存在を意識しながら独話であるかのように発話されたもの）と呼べるだろう。

(2) (聞き手に聞こえるように)

「ああ、喉が渴いたなあ。何か飲みたいなあ」

- ・しかし、話しことばにおいて、疑似独話であるか否かの区別は難しい。たとえば、(3) Bの「いいなあ」で、普通体の使用が意図的であるか否かの判断は難しい。

(3) A (目上)「うちの職場は休みとりやすいんで」

B (目下)「わあ、いい {ですね／なあ}。旅行とか行きやすいですよ」

- ・話し手本人に聞いてもわからない可能性がある。次の(4)の「わ、ヤバ。」は、聞き手をまったく意識せずに言ってしまったのか、「感動のあまり思わず普段の表現を使ってしまう無邪気な若者であることを演出する」意図や、「上司に心を許しているという親近感を示す」意図が多少なりともあったのかは、本人にもわからない可能性がある。

(4) (上司に御馳走してもらっている部下が)

「わ、ヤバ。おいしいですね。こんなの食べたことないです。」

1-3 本発表の内容

- ・疑似独話についての確認 → 2.
- ・関連する研究—問題の広がり— → 3.
- ・今後の研究のために → 4.

2. 疑似独話についての確認（野田（2006）（2012）（2014））

2-1 話しことばにおける疑似独話

- ・話しことばでは、丁寧体で接すべき聞き手との対話に普通体が出現している場合は、独話か疑似独話だと考えやすい。（明らかに意図的な場合を除く。）
- ・スピーチレベル・シフトの研究において、思考過程や情報処理過程を言語化した発話と、心情を表出する発話は、丁寧体の対話のなかでも普通体で現れやすいことが指摘されている（陳（2003）など）。
- ・1-2で述べたように、話しことばでは独話か疑似独話かの区別は難しい。疑似性が弱いと考えられる発話、強いと考えられる発話がある。

- ・疑似性が弱いと考えられる疑似独話には、思考や情報処理の過程を表す発話などがある。（傾向であり、思考や情報処理の過程であれば必ず疑似性が弱いというわけではない。）

(5) 6376 11H 女 えっ、旦那さんは一緒に行かなかったんですか↑

6377 11A 女 うん、行かなかった、寝てたからね。

6378 11H 女 あそっか、そっか。 (現代日本語研究会（編）（1997）『女性のことば・職場編』（自然談話データ）ひつじ書房）

- ・一方、心情の表出によって聞き手を非難する発話は、疑似性が高いと考えられる。

(6) 矢野「あのなあ……（セリフが出てこない）」

隆司、いきなり台本で矢野の頬を張る。

矢野「痛いなあ」

(小島康史「ら

せんの素描」p.132, シナリオ作家協会（編）『'91年鑑代表シナリオ集』映人社）

詠嘆を表す「なあ」は森山（1989）にあるとおり、「下降イントネーションが一般的」であり「聞き手に持ち掛けないという意味を積極的に持つ」（p.188）が、(6)のような場面では、あえてそれを聞き手に聞かせようとする、疑似性の高い場合がありうる。

2-2 書きことばにおける疑似独話

- ・エッセイなどの書きことばで独話のような形が選ばれている場合は、基本的に疑似性が強いと考えられる。エッセイ末に現れることも多い。
 - ・疑似独話による心情の表出によって、書き手の本音が出ているように感じられ、読み手にとって身近に感じられる。終助詞「なあ」（例：「面白い人生だったなあ。」、意志形＋「っと」（例：「～ってことにしよっと。」）、感動詞「ああ」なども使われる。
- (7) ああ、こうして原稿を書いている、あっちもこっちも、刺されていないどっちもそっちも、痒い、痒い、痒いよお。 (阿川佐和子「虫の好く女」p.91(エッセイ末), 『いい女、ふだんブツ散らかしており』中央公論新社, 2019)

- ・疑似独話によって書き手の思考や情報処理の過程が示されることで、読み手が書き手の思考や情報処理をリアルタイムで見聞きしているかのように感じられる。

(8) 友人が私の目を見て、言った。

「“色味”の概念がない世界で生きてる？」

そうかも！

私たちはやっとピンと来た。そうか、私は色味の概念そのものがない世界を生き
ているのだ。なんだなんだ、そうだったのか〜！ (朝井リョウ「他力

本願スマートハウス」pp.137-138, 『そして誰もゆとらなくなった』文藝春秋, 2022)

(9) その都度その場で本気になる、というのが、おそらく私と彼の共通点なのだろう。一般論が身についていない、と言い換えてもいい。だからこそ、いちいち逡巡し、憚り、考える。

わかった！ 私の考える男らしさや女らしさとは、つまり、一般論を身につけな
い、ということなのだ。 (江國香織『泣く大人』 pp.126-127, 角川文庫 2004)

- ・書きことばにおける疑似独話は、野田 (2014) で〈親=読^{しん}み手〉意識と呼んだ、読み手との心理的距離を縮めようとする意識のあるエッセイなどに現れる。
- ・エッセイやブログでは、文末に「……」を付加して余韻をかみしめているかのように感じさせ、書き手の心情への共感を望んでいることがさりげなく表現されることもある。

3. 関連する研究—問題の広がり—

3-1 定延 (2016) のコミュニケーション論

- ・定延 (2016) は、「伝達を前提とするコミュニケーション観」の批判的検討をふまえて「あからさまにやってみせる」という発話観」を提案している。「長い廊下における挨拶問題」において、相手との距離が十分に短くなるまで近づいたところで「相手の目を見て「あ」などと言って「相手に気づいてみせ」」(p.138) の行動などの例が挙げられている。「あからさまにやってみせる」というのは必ずしも意図的ではないという。

3-2 自問発話に関する研究

- ・流暢性・非流暢性の研究が進むなか、自問発話に関する研究も行われている。
- ・丸山 (2021) は日本語話し言葉コーパス (CSJ) を用いて、「何」を含む自問発話（「何だっけ」系、「何だろう」系、「何て言う」系）の形式と機能の対応を論じている。「何でしたっけ」のような丁寧体も含まれる。丸山 (2021) は、定延 (2010) の「認知行動をあからさまにおこなう」というフィラー観を参考に、「自問発話によって話し手の心的状態を聞き手に示すのと同時に、「その場で自問してみせる」という行動自体が、自問発話が果たすコミュニケーション上の役割だと考えられる」(p.21) と述べている。

- ・これは、丁寧体基調の談話における独話的発話などについて三牧（2000）が述べた、「思考過程をさらけ出すことによって、防衛的ではない姿勢を示すことになり、聞き手への信頼感を間接的に表明している」（p.44）発話があるという指摘にも通じる。
- ・郭（2024）は、母語話者のほうが学習者（中国語母語話者）より自問発話が多いこと、母語話者は「なんですかね」「なんでしょうかね」「なんだろうな」のように、「だろう」「でしょう」や終助詞「な」「かな」「ね」などとの共起が多いことなどを指摘している。自問発話でありながら、聞き手を意識しているものと思われる。
- ・郭（2024）は、自問発話の発話機能を「名前の検索」「表現の逡巡」「内容・事象の想起」に三分し、「表現の逡巡」（例（10））と「内容・事象の想起」（例（11））は母語話者のほうが多いことを指摘している。（以下の例は、当該部分のみの抜粋。）
 - (10) えーとーその、なんてゆうんでしょう、家族が、一つの家族がいてー
 - (11) 誕生日に嬉しかったのは、えーなんだろう、なんか年齢があがるにつれてけっこう、自分が本当にほしい物になっちゃうので
- ・「なんだろう」のような自問発話は、フィラーとも連続する。山根（2002）では、ナンカ類のフィラーに、ナンテユーンデスカネなどの丁寧体も（自問であれば）含めている。
- ・野田（2017）では、非対話的であるはずの疑いの文が丁寧体でも現れることへの疑問を出発点とし、「でしょうか」、丁寧体＋「かね」の3コーパス（名大会話、日本語話し言葉コーパス（CSJ）、現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）の「Yahoo！知恵袋」）における現れ方を見た。丁寧体の疑いの文には、やわらげた質問の場合と、疑いを提示するが必ずしも情報を求めている場合がある。調査の結果、講演においては「言う」が前接する例が多かった。郭（2024）の「表現の逡巡」に類似している。特に、「です」「ます」等に「かね」が付く形では、「言う」が全 889 例中の半数近くを占めた。
 - (12) でその次にそのえ二つの言葉のこう齟齬って言いますかね#え相克というのが
 どういうことを意味するのかということに触れます
 （日本語話し言葉コーパス（独話・学会）、男性、55 - 59 歳）
 丁寧体でも通常の対話であれば、「って言うかな」といった普通体も使われそうだが、聴衆の存在や講演という場のフォーマリティを意識して丁寧体になっている。
 - 発話内容は自問という伝達を目的としない内容であっても、聞き手の存在や場のフォーマリティを意識して丁寧体になることがある。
 - 「独話／対話」「聞き手の非存在／聞き手の存在」「伝達の意図なし／伝達の意図あり」「普通体のみ／丁寧体あり」の相互の関係は単純ではない。
 - 「独話＝聞き手の非存在＝伝達の意志なし＝普通体のみ」vs. 「対話＝聞き手の存在＝伝達の意図あり＝丁寧体あり」と明確に二分できるものではない。

4. 今後の研究のために

4-1 対照研究の可能性

- ・西光（2010）は、日本語でひとりごとを言う場面でも、英語では現れにくいという。Goffman（1978）をふまえ、「英語では内容がある発言はすなわちヒトにむかって言ったということになる」という。聞き手目当てのモダリティを持たない英語では形の整った表現はひとりごとで言えず、抑えることができない間投詞などのみが使えたと述べている。

- ・村上春樹の『走ることにについて語るときに僕の語ること』（文藝春秋, 2007）の疑似独話は、(13) の英訳では、西光（2010）のいうように、間投的な表現が使われている。

(13) 七十歳くらいの小柄な女性ランナーにも抜かれた。「がんばってね」と彼女は僕に声をかけてくれる。参ったな、これからいったいどうなるんだろう？ あとこの先 40 キロもあるというのに。 (p.149)

A tiny old lady around seventy or so passed me and shouted out, “Hang in there!” Man alive. What was going to happen the rest of the way? There was still twenty-five miles to go. (What I Talk About

When I Talk About Running, 訳: Gabriel, Philip, Vintage Books, London, p.109)

※Sakes [or Heart, Man] alive! (話) (いらだち・驚きなどを表して) なんだと、冗談じゃない (ランダムハウス英和辞典)

- ・他言語との対照については、今後研究を進めていく必要があると思われる。少なくとも日本語を見る限りでは、日本語は独話が言いやすいだけでなく、聞き手にそれを聞かせることに抵抗がない。むしろ、疑似独話の表現効果を利用することもある。さらに、エッセイなどの書きことばでもその表現効果を活かすことがある。

4-2 SNSを対象とした研究の可能性

- ・話しことばに近い書きことばの1つとして、SNSでの言語使用がある。
- ・野田（2014）では、Twitterにおいて、丁寧体による情報発信と普通体による疑似独話が混在する現象を見た。有吉弘行（お笑いタレント）のTwitterは普通体の疑似独話が多かったが、出演情報などの告知は丁寧体であった。

(14) ガリガリくりいむ見ながら寝よう。 (2013年2月26日)

(15) アメトーク収録終了。で今夜のアメトークに出てます。お時間あれば覗き見を。。 (2013年2月28日)

- ・現在の有吉のXでは丁寧体が増えているようだが、疑似独話は今も見られる。

(16) 今日届くという触れ込みに惹かれて頼んだのに届かないのかよ
まあ穏やかに引き攣った笑顔で許そう。 (2026年4月29日)

- ・現在は SNS の情報発信のツールとしての活用が一般化しており、どの SNS で何をどう発信するかには個人差が大きい、疑似独話の出現にも個人差がかなり大きい。しかし、疑似独話が出現しやすいテキストではあり、研究対象にできる可能性はある。

注：野田（2006）（2012）では「擬似」の表記だが、野田（2014）以降、「疑似」としている。

参考文献

- 郭路（2024）「会話における日本語学習者と母語話者との非流暢性の比較研究—自問発話を例として—」『日本語教育』189, pp.32-46
- 定延利之（2010）「会話においてフィラーを発するということ」『音声研究』14-3, pp.27-39
- 定延利之（2016）『コミュニケーションへの言語的接近』ひつじ書房
- 陳文敏（2003）「同年代の初対面同士による会話に見られる「ダ体発話」へのシフト—生起しやすい状況とその頻度をめぐって—」『日本語科学』14, pp.7-28, 国立国語研究所
- 西光義弘（2010）講義配信「ひとりごとの言語学」全 12 回 くろしお出版動画チャンネル
<https://www.youtube.com/@Kurosiopb>
- 野田春美（2006）「疑似独話が出現するとき」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編『日本語文法の新地平 2 文論編』pp.193-213, くろしお出版
- 野田春美（2012）「エッセイ末における読み手を意識した表現」『人文学部紀要』32, pp.39-54, 神戸学院大学人文学部
- 野田春美（2014）「疑似独話と読み手意識」石黒圭・橋本行洋編『話し言葉と書き言葉の接点』pp.57-74, ひつじ書房
- 野田春美（2017）「丁寧体における疑いの文—複数のコーパスにおける「かね」「でしょうか」の現れ方—」加藤重広・滝浦真人編『日本語語用論フォーラム 2』pp.179-206, ひつじ書房
- 丸山岳彦（2021）「自問発話の形式と機能」『ことばと文字』14, pp.13-22
- 三牧陽子（2000）「丁寧体基調の談話にみる独話的発話・直接引用・心情の直接表出—「働きかけ方式」のポライトネス・ストラテジーとして—」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』4, pp.37-53, 大阪大学留学生センター
- 森山卓郎（1997）「独り言をめぐって—思考の言語と伝達の言語—」川端善明・仁田義雄編『日本語文法 体系と方法』pp.173-188, ひつじ書房
- 森山卓郎（1989）「文の意味とイントネーション」宮地裕編『日本語学要説』（講座『日本語と日本語教育』第 1 巻）pp.172-196, 明治書院
- 山根智恵（2002）『日本語の談話におけるフィラー』（日本語研究叢書 15）くろしお出版
- Goffman, Erving（1978）“Response Cries”, *Language* 54(4), pp.787-815, Linguistic Society of America

1. はじめに——語用論からのアプローチ

言語学において統語論（構文論, syntax）は文脈から切り離された文の構造を考察する部門であるのに対し、語用論（pragmatics）は人間どうしがさまざまな言語的・心理的・社会的環境のなかで発話を交換するコミュニケーション活動を総合的・俯瞰的に観察する部門である。理論の性質上、統語論は書き言葉を中心的に扱い、近年の語用論は話し言葉を中心的に扱う傾向にあるが、本質的には話し言葉も書き言葉も統語論と語用論の両方の考察対象となる。

本シンポジウムのテーマである「独り言（独話）」（以下、本発表では「独話」とは何か。日本語文法史において「独話」を論じた論考はいずれも聞き手（本発表の「相手」に相当）の存在の有無を文法性判断に関わる要因として挙げている。「相手」がコミュニケーションの重要な構成要素である以上、「相手」が関与する文の考察は常に語用論的であるはずである。

例えば、(1)は二人の人物 A, B の会話であるとする。

(1) A「今日、学校に行く？」

B「行くよ」

人物 A, B にとって互いが会話参与者であることが明らかな状況の会話であれば、(1)A の「行く」の主語は必然的に人物 B となる。そして、それに応じた(1)B の動詞「行く」の主語も同じく人物 B である。いずれも無形式だが意味上の人称範疇としては(1)A では第 2 人称（相手）、(1)B では第 1 人称（話主）となる。このように発話状況によって効力が決定される人称を発表者は「語用論的人称」と呼んでいる（山岡 2000: 18-20）。

山岡（2008）の「発話機能論」ⁱでは、この会話の発話機能は次のように記述される。

(1) A「今日、学校に行く？」《要求：意志要求》

B「行くよ」 《付与：意志表明》

《 》は発話機能範疇を表す。発話機能を構成する素性としての発話役割（speech role）には主に《要求》（demanding）と《付与》（giving）の二者があり、ここではそれを《発話役割：発話機能》の順に併記している。会話参与者 A, B は会話の目的（=(1)の場合、A が B の行動予定を知ること）と語用論的条件（=(1)の場合、動詞「行く」が B の意志で実行可能であり、当該の事態「B が今日、学校に行くこと」が自明でないこと）の充足を共有することによって、第 2 人称主語の(1)A の発話機能は《意志要求》となり、第 1 人称主語の(1)B の発話機能は《意志表明》となる。決して動詞の終止形言い切りが「意志」の意義を有しているわけではない。

一方、「独話」はここで言う会話の目的や語用論的条件を共有すべき「相手」が存在しない状況での発話であるから、そもそも発話機能は成立するのだろうか。そこで、従前に考察されてきた「独話」とはいったい何であったかを整理、検討する必要がある。次節では、会話の聴者（hearer）の一種である「相手」（addressee）の概念を中心に、会話参与者役割について整理してみたい。

2. 会話参与者役割(participant-role)の整理

会話参与者役割(participant-role)は話者(speaker)と聴者(hearer)に大別されるが、それぞれに下位分類がある。Leech(1983: 13)と Levinson(1983: 68)を踏まえて整理すると、聴者(hearer)には3種の区別がある。①相手(addressee)、②聞き手(receiver)、③傍聴者(bystander)の3種である。相手(addressee)は、話主(addresser) ⁱⁱが発話の送信先として意図した人物であり、発話内で第2人称として表示される。典型的な二者会話(1)では、参与者A, Bは互いに話主と相手の関係を、発話のターンごとに交替する。

(1) 典型的な二者会話の対話

A	B
話主(addresser) →	相手(addressee)
相手(addressee) ←	話主(addresser)

A→B 「(君,) 明日、学校に行く？」

B→A 「(僕,) 行くよ」

発話の送信先として意図されていない聴者を聞き手(receiver)と呼んで区別する。例えば、A, B, Cの三者の会話において話主AがBを相手とした発話では、もう一人のCは聞き手となる。相手Bは第2人称、聞き手Cは第3人称で表現される。

(2) 三者会話における対話

A	B
話主(addresser) →	相手(addressee)
相手(addressee) ←	話主(addresser)
C 聞き手(receiver)	

A→B 「こちら(C)はあなた(B)のご友人ですか」

B→A 「ああ、彼(C)は私(B)の弟です」



ここで、話主Aが相手をBからCに替える。
(Bは聞き手となる)



A	C
話主(addresser) →	相手(addressee)
相手(addressee) ←	話主(addresser)
B 聞き手(receiver)	

A→C 「お兄さん(B)にはお世話になってます」

C→A 「こちらこそ兄(B)がお世話になってます」

一方、会話参与者の枠外で、たまたまその会話を聞いた聴者は傍聴者(bystander)である。

(1') 会話参与者ではない傍聴者

A	B
話主(addresser) →	相手(addressee)
相手(addressee) ←	話主(addresser)

A→B 「(君,) 明日、学校に行く？」

B→A 「(僕,) 行くよ」

X 傍聴者(bystander)

従来、議論されてきた独話には3種ある。独話①は心内発話(思考・認知)の言語表象である。森山(1997)では、(3)「私は帰ろう」は相手のいない発話でも違和感がないとしている。この場合、独話といえども文法性の判断を行う傍聴者が存在する公的な発話と言える。

(3) 傍聴者から見た独話

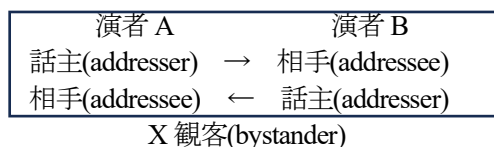
A	φ
A 話主(addresser) →	

A→φ 「私は帰ろう」

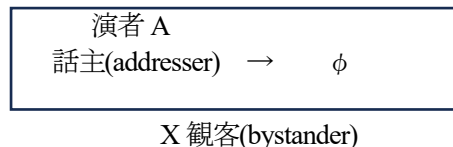
X 傍聴者(bystander)

舞台演劇では演者どうしが行う会話を観客は客席から傍聴者として聴く(4)。舞台上の演者が一人の時に心内発話を台詞にして発声し、観客に聴かせることを演劇の用語ではモノログと呼んでいる(5)。舞台上のモノログは**独話①**の一形態と言える。

(4) 演者の会話を傍聴する観客

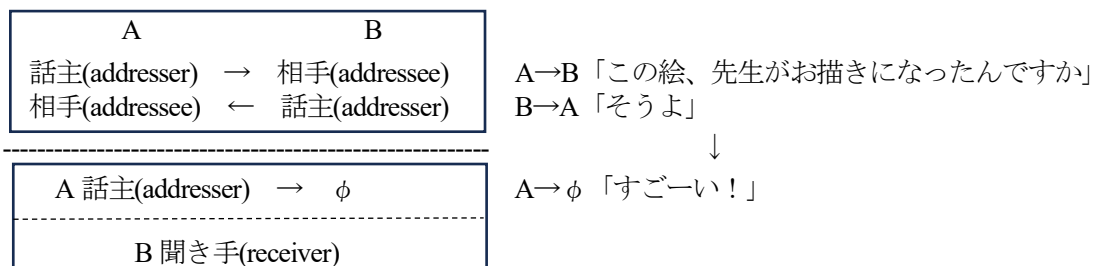


(5) 演者の独話（モノログ）を傍聴する観客



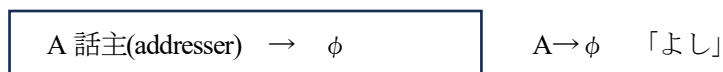
次に、「この絵、先生がお描きになったんですか。すごーい！」の下線部のように、二者の会話に独話的な発話が混入することがある。野田（2006）ではこの種の発話を擬似独話と呼んでいる。当該発話は聴者を**相手**として志向してはいないが、**聞き手**として受信することは了解している。これも**相手**ではない聴者（聞き手）が存在するという意味で**独話①**に含まれる。

(6) 二者会話に混入する独話的発話



独話②は相手、聞き手、傍聴者を含む一切の聴者が関与しない私的言語に言及したものである。西光（2010）では女性が鏡を見ながら化粧が決まったときに「よし」とつぶやく事例を挙げている。但し、私的言語にはコードは不要であり、文法性を判断することは無意味である。

(7) 聴者が全く存在しない独話



独話③は話主と相手の役割を固定して交代しない一方向の発話を独話と称する場合である。具体的にはA 講演、講義、プレゼンテーションなど、話主の役割が定まった発話、B 大勢の相手に対する1人の話主による発話、C 会話参加者の一人が一方向的に話してターンを譲らない場合、などがこれに該当する。独話③は**相手**が存在している点で、独話①、独話②と異なる。

(8) 話主と相手が固定した一方向的な発話



独話③は話し言葉について言う場合が多い。書き言葉では例外的なインターネットチャットを除けば、書き手である話主と読み手である相手の役割は固定しているのが普通であり、そう考えると書き言葉の多くは独話③に該当することになる。

独話①～③全般を網羅的に言及したものに半澤（2014: 1492）がある。

発話機能論では、発話機能を構成する素性として発話役割 (speech role) を認定する。発話役割には主に《要求》(demanding) と《付与》(giving) の2種がある。会話には必ず目的があり、目的の達成を相手に委ねるのが《要求》、自ら目的を達成するのが《付与》である。さらに目的の達成を確認して会話を収束させる第三の発話役割として《受容》(reception) が現れる。個々の発話役割は、発話の目的や語用論的条件に従って多様な発話機能を帯びる。(9)はAとBの二者の会話例である。《 》内には《発話役割：発話機能》の順に記述する。

- (9)では、Aは降雨の有無を知らずBがそれを知っている蓋然性が高い（例えば、Aは部屋の奥にいて、Bは窓際にいる、等）との語用論的条件のもとで発話されれば、Aがその事実を知りたいとの目的をもってBに情報を《要求》していることがBに伝わる。Aの発話が上昇イントネーションならその解釈を補佐する。BはAの目的を共有し、情報を《付与》することでその目的を達成する。最後にAはBの回答を《受容》したことを告げて会話を収束させる。

– 102 –

5. 疑問表現の諸相と独話に現れる疑問表現

山岡（2020）では、形式としての疑問表現と、機能としての《要求》との異なりに焦点を当てて考察した。(14), (15)は疑問表現を相手に投げかけて、相手から回答を得てはじめて目的を達成する《要求》発話である。

話主 A —— 《要求》 —(←)→ 相手 B

(14) お塩を取ってくれませんか。 《要求：依頼》

(15) 少子化問題についてどうお考えですか。 《要求：主張要求》

これに対し、(16)～(21)は同じく疑問表現が用いられてはいるが、話主の意思を相手に伝えることで目的を達成する《付与》発話の例である。

話主 A —— 《付与》 ———→ 相手 B

(16) 君はいったい何を教わってきたんだ。 《付与：非難》

(17) その程度の技術で通用すると思ってるの？ 《付与：非難》

(18) どうしてもっと早く言わなかったんだ。 《付与：不満表明》

(19) そんな割の合わない話に誰が乗るもんか。 《付与：断り》

(20) 誰かと思ったら石川君じゃないか。 《付与：認知表明》

(21) 何て見事な勝ちっぷりでしょう。 《付与：賞賛》

効力の決定には語用論条件の充足が必要で、例えば (16) では相手（君）が教わってきた内容を話主が知っていて情報を《要求》する必要性がないことを会話参加者が共有していれば、必然的に当該発話には《付与》発話の解釈しか生じない。(17)～(21)でも同様である。

独話に疑問表現が現れることもある。(22), (23)は一人で蟻地獄を見つけた際の独話である。

話主 A —— 《自己付与》 ———→ φ

(22) これが蟻地獄か？ 《自己付与：疑問表明》

(23) これが蟻地獄か。 《自己付与：認知表明》

命題に確信が持てない状態での発話なら(22)《疑問表明》であり、確信をもって特定できた状態での発話なら(23)《認知表明》となる。《認知表明》は仁田（1987）の「自問納得」に相当する。終助詞は疑問の意義を持つとされるが、(23)では従前の疑問が解消されたことを語用論的な効力として表している。

二者の会話でこれと同じ命題内容を異なる発話役割にて発話することもできる。(24)は蟻地獄を知らない人物 A が蟻地獄をよく知る人物 B に尋ねるという状況で成立する会話である。

(24) 話主 A —— 《要求》 —(←)→ 相手 B

A1: これが蟻地獄ですか？ 《要求：陳述要求》

相手 A ←—— 《付与》 ——— 話主 B

B: ええ、そのとおりです。 《付与：陳述》

話主 A —— 《受容》 ———→ 相手 B

A2: へえ、これが蟻地獄ですか。 《受容：認知表明》

B の《陳述》を受けた後の A の《認知表明》を擬似独話に置き換えることもできる。

(24') 話主 A —— 《自己付与》 ———→ α

A2': へえ、これが蟻地獄か。 《自己付与：認知表明》

同様に考えれば、先の(16)～(21)もまた、相手のいないところで《自己付与》すれば独話とし

での発話になり得ることが確認できる。

(25)~(28)のような疑問表現は会話にも独話にも現れ得るが、会話の場合と独話の場合とで発話役割、発話機能が異なる例である。(25), (27)は会話の一部、(26), (28)は独話である。

- (25) 話主 A —— 《要求》 —(←)→ 相手 B
このお酒、よくないのかしら？ 《要求：陳述要求》
- (26) 話主 A —— 《自己付与》 ————— α
このお酒、よくないのかしら。 《自己付与：疑問表明》
- (27) 話主 A —— 《要求》 —(←)→ 相手 B
あいつ何て言ってたっけ？ 《要求：報告要求》
- (28) 話主 A —— 《自己付与》 ————— α
あいつ何て言ってたっけ。 《自己付与：疑問表明》

このように見ると終助詞カの意義は疑問・不定を表すのみで、質問としての問いかけ性は、話主の目的が相手との間で共有された状況下で、《要求》発話に疑問表現が用いられることによって、効力として生じる機能と考えるのが妥当である。

以上、主に話し言葉における独話について論じてきたが、日本語文法論での疑問表現は書き言葉を念頭に議論されたものが多い。安達 (2002) では〈質問〉ではなく〈疑い〉を表す形式として「だろうか、かな、かしら、かね」を挙げている。これらは読者を相手(addresssee)として筆者の疑問の解消を《要求》するものではなく、筆者の疑問を《自己付与》した《疑問表明》を、読者を聞き手(receiver)として共有することに用いられている。したがってこれも一種の独話①と言える。これらの形式は話し言葉なら独話や擬似独話の《疑問表明》に現れやすいが、会話の《要求》発話にも現れ得ることは(25)でも見た通りである。

注

- i) 山岡政紀 (2008) の発話機能論は、Halliday(1985/1994²)の選択体系機能文法における「発話機能」(speech function)をもとに、各発話機能範疇を発話の目的と語用論的条件をもとに定義した厳密を期した理論。
- ii) 同様に話者(speaker)にも3種の区別があるとしている。①話主(addresser)、②話し手(spokesman)、③起点(source)である。話主は相手(addresssee)から見て自分を送信先として意図して発話する送信元を指す。

参考文献 (副題省略)

- 安達太郎 (1999) 『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
- 安達太郎 (2002) 「質問と疑い」『モダリティ』第5章、174-202, くろしお出版
- 加藤陽子 (2010) 『話し言葉における引用表現 引用標識に注目して』くろしお出版
- 国立国語研究所 (1963) 『話しことばの研究(2)—独話資料による研究—』秀英出版
- 西光義弘 (2010) 「ひとりごとの言語学」講義動画配信資料 くろしお出版
- 仁田義雄 (1987) 「日本語疑問表現の諸相」『言語学の視界』179-202, 大学書林
- 仁田義雄 (1991) 「意志の表現と聞き手存在」『国語学』165集 1-13, 国語学会
- 野田春美 (2006) 「擬似独話が出現するとき」『日本語文法の新地平2 文論編』193-213, くろしお出版
- 半澤幹一 (2014) 「独話」『日本語大事典 (下)』1492, 朝倉書店
- 森山卓郎 (1990) 「意志のモダリティについて」『阪大日本語研究』2, 1-19, 大阪大学
- 森山卓郎 (1997) 「「独り言」をめぐる」『日本語文法 体系と方法』173-188, ひつじ書房
- 山岡政紀 (2000) 『日本語の述語と文機能』くろしお出版
- 山岡政紀 (2008) 『発話機能論』くろしお出版
- 山岡政紀 (2020) 「日本語疑問表現の会話における発話役割」『日本語語用論フォーラム3』43-73, ひつじ書房
- 劉悦 (2025) 「終助詞「かな」の使用に見られる配慮」『ことば』46(0), 91-108, 現代日本語研究会
- Halliday, M.A.K. (1985/1994²) *An Introduction to Functional Grammar*. 1st/2nd ed. London: Edward Arnold.
- Leech, G. (1983) *Principles of Pragmatics*. Longman.
- Levinson, S. (1983) *Pragmatics*. Cambridge University Press.
- Wittgenstein, L. (1968) "Note for Lectures on "Private Experience" and "Sense Data"", *Philosophical Review* 77: 271-320

「と」と独り言

—自分のディスコースに独り言を取り込むことについて—

山口治彦（神戸市外国語大学）

1. はじめに

本稿は、「と」もしくは「っと」で節を終える以下のような発話を取り上げる。

- (1) a. やーめたーっと／いーち抜ーけたっと／知ーらないっと
b. [携帯に文面を打ちながら] お会いするのを楽しみにしています、と
c. [電話で] うん。はいはい。大丈夫だって。今、忙しいから。じゃーな。[電話を切る。] そーゆーとこだぞ、 っと。
(荒川弘『銀の匙』15)

(1a)は定型化された慣用的な表現である。独り言として発せられることが多いが、聞き手がいる場合は目下の行為・出来事にかかわらないことを決めたマイルドな宣言として受け取られる。(1b)は携帯に文面を打ちながら声に出したという設定の作例であり、(1c)は、電話を切った後でその相手には聞こえることなく漏らしたせりふである。いずれの発言も、聞き手を明確に志向するものではなく、独り言として解釈できる。

このような例を見ていると、「と（っと）」は独り言の標識であるかのように感じられる。だが、そもそも独り言に標識が必要なのだろうか（1つ目の疑問）。無意識に口をついて出るのが本来の独り言であるのなら、何もつけずにそのままつぶやくのが自然なはずだ。また、ここでの「と（っと）」の用法は引用の助詞「と」の拡張例と考えて問題ない（加藤 2010: 164-170 を参照）が、引用とは基本的に他人のことばを自分のことばと区別するために他に対して行う行為である。とするなら、（少なくとも建前の上では）聞かせるつもりのない自分のことばをなぜ「と（っと）」によってわざわざ区切って提示するのだろうか。つまりは、独り言の「と（っと）」は引用という行為とどのようにかわるのだろうか（2つ目の疑問）。さらには、独り言は「と」で引かれることもあるが、それよりも1モーラ多い「っと」によってしばしば提示される。なぜ、独り言では「っと」が用いられるのだろうか（3つ目の疑問；平川裕己氏の指摘による）。

このように、(1)の「と（っと）」止めの発話には疑問がいくつかついてまわる。これらの疑問に答えるのが本稿の目的である。3つの疑問の順序に従って考えていこう。

2. 独り言に標識が必要か

真正の独り言に標識は不要のはずである。では、(1)に見られた「と（っと）」は何をし

ているのだろうか。「と」の働きについては次節で引用に絡めて探るが、ここではまず、典型的な独り言と「と」による独り言とがどのような点で異なるのか考えてみよう。

森山（1997: 176）は「思考の展開を反映したものでなければならない」と独り言の特徴を記した。これを独り言の中心と考えると、「と」による独り言は、提示できる表現に制限がない点と（少なくとも）「と」を発した時点で独り言であることに話し手が自覚的である点でこの中心から隔たる。

まず、提示できる表現の幅について考える。典型的な独り言はその時点で起きている「思考の展開を反映」するが故に、確定した意志、「と思う」などが付された内的思考そのもの、そして伝聞などは、独り言として成立しない、と森山は指摘する。ただし、これには条件があって、「一つの文として独立していないような環境」（1997: 174）では（たとえば、従属節内部では）その限りではない、と森山は断っている。「と」による独り言は他の節に従属しているわけではないが、「と」に率いられているので、従属節内と同じふるまいになると予想される。そして、「と」による独り言には提示できる形式に制限がない。たとえば、(1b)の文脈では「やめた方がいいと思います、と」と「と」でつぶやける。

次に、「と」による独り言は、思わず口をついて出た独り言であっても、聞き手にわざと聞かせる独り言であっても、「と」を発した時点で話し手は独り言を発していることに対して意識的であるという点では一致する。そして、「と」と発言した時点で独り言は終了する（cf. 加藤 2010: 164-170）。独り言の終了が明示されるので、その後には聞き手目当てのことばが続くことになる。

(2) すず：よっちゃん みぼりん 知ってるの？

佳乃：みぼりんの お兄さんを 知ってるの 上司なんで

すず：ふーん

佳乃：さーて 明日 早いから 寝よっと お先！ （吉田秋生『海街diary』8）

(2)で佳乃は「明日 早いから 寝よっと」と妹のすず（やその場にいる姉）に聞こえるように独り言を提示する。もう就寝するというマイルドな宣言となるが、独り言という体裁を取るだけに聞き手はこの部分に対して口をはさみにくい。佳乃は続けて「お先！」と有無を言わず自分の部屋へと退出する。上司に対して密かに抱く好意について妹や姉に詮索するいとまを与えないためである。結果として、独り言が聞き手目当ての談話の中に「と」によってうまく収められている。このように、「と」は自分の談話に引き入れやすいように独り言に区切りをつけて構造化することができる。

3. 独り言の「と」は引用とどのようにかわるのか

では、本来引用の標識であるはずの「と」がどのような経緯で独り言と結びつくのだろうか。「と」による独り言の特徴を求めるにあたって、「と」の用法のみに着目するのではなく、対話において「と」と「って」が使い分けられている様子を観察し、「と」と「っ

て」の用法全体の中で独り言の「と」がどう位置づけられるのかを確認する。

対話において相手や自分の直前のことばを繰り返したり、自分や相手が心に抱くことばを引用する際には、述語に接続しない形式（「と／って」止めの発話）が頻用される。そして、そのような助詞止めの発話では「と」と「って」が対立的に用いられる。（ただし、「と言った」のように述語が連なる形式では、両者の対立は目立たなくなる；山口 2009: 170。）まずは、相手の直前のことばや相手が心に抱くことばを提示する用法を見る。

(3) 坂下係長： [電話応対中] これから… ですか？ あ はい それでは……

佳乃： [係長の応対を聞いて、心の中で] ^(a)なんだったって!? 今なんて言ったっ!?
「これから」ってなんだよ 「これから」どーすんだよ

坂下係長： [電話中] はい わかりました では7時に お待ちして います

佳乃： [心の中で] ^(b)なんだと——っ!!! (吉田秋生『海街 diary』3)

佳乃は上司坂下の電話の受け答えから、急な残業の危険を察知している。(3a)の「なんだったって」の段階では、まだ佳乃の心の中で残業は確定していない。信じたくもないと思いつつも、「今なんて言ったっ」「これから」ってなんだよ」と不安が的中するか確かめたい気持ちが前に出る。これに対し、(3b)の「なんだと——っ」は「7時にお待ちしています」という上司のことばに駄目を押された後のせりふである。この場合、(3a)と(3b)の順序を入れ替えると不自然な談話になる。相手が今し方述べたことばを繰り返すとき、「と」はしっかりと受け止めたことばを繰り返すのに対し、「って」は受け止め切れていないことばを繰り返すのに用いられる傾向が強い。しっかりと受け止めたことばをわざわざ繰り返すのは、繰り返さざるを得ないほどの強い感情が話し手にあるからだろう。他方、「って」止めのエコーは、聞き取れなかったことばに対する確認や聞きとめたことばに対する疑義（翻って是認）など、幅広い反応が可能になっている。このような問い返し用法は、加藤 (2010) の分類ではどちらも「理解困難表示用法」もしくは「意外感表示用法」と名付けられたが、この用法における「と」止めと「って」止めが伝えるニュアンスは異なる。

相手に成り変わりそのことばを提示する用法もある。(4)と(5)がその例である。

(4) 軒下：てことは 小学生の時 甘春先生に影響されて 技師になったけど 久しぶりに
再会したら 当の本人には 忘れられてた…と

五十嵐：………はい (横幕智裕・モリタイシ『ラジエーションハウス』13)

(5) 男：「家」に 帰りてえよ 売っち まったから もうなーんも 残っちゃ ねえがな

ハート：退路はない ということは 覚悟を持って この街に 降り立った

男：…まあそうだ 泣き言 言ってんじゃ ねえって? (オノナツメ『BADON』6)

(4)は、相手のことばを取りまとめて提示する用法で、引用者が取りまとめていることは発話冒頭の「てことは」からも窺える。相手のことばを組み立て直すにあたって、引用者

が積極的に介入してとりまとめるときは、「と」止めでないといけない。他方、相手が言いそうなことばを提示し、その考えに同意しないことを示したいときは、「って」止めになるのがふつうだ。(5)で男は先に述べた「家」に「帰りてえよ」ということばに対し、対話者のハートが言いそうな批判を「って」で提示してみたのである。加藤(2010)は(4)と(5)のような例を「帰結確認用法」と名付けている。両者を同じカテゴリーに分類することに異論はないが、引用部に対する心的態度は、両者の間で対照的と言っていいほど異なる。

次に、相手ではなく、自分のことばを伝える際の「と／って」について見てみよう。

- (6) 五十嵐：まずは正しいポジショニングで再撮影するというのが はい よろしいかと
(横幕智裕・モリタイシ『ラジエーションハウス』3)
- (7) 八軒：校長先生、 本当に大丈夫でしょうか…
校長：なにが？
八軒：価格とか… 売り方とか… これで よかったのかな って……
(荒川弘『銀の匙』10)

(6)の五十嵐は、「と」をつけているので断定はしないものの、自分の意見を聞き手に対し自信を持って提示している。この場合に「って」を用いてしまうと、誰の意見かわからないものになってしまうので、「と」止めでなければならない。(7)の八軒は「大丈夫でしょうか」というせりふが示すように、自分の意見を迷いつつ提示している。この場合は「って」止めの方が相応しい。(6)と(7)は、どちらも加藤(2010)の言う「帰結述べ立て用法」に相当するが、「と」と「って」が伝えるニュアンスはここでも異なる。

自分の意見を伝える「と／って」の二つ目のペアは独り言と再言の例である。

- (8) 御影：「合格したら まっさきに 連絡するね」…と。 (荒川弘『銀の匙』14)
- (9) a. すず：ちっ 違い ますよっ
b. すず：違います ってば!!
c. すず：違うって いってるじゃ ないですかあ——っ!!
(吉田秋生『海街 diary』2)

(8)は(1b)と同様の例で、携帯にメッセージを打ちながら発したことばである。誰にも届いていない自分のことばは「と」でないと伝えられない。他方、(9b)は自分の発言を聞き入れない相手に対し前言を繰り返す用法で、(9a)から(9c)の順序で発せられたものだ。すでに述べたことばは相手に届いているという前提で再言するとき、「と」ではなく「って」が必要となる。(9b)のように前言を繰り返す訳ではないが、相手に対して「大丈夫だって」((1c)を参照)「わかってるって」と請け合う際にも「と」ではなく「って」が選ばれる。これは(9b)のような再言の用法から拡張したものだろう。加藤(2010)によると、(8)は「自己確認納得用法」に、(9)は「言明用法」にそれぞれ分類される。

話しことばの引用表現について綿密で網羅的な研究を行った加藤(2010)は、(3)から(9)の用法をすべてカバーしている。足りないのは、助詞止めの形式では「と」と「って」が対立し合い、使い分けられているという視点である。表1はこれまでの観察をもとに、対話のやり取りにおいて自分(話し手)のことばと相手(対話者)のことばを「と／って」

がどのように区別し、提示の作業を分業するのかを整理したものである。

表1:「と」と「って」の対立関係：対話において助詞止めで用いられる場合

	「と」	「って」
相手（2人称）のことばを引用する	a. しっかりと受け止めたことばを繰り返す（そのことばに対し強い感情を持つ） (3a) なんだと——っ!!!	b. 受け止め切れていないことばを繰り返す（聞き取り不可，疑義，是認など幅広い反応を示す） (3b) なんだって!/?
	c. 相手のことばを自分なりにとりまとめる（引用者が引用部に積極的に関与する） (4) てことは 当の本人には忘れられてた…と	d. 相手が言いそうなことばを言い当てる（多くはそのことばに反論するため） (5) 泣き言 言ってるじゃねえって？
自分（1人称）のことばを引用する	a. 自分の確かな考えを迷いなく提示する（断定はしないものの，自信をもって伝える） (6) 再撮影するというのがよろしいかと	b. 話し手にとって不確かな考えを聞き手に迷いつつ提示する (7) これでよかったのかなって
	c. 誰にも届いていない独り言として提示する（しばしば「と」になる） (8) 合格したらまっさきに連絡するね…と	d. 聞き手に届いているはずのことばを繰り返す（相手に伝わっているという体裁をとる） (9) 違いますってば!!

対話のやり取りにおいて，どのようなことばを「と」と「って」が分業しつつ取り上げるのが，表1によって一覧できる。「と」による独り言もそのような「と」と「って」の対立の中に位置づけられる。ここでは従来の引用研究が中心としてきた，（引用の場から遠隔化された(displaced; Chafe 1994)）過去のことばを報告・再現する用法（語りの話法）は取り上げていない。(1)の独り言の用法を位置づけるために，この用法が関係する対話のコンテキストにおいて，話し手と聞き手が互いにとって近接的な(immediate; Chafe 1994) ことばを引用することで何をしているのか（対話の話法）に着目している（対話の話法と語りの話法については，山口 2009 を参照）。

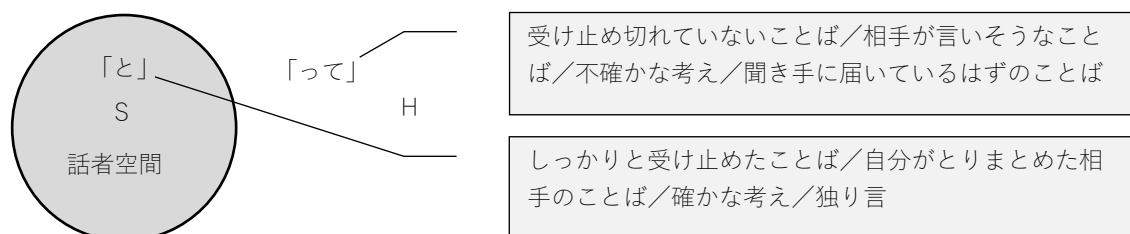


図1：対話のやり取りにおいて「と」と「って」が引用することば

表1における「と」と「って」の対立を，もう一段抽象度を上げて図式化したのが図1である。話し手にとって心理的に近いことばは，自分の領域（縄張り）に置くように「と」によって提示し，そうではないことばや聞き手の領域にあると考えられることばは「って」によって提示する，と考えてみるのだ（山口 2009:180 の考えを少し改訂している）。さらに，「と」は1モーラ，「って」は2モーラの語彙であるが，このモーラ数の多寡は話し手が当該のことばに対してもつ心理的な距離感に類像的(iconic)に対応するものと考えられる。このような枠組みにおいて「と」と「って」の用法を捉えた場合，独り言を提示するのに「って」ではなく「と」が用いられるのは，ごく自然なことである。

4. なぜ独り言はしばしば「っと」によって提示されるのか

残る問題は、独り言を提示する際にしばしば「っと」になるのはなぜか、である。まず、(10a)と(10b)を比較してみよう。

(10) a. 再撮影するのがよろしいかと

b. ごめん今日は行けなくなりました、と

c. ごめん今日は行けなくなりました、っと [送信ボタンを押す]

(10a)は自分の確かな考えを迷いなく提示する「と」止めの用法で、(10b)は「と」による独り言の例である。携帯に文面を打ち込みつつ発している。(10a)は発話の最初から聞き手を念頭においた発言がなされており、聞き手目当てという点では切れ目のない発話と言える。一方、(10b)は「ごめん今日は行けなくなりました」の部分が独り言であり、その独り言は「と」の前で終了する。そこにポーズが置かれることも多い。つまり、(10a)のような「と」による引用と比べると、独り言の提示は「と」の前での切れ目が大きい。図1にちなんで言うと、話者空間の内と外を隔てる敷居が通常より高く感じられる。このことは、(10c)のように文面を打ち終えたら即座に送信ボタンを押す、という状況を考え合わせるとわかりやすくなる。聞き手を（少なくとも建前では）意識しない「と」による独り言に、聞き手が強く意識される送信ボタンを押すという行為が続くと、その継ぎ目にあたる「と」の部分に隔たりを感じやすくなる。(10c)のような文脈だと「と」よりも1モーラ多い「っと」の方がしっくりくるのではないだろうか。先の節で見た「と」と「って」に反映される類似的な距離感が「と」と「っと」の間にも見られると考えるのである。

独り言と「と」にまつわる複数の疑問から稿を起こしたが、対話において「と」と「って」が図1で示したような基準で使い分けられていると考え、「と」と独り言との繋がりも理にかなっているように思える。引用は報告・再現のためだけに行われるのではない。対話のやり取りにおいて、話し手と聞き手は意思疎通に資するように互いのことばを引用してその受け取り方を調整している（山口2009）。「と」による独り言も、その中の一つなのである。

参考文献

Chafe, Wallace. 1994. *Discourse, Consciousness, and Time: The Flow and Displacement of Conscious Experience in Speaking and Writing*. Chicago: The University of Chicago Press.

加藤陽子. 2010. 『話し言葉における引用表現：引用標識に注目して』くろしお出版.

森山卓郎. 1997. 「「独り言」をめぐって：思考の言語と伝達の言語」川端善明・仁田義雄（編）『日本語文法：体系と方法』ひつじ書房. pp.173-188.

山口治彦. 2009. 『明晰な引用、しなやかな引用：話法の日英対照研究』くろしお出版.

大会企画運営委員会からのお知らせ

1. 研究大会応募要旨の分量の変更について（口頭発表・ポスター発表）

次の大会（2027 年度春季大会）より、口頭発表・ポスター発表の応募要旨の分量について、現行の「A4 判用紙 1 ページ以内」から「A4 判用紙 2 ページ以内」に変更することになりました。これまで、図表・参考文献も含めて 1 ページ以内となっていたましたが、この制約のために、先行研究への言及・具体例や図表の記載・根拠の十分な提示など、要旨において重要な箇所であるにもかかわらず、割愛せざるをえなくなってしまう場合があるという問題が指摘されていました。委員会でもこの点を重くみて、今回、上記の変更を決定した次第です。1 ページあたりの字数については、これまで同様制限は設けません。ただし、読みやすさには配慮してください。

今回の変更は、1 ページでは十分に説明が尽くせないケースを想定してのものであり、必ず 2 ページ分の要旨を書かなければならないということではありません。したがって、分量が少ないことを理由に応募不受理となることはありません（2 ページを超えた分量の要旨で応募された場合には、従来通り、内容の如何にかかわらず不受理となります）。

なお、ワークショップの応募要旨については現行通り A4 判用紙 2 ページ以内とし、変更はいたしません。

2. 「オープン学生セッション」の一時休止について

現在、春と秋の研究大会で行われている「オープン学生セッション」につきまして、2027 年度春季大会をいったんの区切りとし、今後の方向性について次期委員会で検討することとなりました。

この企画は、2021 年度秋季大会に当学会の学生会員を対象に「学生セッション」として始まり、その後、2023 年度秋季大会からは対象を非会員の学生にも広げて「オープン学生セッション」として実施してきました。この間、細かな変更を加えつつ、より良いセッションのあり方を模索しておりましたが、大会運営と並行しての検討には限界があることから、いったんセッションを閉じ、検討のための十分な時間を取ることを委員会で決定いたしました。

したがって、現行の「オープン学生セッション」としての実施は次回の 2027 年度春季大会が最後となります。今後も研究大会の活性化のための企画は検討していく所存ですので、ご理解のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

以 上

日本語学会2026年度秋季大会予稿集
発行日（ウェブ公開日）：2026年10月10日
大会会期：2026年10月24日・25日

日本語学会2026年度秋季大会連絡会

大会実行委員 櫛引祐希子（委員長），林由華（副委員長），岩田美穂，中崎崇（兼任），
森田耕平，松浦年男（オブザーバー）

大会企画運営委員会 高木千恵（委員長），有田節子（副委員長），矢田勉（副委員長），
大槻知世（委員長補佐），岡田一祐，小川晋史，久保蘭愛，小出祥子，佐伯暁子，田村早苗，
堤良一，中崎崇，中澤光平，永谷直子，森勇太（委員長補佐），山本佐和子，幸松英恵

事務局委員会 川瀬卓（事務局長），富岡宏太，麻子軒

広報委員会 市村太郎，荻野千砂子，河野光将